神様の絵の具

蔡鷲娟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様の絵の具

【Ｎコード】
Ｎ８０９７Ｚ

【作者名】
蔡鷲娟

【あらすじ】
交通事故で恋人を失った高校生のアキ。悲しみにくれる彼女を見守る家族。ある朝、アキの目の前に翼を持った天使が現れた。それは、失った恋人と同じ姿をしていて……。空に雲を描くための道具、“神様の絵の具”を携え、天使の姿でアキの前に現れた隼人の本当の思惑は何か。そしてアキの母親の抱える秘密とともに、生きている人と死んでしまった人がほんの少し関わり合う。奇跡を起こすほどに想いあう恋人の話であり支えあう家族の物語。

序

青年は空の中に立っていた。

それはちょうど、透明なガラスの板の上から、地上を見下ろしているような感覚。

けれども東京タワーの展望台もこんなに高くはなかったし、と青年—隼人(はやと)は内心でごちる。足元もそうだが周りに一切掴まれるものもないことが、より一層の恐怖をあおって無意識に体が震えた。

茶色がかった短い髪を風に躍らせた隼人は、確かに立っているというのに足元には何もないという不安感にやっとの思いで慣れ、この状況を作り出した隣に立つ小さな老人を横目で見た。

隼人の腰ぐらいまでの身長しかない、小柄な老人は、ふさふさの白髪と膝近くまで伸びた白いふわふわな髭がご自慢のようだ。絵本の世界から飛び出してきた小人のような様相であるが、笑い方が独特で、歯をむき出しにして「しっしっし」と笑う。だがどんな顔をしても可愛らしい部類に入ってしまう、そういう得なタイプだ。先ほど聞いたところによると、雲を司る神様なのだという。

この小さな神様と対面してから十分も経っていない。ものすごく気さくに声を掛けられ挨拶し、気がついたらこの見渡す限り遮るもののない空の上にいた。もし高所恐怖症だったら今頃気絶していただろうな、と隼人は全くどうでもいいことを考えため息をつく。この世界に来てから今までの常識やらなにやらは全く通用しないことを痛感していたため、この突飛な状況を受け入れられるだけの余裕

はあった。当の老人は先ほどから懐を探り、何かを探しているようだ。

小さな空間をどれだけ整理できていないのか、しばらくごそごそしていたが、ようやく何か缶のようなものを引っ張り出した。自慢げに、にっ、と笑って見せてくれたその缶の中に入っていたのは、無色透明の液体。銀色の缶の底が見えるほどに透明であるが、水のようにさらりとはしておらず、とろっとしているようだ。

老人はにやりと笑って「これは特殊な絵の具なのじゃ」と言った。絵の具だ、と言われても、隼人の記憶ではこんな色の絵の具を使った覚えはない。透明ではただ紙が濡れるだけだと首を傾げる。

にやにやと笑ったままで、老人はおもむろに缶の中に指を入れ、その絵の具をすくった。皺だらけの指に光るその液体は、透明な蜂蜜のようにとろりと滴った。

一体それで何をするのだろう、と隼人が考えていると、老人は絵の具をつけたその指を、目の前の空に向かって横一文字に薙いだ。すると。

青い青い空の中に突如現れた白い雲。

それは老人の指が走るほうへ緩やかに伸びていく。隼人が声もなく目を瞬かせているのをちらりと見た老人は、楽しそうに笑いながら更に絵の具を指に乗せ、青を埋め尽くすように真っ白な雲を連ねていく。

先ほどまで雲ひとつない、文句のない快晴だったはずの空に、今ひとつ、またひとつと生まれていく雲。隼人は無言のまま、老人を見つめた。雲を司る神なのだと、そういった老人を。

「しっしっし」

しわしわの顔にさらにしわを寄せて老人は笑った。体の揺れにあわせて、ご自慢の白い髭もふわふわと揺れる。

隼人は、もう一度雲に目をやった。

青空にまっすぐに伸びた白いライン。強い風に流されてその姿を徐々に変化させ、そして緩やかに空に溶けていく。

隼人は思わずため息をついた。

ああ、こんなふうに

こんなふうに雲を描くところを見せてあげられたらなぁ

「行くか？　見せに」

老人は、透明なその絵の具に濡れた指を動かしながら言った。目線は雲の方に投げられているが、間違いなく自分に向けて発せられた言葉に、隼人は瞬いた。

「え？　はい？」

まるで心を読まれたように向けられた突拍子もない言葉に正直理解が追いつかず、聞き返してしまう。

「行ってもいいぞ。おぬしが見せたい者のところへ。わしが許す」

そっけなくも優しい言葉に、隼人は瞳を瞬かせた。許す、とそんな言葉ひとつで行き来できるような世界ではない。それぐらいは隼人にも十分分かっていた。隼人が、隼人として存在していられるだけでも驚きで、幸せなことだと思っているのにまさか会いに行ってもいいだなんてどんな奇跡だろうか。ああ、でも。

目の前にいるこの小さな老人が“神”ならば。そんな奇跡も奇跡ではないのかもしれない。

隼人は見上げてくるキラキラした視線を受け止め微笑んだ。そして大きく息を吸って吐き出す。戸惑いを、打ち消すように。

―会いにいける。きみに。

ただそれだけの想いを胸に、隼人は目を輝かせた。

「よろしくお願いします！」

「ではその前に修行じゃー。描けんことには見せられんぞー」

勢い良くお辞儀をして宣言した隼人に対し、非常に暢気な調子で語尾を延ばして言った老人のその口調に、隼人は思わずくすりと笑った。この羊のようなもこもこ老人、見た目以上にかわゆい。

「はい、頑張ります！」

若者らしい元気のよい返事に、小さな老人は元々細い目をさらに細めた。

序（後書き）

お話の骨格は数年前から、そしてお話の全体の流れが決まったのも３月１１日の震災の前でした。人の生き死にを扱う題材で、正直戸惑いもありました。でもこんなファンタジーがあってもいいのではないかと私は思います。少し長くなりますが、最後までどうぞお付き合いください。

1

いない。キミが。
どこにも、どこにも。
どうして、なの？

「アキ、ご飯できたよ」

縁側に座り込み、ぼーっと庭を眺めていたアキに、長兄のハルが声をかけた。

夏真っ盛りの八月、夕方の庭には大輪の向日葵がまるで黄色い壁のように一面に咲き誇っている。さわさわと大きな緑の葉を風に揺らし、その存在を声高に主張する。

ちょうど縁側が陰になるように造られた棚に、キウイと葡萄が旺盛につるを伸ばし、その大きな葉を元気よく広げる。緑のカーテンに遮られた太陽の光は、夕方なのもあってだいぶ柔らかい。

鮮やかな水色のワンピースを纏い、ウェーブのかかった黒髪を背中に流したアキは、蝉の耳障りな鳴き声すら相殺する静かさを周囲に放ち、まるで一幅の画のようにそこに存在していた。

大学生である長男のハルは、学生の特権である夏休みをフルに利用して、今一番の心配の種であるただひとりの妹、アキにかかりっきりであった。体力を生かしたアルバイトに精を出しつつ、やらなくてはならない課題を適当に片付け、空いた時間のすべてでアキの世話を焼く。健康で体力が有り余るほどでよかったと、今ほど感じたことはない。時間は買いたいほどに欲しいが、全ては大切な妹のため。

だが当のアキは、呼びかけられたことにさえ気付かぬ様子で、微動だにしない。呼吸しているのかすら疑わしいほど、風景に溶け込んだ無機質な姿。目線の先にあるのに、咲き誇る向日葵の鮮やかな黄色さえ映さない暗いアキの瞳に、ハルはその広い肩を落とし、小さくため息をついた。

「アキ、ご飯だよ」

今度は肩にそっと手をやって呼びかける。アキはびくりと体を震わせはっと弾かれる様に顔を上げ、ハルを見た。そして瞬時に花の様な笑顔で笑った。

「わ、ハル兄（にい）、びっくりした。呼んでくれれば行ったのに」

明らかに驚いたのにそれを必死で誤魔化すアキの様子に、ハルは痛々しさを感じその頭を撫でた。

「呼んだよ。大声でな。……ほら、行くよ」

「はーい」

アキは元気に返事をしてすぐに立ち上がった。しかしその瞬間にふらりとよろめいた。慌ててすぐ傍にいたハルにしがみついて、バツが悪そうに微笑んで言う。

「ずっと座ってたからかなぁ？　はは。……今日の夕飯なぁに？」

アキの足元がふらついたのを見逃さなかったハルは咄嗟にアキの身体を支えた。最近はいつもこうだったから、立ちくらみを想定していつも注意を欠かさない。ハルはやっぱり今日も、と思って一瞬険しい表情をしたが、すぐに笑顔に戻って言った。

「ナツ特製の天ぷらにそうめんだ。今日みたいな暑い日には最適だろ？」

その言葉にアキはにっこり微笑んだ。

「うん、そうだね。早く行こう！」

「……アキ」

「ん？　何、ハル兄？」

自分の腕から空気のようにするりと抜け出して、ひとりで歩き出したアキの背に、ハルは思わず呼びかけた。一瞬迷ったような表情の後で、ハルは短く刈った頭を掻いて笑った。

「いんや、何でもない。さ、飯だ飯だ！」

アキの背中に手を添えてそっと促し、家族の待つ居間に向かった。

日向(ひなたけ)家では、家事は分担制である。掃除、洗濯、食事……。全てをハル、ナツ、アキ、フユの四人兄弟と、父親である栄(さかえ)の五人で分担して行なっている。

今日の食事当番は次男のナツで、後片付けは長男のハルの担当であった。

次男のナツはアキと双子として生を受けた高校二年生で、地元の男子校へ通っている。今はやはり夏休み中で、時間を作っては短期アルバイトに勤しむ勤労学生だ。

家族そろって囲んだ夕食の後で、がちゃがちゃと音を立てて皿を洗うハルの元へ、ナツは少し長めに伸ばした明るめの髪をゴムで縛りながら近づいた。

「アキは、大丈夫なのか？　今晩もあんま食べてなかったし……。栄養失調になったりはしないだろうな……」

抑え目の声で心配そうにハルに向かって問うたナツは、泡だらけになった皿を水で流すべく、水道の蛇口をひねる。ナツは普段から多くの家事をこなしている為、本来ハルの当番を手伝ったりはしない。だがわざわざ自分の隣にやってきた理由をわかっているハルは、何故手伝うのかなどとは聞かず、スポンジを動かしながらナツの質問に答えた。

「栄養は……なんとか足りている……と思う。野菜ジュースやらサプリやらで……。だが絶対的にカロリーが足りてない。大分痩せた。

さっきも立ちくらみを起こしたみたいだ」

ざばざばと放出した水を惜しげもなく使って泡を流していくナツは、重苦しいため息をついた。顔を下げた拍子に落ちてきた前髪を邪魔そうに首を振って払う。その間も顰めた眉は額の中心で細かい縦皺を刻んでいて、不満と悲しみが同居しているような表情だった。

「もう一ヶ月だぞ……。どうしたらいいんだ？　俺たち兄弟じゃ、アキの心は癒してやれないのかな……」

ナツの独り言のような問いに、ハルも答えを探しあぐねて黙っていた。

考え付く方法は何でも試した。ただアキの為、アキが再び笑ってくれるようにと願い、動き続けてきた。だがアキはその本来の笑顔も、瞳の輝きも無くしたまま、もうひと月が経ってしまっていた。

「アキのあの顔見てるとさ、俺、いっそ泣いていいよって抱きしめてやりたくなるんだよな……」

うめく様に言ったナツに、ハルも同意を示した。

「ああ、そうだな……。少しでも気持ちを吐き出してくれれば……」

泡だらけのスポンジを握り締めて、それっきり沈黙してしまったハルの隣で、ナツは呟く。

「……馬鹿やろー、隼人（はやと）……」

『本当は、お前の仕事だろう』と続けて小さく呟かれた言葉を、ハルは聞こえない振りするしかできなかった。

重苦しい空気が立ち込める、男ふたりが皿洗いをする台所の隣。障子を挟んで居間では末っ子のフユと父の栄（さかえ）がテレビを見ていた。ゴールデンタイムのバラエティで、画面の中ではたくさんの人が賑やかにおしゃべりしている。

大人しくテレビを見ているのかと思いきや、身体だけテレビの方向に向けて実は、逞しい長兄と細身の次兄のふたつの背中を静かに見つめていたフユは、瞬きをひとつして、音を立てずに立ち上がった。

軽快な足音で去っていく末の息子を、同じく居間にいた父、栄は無言で見送った。テーブルに肩肘をつき、フユと同じように身体はテレビの方向に向けたまま、栄はちらりと居間の隅にある仏壇に目をやって、そしてまたテレビに目線を戻した。……画面の中で笑い転げる人々を、見つめるその目は冷めている。焦点もあっていない。

音は、テレビから聞こえる意味のない響きだけ。

家族が賑やかに喋り、明るく楽しかった日向家の面影は、今は、ない。

風呂から上がったアキは、自室のベッドに腰掛け、電気もつけな

いままの暗がりで、何をするでもなく座っていた。最近はこうしてベッドに座り、いつのまにか意識が途切れて眠るのを待っている。別の場所にいて眠ってしまえば、家族に迷惑がかかることを学んだのだ。

ここ二週間ほど夢遊病になったかのように、変な場所で目覚めることが多く、縁側で座ったままだったり、玄関の外で意識を取り戻したこともあった。一度はすっかり水に戻った風呂の中で目覚め、朝起きてきてそこに居合わせたナツが、真っ青になって叫び、大騒ぎになってしまった。それ以来、こうしてベッドの上にいれば、いつ眠ってしまっても目覚めたときはベッドの上であり、家族に要らぬ心配を掛けなくてすむ、とアキは思っていた。体が睡眠を求めるギリギリまで目を開けていて、気がついた時には眠っていた、というのが一番楽なのだ。無理矢理寝ようとしても、睡魔は襲ってこない。

ふと、見つめられている気がして顔を上げると、ドアのところに弟のフユが立ってこちらを伺っていた。フユは日向家の三男で末っ子、今年十一歳の小学校五年生だ。ナツと同じ少し明るめの、くるくるした髪に、母親譲りのくりっとした大きな瞳。まるで天使のような容貌は、ご近所のおばちゃんたちのアイドルと化している。

アキは少し首を傾げ、そしてフユに向かって手招きをした。

「どしたの？　フユ。入っておいで？」

その言葉に、フユはとことこと近づいてきて、アキの座るベッドの端にちょこんと腰掛けた。

「アキちゃん、ぼくね……」

フユは言い出すなりそれっきり口ごもってしまい、もじもじしている。ものすごく可愛いが、それでは一体何が言いたいのか全くわからない。フユの柔らかな髪を撫でながら、アキは先を促した。

「フユ？　どうしたの？　何か言いたいことがあるんでしょ？　言ってごらん？」

「う、うん……。あのね、ぼく……ね。……このあいだ、隼人兄ちゃんを見たんだよ。アキちゃんが座ってるえんがわのね、ひまわりの前に立ってね、アキちゃんのこと見てたの」

まだ幼い弟がもじもじと言った突拍子のない発言に、アキは目をみはる。言い難そうにしていた理由が分かった。幼くたってフユには分かっているのか。アキの顔が一気に歪む。

「……フユ。隼人兄ちゃんはもういないんだよ？　一緒に見送ったでしょ？」

動揺して声が震えるのが分かる。フユの頭を撫でていた手も、油の切れたからくり人形のように、ぎこちなく彷徨う。だがフユはアキの動揺に気付かずに、むしろ嬉しそうに話し出した。

「うん、アキちゃん言ってたよね。隼人兄ちゃんは、ママみたいに天国へ行ったんでしょ？　ママもね、時々会いに来てくれるんだよ。夢でね、会ったんだ」

フユの何の気ない言葉と無邪気さがアキに激しい衝撃と動揺を与える。胸が苦しくて、思わず「ひゅっ」と息を飲み込んだ。

……本当にそうならいい。幽霊だって夢だってなんだっていい。

もう一度会えるなら。
……だけどもう会えない。もうこんなにも純粋な子供じゃない。分かっている。……十分すぎるほど、分かっているのだ。

イライラが、言葉に棘を生やす。

「フユ、お姉ちゃんそういう冗談はキライよ。天国へ行った人には会えないの。……死んじゃった人には、二度と会えないんだよ」

自分の言葉に余計に傷ついて、胸がずきんと痛んだ。目の淵に溢れようとする涙を堪えるのに、のどが痛む。
上からポツリポツリと屋根に当たる雨の音が聞こえてきた。大粒の雨音。
いつもはやさしい姉が初めて見せる荒げた声と突き放すような態度に、フユはびくりと体を揺らし、アキから離れるように身を縮めた。

「……っ！　アキちゃん、ご、ごめんね……。ぼ、ぼく……」

弟の大きな瞳から涙が溢れるのを見て、アキははっとした。慌ててフユを慰めるも、甘やかして育ててしまったのか、末っ子の彼は昔から一度泣き出すとなかなか泣き止まない。
泣く少年と連動するかのように、降り出した雨はスコールのように一気に本降りになり、屋根を叩く。

「フユ、ごめんね、フユは悪くないよ。お姉ちゃんが悪いんだよ、ごめんね……」

子供特有の少し高めの体温を感じながら、アキはその柔らかい体を抱きしめる。ざあざあと振り続ける雨の音に紛れながらひっく、

としゃくりあげる小さな体をさすり、ごめんねを繰り返す。

心に、穴が開いている。

こんな風に、フユを怖がらせて泣かせたことなんてなかった。それ以上に、泣いているフユを見ても、動かない心。

ブラックホールのようにぽっかりと胸に開いた穴は、深く黒い闇の中で、何もかもを噛み砕き、飲み込み、沈ませ、全ての感覚を麻痺させる。痛みだけが、チクチクと刺すような、ジクジクと滲むような痛みだけが、執拗にアキを責め立てる。まだ、生きているのだと、体の存在を声高に主張する。

―隼人

動くべき脳の大半はただひとつの思念に取り付かれるように停止している。

―隼人

フユの柔らかな髪を撫でつつ、くちびるは想いのこもらない「ごめんね」を呟き続ける。さきほどは堪えられたはずの涙が、ぼろりと頬を伝っていく。

―隼人

どうして

死んでしまったの？

薄れていく意識の片隅に、耳障りな雨音がずっと響いていた。

雨はキライ。
君とさよならした日のことを
思い出してしまうから

2

アキの恋人である隼人(はやと)が死んだのは、大雨の降る日だった。

所用で少し遅くなった学校からの帰り道、まだ明るい夕方だったのに雨で視界が悪かったのが災いし、走ってきたトラックに跳ねられ、その身は宙を舞った。

道路に倒れた彼に駆け寄った通行人が、かすれる声で呟く彼の最期の言葉を確かに聞いた。

大量の出血さえ洗い流されていくような大雨のなか、彼はその場で意識を失い、二度と目覚めることはなかった。

間をおかず連絡を受けた日向家の面々は、すぐに病院に駆けつけた。そこにいたのは彼の両親と、氷のように冷たくなり、その瞼を閉じたままの隼人だった。トラックに跳ねられたものの、大きな外傷を残さなかった彼の顔は、ただそこで眠っているかのように安らかであった。

霊安室の入り口で立ち尽くしてしまったアキを促して、横たわる隼人に近づいたハルとナツは、その死に顔に涙すら流せず、ひたすら呆然としていた。隼人の両親がすすり泣く声だけが、その場に響く音だった。普段は無邪気なフユも、そのただならぬ気配を読んだのであろう、神妙な顔をして父親の手を握っていた。

そして最悪の対面から数日、隼人とのお別れの日がやってきた。

黒と白で統一された空間に、一様に暗い顔をした人々が並ぶ。あ

まりに早すぎる青年の旅立ちに、誰もがショックを隠しきれない。
またその日は、何かの冗談のように、今にも雨の降り出しそうな嫌な天気であった。

法要が終わり、出棺の時となった。
霊安室での対面からショック状態のまま、食事もとらず、眠りもせず、一言も口をきかなかったアキの下へ、隼人の両親が近づいた。そして、通行人が確かに聞いたという息子の最期の一言を、アキに告げた。

＞アキ、どうか幸せに＜

その言葉を聞いた瞬間、アキは初めて涙を流した。まるで、凍り付いていた時間が溶けるように、みるみる零れ落ちる涙は、ようやくアキを人形から人へ戻した。と同時に、アキにこの逃れようのない現実を、決して認めたくない事実を否応なしに突きつけた。

隼人は死んだ。

そしてアキは泣き続けた。涙は枯れることを知らず、ただ、零れ続けた。
隼人が灰になって、煙突から立ち上がる煙が、空に消えていってしまっても、ずっと。

アキ

誰かに呼ばれたような気がして、アキは眠りから覚めた。
瞼を上げると、南向きの窓の端にうっすらと光がほのめいている。夕べはフユを抱きしめたまま、眠ってしまったらしい。泣いたのをそのままにしてしまったせいで、がびがびするほおを撫でつつフユを見ると、フユは自分の腕の中で、くうくうと安らかな寝息を立てている。うっかり布団もかけずに寝てしまったが、夏だし、寒くて風邪を引くということもないだろう。

熟睡するフユを起こさないように、そっとベッドから抜け出たアキは、せっかくこんな時間に起きたのだから、朝日でも見ようと思いついた。ちょうど日の出の時刻のようだし、と立ち上がり、まずがびがびの顔を何とかしに、洗面所へと向かった。

南を向いている縁側の雨戸を開け、昨夜降った雨のせいでぬかるんだ庭を眺める。雨露に濡れた黄色の大輪の花は、昨日のような大降りの雨にもその太い茎を折ることはなかった。ゆっくりと顔を出した太陽が左手からその光を煌かせたとき、薄暗い中でも、存在を主張していた向日葵が、いっそうの輝きを増した。起きたばかりの目に、痛いくらいの黄色。朝焼けに染まる空は美しく、澄んだ空気は心地いい。

アキは朝の空気をめいっぱい肺に吸い込み、吐き出した。まだ少しかさつきの残るほおを撫でる。
緑の匂いがする、朝の清清しい空気を吸い込んだら、なんだか気が楽になった。心が死んだように感じた昨夜が嘘のように、昨日のフユへの態度はあんまりだったと、素直に申し訳なく思った。

眩しいくらいに輝いている向日葵の黄色。そして大きく豊かに茂

る葉の緑。それは大好きな母の、大好きな花。毎年夏になると向日葵を見て喜ぶ母の姿を思い出し、アキは少し笑った。私にも会いに来てくれたらいいのに。そして……。

あまりに純粋な心を失わないフユが、羨ましく思えた。もし私がフユみたいに純粋に信じられたなら、私にも見えたのかもしれない。

縁側の柱に寄りかかるように手を置き、アキは向日葵に向かって話しかけた。フユが言っていたように、もし彼がそこで私を見ているなら、と。

「……ねぇ、隼人。そこにいるなら私にも姿を見せてよ。ずるいよ、フユにだけ見えるなんて」

少し軽くなったはずの心が、ただひとりの人を想って感傷的に疼く。それを誤魔化すかのように小さく息を吸って吐いた。眼に痛い向日葵を見ていられずに、瞼を閉じる。零れそうになる涙を堪えて、何回か深呼吸した。泣きすぎて目の下が痛い。

―ねぇ、隼人、本当はわかっているんだよ。

家族のみんながずっと心配してくれていること、このままではいけないこと。大丈夫だと笑顔で振舞っていても、みんなには無理していることがばれていると、アキにだって分かっていた。

―でもどうしたらいいの？　どこにいても何をしていても隼人を思い出してしまうのに、泣かずにはいられないのに、どうしたらいい？

目を閉じたまま、涙をこらえてじっとしているのが苦しくて、アキはいつのまにか呼吸を忘れるほど体を硬く緊張させていた。固く

む結んでいた唇を緩め、空気を大きく吸った。必死にこらえていた涙が零れないように上を向いたら、何とか零れずに済んだ。

―隼人……

やり場のない、どうしようもない苦しい思いに胸を詰まらせたまま、アキは再びそっと目を開けた。少し荒い呼吸、少しだけ滲んだ視界。

新しい朝の、その差し込む朝日の中に、ふわりと舞う、羽。

突然舞い落ちてきた白い大きな羽に、アキは驚いて目を瞬いた。鳥かと思って周囲を見回すと羽に遮られた視界の向こうに誰か人が立っているようだった。

「だれ？」

先ほどまで庭に誰もいなかったのに、と訝しげに呟いたアキは、声にならないほど掠れた呟きを零した。

「う……そ……」

大輪の向日葵の前に佇む、そのひと。体に沿ったすっきりしたラインの青い上着は膝の丈まであって、黒いズボンに黒い布靴。ノースリーブの肩口からすらりと伸びた腕。やわらかく差し込む光を反射する茶色がかった髪が風に揺れる。背中の真っ白な双翼がばさり

と、存在を主張するように大きく動いた。

「アキ」

揺れる向日葵を背に、白い翼がふわりと閉じる。
白く差し込む光の中、絵の中でしか見たことのない、その天使の姿をした人は、自分の名前を呼んだ。

「アキ」

再び呼ばれた名前に、ようやくアキは反応した。目の前に佇むその存在を、大きな瞳をさらに見開くようにして見つめる。

……失った恋人の、記憶に残るその声音。

「……アキ……？」

三度遠慮がちに囁かれた名前に、心臓がぎゅっと締め付けられる。瞳から大粒の涙がこぼれた。とても自然に、当たり前のように。震える体を抱きしめる。立っていられるのが不思議なくらいだ。

くちびるが動く。声にならずにその人の名前を形取る。

は　や　と

ゆっくりと自分に近づいてくる天使が、にっこりと微笑んだその瞬間、アキの意識はブラックアウトした。

それはアキが大好きな恋人の、大好きな表情だった。

3

「あ、アキちゃんが起きたよ」

目覚めたとき、アキが見たのは弟のフユの顔だった。

ぼんやりした頭で思う。さっき隼人の夢を見た気がする。白い翼を生やした隼人の姿に、ああ、隼人は　天国で天使になったんだ、と思った。自分に向かって微笑んでくれた。

幸せな気分でゆっくりと体を起こしたアキは、自分を取り囲む家族の中の、ひとり異質な存在に目をみはった。

「あ、アキが固まった」

ナツの顔つきは面白がっているときのソレだ。

「お前だってさっき固まったろうが！」

ナツに軽くデコピンをお見舞いし、ハルが頭をぐしゃぐしゃと掻きながら言う。

「……まぁ、俺も縁側でアキを抱きかかえてる天使を見たときは、さすがにびびったが」

「ハルちゃんが大声で叫んだから、ぼくびっくりして起きたんだよ！　お父さんも慌てて起きたんだよね？」

アキを覗き込んでいたフユは、笑いながら父親を見た。

「早朝から騒々しすぎる……。誰のせいかってハルのせいだけどな」

無精ひげを生やしたままの寝起き顔で、あくびをしながら栄は眠そうに呟く。

「あはは、ハルさんのせいっていうより、元はといえば僕のせいなんで。すみません、おじさん」

会話の流れにすんなりと入り込んだ天使……もとい隼人になんの違和感もない。更に言うなら、一切の動揺を見せずにすでに馴染んでいる自分の家族に、アキは驚きを通り越して呆れた。

隼人は死んだ。間違いなく。

それは曲げようのない事実であり、認めなければならない現実のはずだ。それなのになぜ、隼人はここにいるのだ？　背中に翼を背負い、まるで天使そのものになっているが、その顔も体も、声も、なにもかもが自分の知っている隼人なのだ。

心が、痛い。

なぜ今、こんな形で隼人が目の前にいるのか、理解できない。目の前の“隼人の姿をした天使”を直視できずに、アキは俯いた。

そんなアキの様子を見て、ハルは隼人に向かって言った。

「……そろそろ、話してくれるか？　一体どういうことなのか」

「はい、では、アキも目を覚ましたところで、説明させていただきますね」

その場に集まった五人を見回した隼人は、きちんと正座をして、にっこりと笑顔を浮かべて言った。

「アキ」

名前を呼ばれたアキは、ぴくりと肩を動かした。

「ごめんね、死んだのにこうして現れて」

その言葉にがばっと顔を上げたアキは、動揺を隠せない瞳を彷徨わせ、そして首を振った。そんなアキの様子に、隼人は少し目を細めて、口を開いた。

「僕は確かに死んでいます。みなさんが見送ってくれたあのときに」

日向家の五人は一斉に顔を曇らせた。葬式の時の悲しい想いが脳裏によみがえる。

「死んだあと、僕の魂は、天国へ向かいました。というか、僕の場合交通事故だったので、死んだとか良く分からないまま、気がついたら白くて大きな門の前にいたわけなんですが」

通夜の時の暗い雰囲気を思い出した一瞬前の自分たちがバカみたいな、あっけらかんとした隼人の物言いに、一同は唖然とする。まるで現実味のない話の内容以上に、にこやかに話す隼人の態度は不自然なほど明るい。フユだけは話を理解できているのかいないのか、にこにことしていたが。

「その門をくぐると、そこはまぁ、いわゆる天国で、死んだ人たちの魂が暮らしていました。僕は祖父母に再会しまして、しばらくは一緒に天国で暮らしました。祖父母に会ったことで、自分が死んだという事実を再確認したんですけどね。自分の葬式の様子も見ちゃいました。みんながあんまり泣くんで、それで僕ももらい泣きしちゃって」

苦笑しつつ頭を掻く隼人に、誰一人声をかけられるものはいない。呆気に取られて口を開いたままのギャラリーを意に介さず、隼人は話し始めた。

天国で暮らし始めてからしばらく経った頃、隼人のもとにひとりの正天使（せいてんし）がやってきた。

通常、いわゆる“亡くなった人”は＞天国＜と呼ばれる世界に存在し、そこで暮らしている。天国とは、そこに存在する住人たち―一度その命を終えたものたち―が、次の生を受けるまでその魂を癒す場所として創生の神が創った場所であり、住人たちはいずれ訪れる転生の時を“待つ”ことだけを目的とし、存在している。

よく物語に登場する、いわゆる神や天使などという存在はそこにはいない。神やら天使やらが存在するのは＞天界（てんかい）＜と呼ばれる場所で、＞天国＜とはまた違った世界であり、天国の住人がそれらの存在に遭遇することは滅多にない。

その滅多に会うはずのない存在が、隼人のもとへやってきた。翼を持った人型をとる“正天使”は、神の仕事を補佐する為に働いて

いるというだけあって神々しいオーラを纏い、隼人にある誘いを持ちかけた。それは　天使になる誘い、だった。
いわく、隼人のように若くして死んだものは、生きているうちに経験できなかった“仕事”を体験できるよう、“準天使（じゅんてんし）”として力を与えられ、神や正天使の下で働くことができるのだという。
あれこれあってその誘いを受けた隼人は、仮初めながらも天使としての力を得、神や天使たちの住む天界へと渡り、天候を司る神の元へ配属された。隼人の直属の神様は、雲を司る通称“雲（くも）じい”と呼ばれる、ちいさくてよぼよぼの爺さんであった。
なにはともあれ、雲じいの下で働き始めた隼人は、他の準天使や正天使とともに、雲に関する仕事をするようになったのであった。

「雲じいってちっちゃくって可愛いんだよ。頭なんかふわっふわの白髪でさ。羊みたいなの。ひげもふわっふわで……」
自分の上司であるおじいちゃん神様に思考を飛ばして遠い眼をした隼人に、ナツは割って入った。
「ちょ、ちょっと待て、隼人。雲じいはわかったけど、雲に関する仕事って何なの？　それと今の隼人と何か関係あるの？」
的を射た質問に、隼人は瞬きをして、またにっこり笑った。
「あ、ごめんね。つい……。えっと、雲じいと僕たちのやってる仕事って言うのは、雲を“描く”ことなんだ」
「……描く？」

「自然発生ではなくて？」

ナツとハルはそれぞれに疑問を口にした。アキと栄は黙ったまま、フユはにこにこしたままだ。

「うん、もちろん大部分は自然発生なんだけど、時々必要に応じて雲を作り出すんだよ。僕はよく知らないけど、神様会議で決めてるみたいなんだ。」

一旦言葉を区切って一同を見渡し、またしても口をぽかんと開けた三人を見遣って苦笑する。

「雲じいが雲を描いて、その雲から雨じいが雨を降らすんだ。雨を降らさない雲もあるんだけどね。それから描かれた雲は、風ばあが適当に吹き散らすって寸法なんだ」

「ちょ、ちょっと待て」

頭脳派のナツが、またも懸命にストップをかける。

「お前“描く”って言ったよな？　絵みたいに雲を描くと、そこから雨が降るのか？　一体どうやって？　でもって結局お前の役割は？」

眉をしかめつつ矢継ぎ早に質問したナツに、隼人はその答えを用意していた。

「これを使うんだ」

詰襟のようなチャイナ服のようなデザインの、丈の長い上着のポケットから、おもむろに取り出したのは、蓋付きの缶のようなものだった。

「＞神様の絵の具＜って呼ばれてる」

その缶の蓋を開けると、絵の具とは言い難い、首を傾げたくなるような無色透明の液体が入っていた。

「絵筆は、僕らの指。描きたい雲を頭の中に浮かべて絵の具をつけて、それを空に走らせるだけ。そうすると雲ができて、あとは雨が降ったり風に散ったり。簡単でしょ？」

一同は、缶の中身を覗きこみ、そして一様に言葉を失った。……ちょっと理解の及ぶ範疇ではない。そんな日向家の面々を見渡し、隼人は少し嬉しそうに言った。

「僕は元々なりたての準天使だし、地上に降りてくる予定はなかったんだ。でも雲じいが、急にぎっくり腰になっちゃって。動けなくなっちゃった雲じいの仕事の穴を埋めるために、僕たち天使がそれぞれ地上に派遣されて、仕事することになったんだ。これが僕がここに来た理由。」

笑顔を更に深めてにっこりと笑った隼人は、そう言って話を締め括った。

とりあえず隼人の一連の説明を聞き、今の状況と、隼人がここに来た理由は分かった。……分かったが……、内容があまりにファン

タジーだ。
絶句したままのアキを横目に、一番早くこの状況に適応したのは、ナツだった。
「うーん、まぁ、そっか。いろいろ信じがたいことも多いけど、それより俺は、お前とまた会えて嬉しいよ。元気そうだし、安心した。もう、それでいいよ」
苦笑いとため息とともに言い切ったナツに、隼人も口元をゆがめる。もともとふたりは、高校のクラスメートで、アキと隼人が付き合いだす前からの親友だ。その辺の気安い関係がふたりにはある。
普段は現実的なことばかりを口にして、ちょっと空想癖のあるアキを窘めるナツが、いち早くこの状況を受け入れたことに、アキは内心で驚いていた。それとともに、すんなり受け入れることの出来ない自分に、戸惑っていた。
失ってからもずっと心の中に想い続けてきた人だ。奇跡のように再び逢えたのに、なぜ素直に喜べないのだろう？
……コワイ
怖い？　一瞬心の中をよぎった言葉に、アキは首を傾げて自分の心に問いかけた。
怖い、何が？　死んだ人とは言え透けてる幽霊でもないし、他でもない隼人なのだ、怖いことなど何もないはずなのに。
アキが悶々としているあいだに、長兄のハルも心の整理を付けたようだ。
「まぁ、小難しいことはいいや。こうして目の前にいること、それが全てだよな。隼人」

弟の親友として、その後妹の恋人として日向家にしょっちゅう出入りしていた隼人は、ハルにとって三人目の弟のようなものだ。流石にアキと付き合いだしたときはぶん殴ってやろうと思ったが、アキの幸せそうな顔を見て踏みとどまったことは、ナツにも隼人にも筒抜けであった。

そんなこんなで結局仲良くなった、血のつながらない弟のような存在の隼人の肩に手を置いたハルがにこにこ笑うのを、アキは呆然とみつめる。

なんで
私は

呼吸すら忘れたかのように、目を見開いたまま固まってしまったアキに、隼人は優しく声をかけた。

「アキ」

はっと顔を上げたアキに向けられた微笑は、ひどく優しかった。

「無理……しなくていいからね。ごめんね、混乱させちゃって。でもね」

一旦言葉を止め、目線を落とした隼人は、再び顔を上げ、笑みを更に深くして告げた。

「僕は、またアキに逢えてうれしいんだ。……雲じいに感謝しなくっちゃ」

それは、アキの大好きな。大好きな隼人の大好きな笑顔で。

失ってしまって、二度と目にすることは出来ないはずの、大切な。

胸が詰まって苦しくて、声が出せそうにない。代わりに目からは涙がぼろぼろ落ちてどうにもならない。

―逢いたかった逢いたかった逢いたかった。

私も、逢いたかった、隼人。

その気持ちをぶつけるように、アキは隼人に抱きついた。悶々と考え続けていた思考の塊はどこかへ投げ打って。

いつかぎゅっと抱きしめあった時のように、隼人も抱きしめ返してくれた。かすかに香る隼人の匂いに安心して更に擦り寄る。

だが隼人が苦笑して、アキの髪を撫でたとき、アキはぴくりと身を震わせた。

隼人に抱きついたアキを見たナツは、ほっとした笑いを浮かべながら大きく伸びをして、少し寝癖のついた髪を梳きながら言った。

「さーってと、落ち着いたところで、朝飯でも作りますかぁ。父さん今日仕事だろ？　すぐ準備するから！」

そのナツの言葉に、栄は「ああ、そうだった」と洗面所のほうへ歩き出し、ハルも抱き合うふたりを少しだけ複雑そうな表情で見遣って肩をすくめ、フユを促してその場を去った。

こうしてひとまずその場はお開きになり、一同は散会した。

ただ、アキと隼人だけはその場から動かず、じっとしていた。自身の腕の中に納まったアキが、固く体を強張らせたのを、隼人はわかっていながらもそのまま抱きしめ続けた。愛おしそうに髪を撫で、

離れていた時間を埋めるようにしっかりと強く。
だがそんな隼人の顔に、幸せとは程遠い苦悶の表情が浮かんでいることを誰も知らなかった。腕の中のアキだけがただならぬ気配を察し、沈黙が流れるのをやり過ごすかのようにじっと息を潜めていた。

4

じゅわーという音と共に、卵のいい匂いが台所に立ち込める。
よくこの短時間でと自分でも驚愕するほどに立派な朝ごはんが出来上がり、ナツは鼻歌を歌いながら居間に運ぶ。

「おーい、みんな、朝飯できたぞ～」

と、上機嫌で呼ぶと、お腹を空かせていたのかフユが一番に跳んできた。焼き魚、茹でたウインナー、玉子焼き、温野菜に漬物……と、テーブルに並べられたおかずに、大きな瞳を輝かせる。

「わあい、ナッちゃんの玉子焼きだ！　ぼく大好き！」

そんなフユにナツは破顔して答える。

「玉子焼きくらいでそんな喜ばれるとな～。ははは っ。……ところでアキと隼人は？」

一転、真面目な表情に戻って尋ねたナツの疑問に答えたのは、フユではなかった。

「ああ、ナツ、相変わらず料理上手だね。おいしそう」

障子の向こうからひょいっと首を出したのは、他でもない隼人で、その後ろにアキもいた。

「隼人、お前も食うだろ？　久々のナツ様の手料理をご堪能あれってやつだな！　たいしたもんじゃないけど。アキ、お前もそんなとこにいないで、早く座れよ」

嬉しそうなナツの言葉に、隼人は、複雑な表情で返した。

「ああ、ごめん、ナツ……。僕は食べられないんだ。せっかくだけど、残念だな」

苦笑いを顔に浮かべた隼人に、ひげを剃ったばかりのほおを撫でながらやってきたハルは不思議そうに問う。

「……？　なんでだ？　お前食わなくて動けんのか？　はっ、まさか、天使は霞を食うとか！　仙人みたいに！」

自分で勝手に答えを探し興奮するハルを横に、隼人はひどく落ち着いた声で話す。

「うーん、ハルさん。仙人の食生活は知らないけど、天使はね、基本的に食事は摂るけど天界の食べ物しか食べられないんだ」

優しげな声音でそういった隼人に、ナツは首をかしげた。

「なんでだ？　まさか地上の食べ物は汚れてて食べられないとか、そーゆー理由か？」

隼人は「ううん」と首を横に振る。

「違うよ、そうじゃない。もっと、別の理由。……触れられないんだ、天界の住人は。……地上のものには」

そして自身の手をみつめ、一瞬にして固い表情になった隼人に、ナツもハルも思わず真剣な表情になる。

「死んだ人や天使はね、実体を持たないんだ。……よく考えたらそうだよね。体は死んだときに焼かれちゃってるんだもの。魂って言われるものが、記憶や想いを留めて、そして天国でその意識を取り戻す……そういうことだと思うんだけど。だからね、体のない僕たちは、たとえ地上に降りてこられたとしても、触れることはできないんだ。何にも。だから食べることだってできない」

「だ、だけどよ……、お前、今、体あるじゃねーか。それってどーいうことだ？」

どもりながらも、もっともな疑問を口にしたハルに、隼人は端正な表情を崩さずに言った。

「ほら、僕って仕事しにきたでしょう？　だから今回は特別に、肉体を貸してもらってるんだ。……“天使の器（うつわ）”って呼ばれてる。要するに人形みたいなものなんだ。そこに魂が一時的に融合して、その人が生きてたときの体になる。でも、あくまで器だから、本物じゃないんだ」

隼人の背後で、黙って説明を聞いていたアキは少しだけびくっと身を震わせ、先ほどから青くなっていた顔を更に蒼白にした。そんなアキに隼人は少しだけ振り向き、すまなそうに笑った。

「アキはもう気付いたよね。……僕の手、冷たいから。体だって冷たいもんね。血が通ってないんだもの」

そうして再び自身の手を見つめた隼人は、自分を取り囲むようにして黙ってしまった日向家の四兄弟に気付き、その空気を吹き飛ばそうとするように殊更明るく言った。

「もう、みんなったら。僕が死んだ人間だってとっくにわかってるでしょ。ほら、さっさとご飯食べなきゃ。フユくんはお腹空いてるんじゃなかった？　あ、あとそこにいるおじさんも！　仕事遅れますよ！」

その瞬間、くるる～と鳴ったお腹の音にフユは赤面し、ハルとナツは吹き出した。廊下の影からのそりと顔を出した栄は、少しバツの悪そうな顔をしつつも、食卓についた。

笑いながらナツは味噌汁を取りに台所へ引っ込み、ハルはフユを促して食卓につき、ご飯をよそうべくしゃもじを取った。

全員が何事もなかったかのように振舞う中、アキだけがやはり、その場から動けずにいた。

「アキ、ほら、ご飯だよ。ちゃんと食べなきゃね」

隼人はそんなアキに優しく声をかけ、アキの背中に腕をまわす。ふわりと微かに感じた匂いに、アキは思わず声を出した。

「……じゃあ匂いは」

驚きのかたちに目を見開いた隼人に、アキは気色ばんで続ける。

「体が、隼人のじゃないなら、じゃあどうして」

どうして、隼人の匂いがするの？　匂いは体から発せられるもの

でしょう？

その先の言葉を口を押さえて噤んだアキは、隼人から視線を逸らし、家族に向かって必死になって言い繕った。

「ごめん、みんな。ご飯食べよっ」

そうしてそのまま食卓についたアキに集中していた視線は、ぎこちなくも逸らされ、一瞬の喧騒に乱された食卓の気配は、その場の人たちの努力によって、見た目穏やかなものへと変わっていった。

隼人はご飯を食べだしたアキを静かに見守って、自分は居間の隅に腰を下ろした。

むぐむぐとナツの作ってくれた朝ごはんを咀嚼しながら、アキは必死で自分の中の感情と闘っていた。

―聞いちゃダメだ。だめ。

体が人形なのに、隼人の匂いがするはずない。きっと自分が作り出した幻覚ならぬ幻臭なんだ。だけど……。

ごくり、と甘い玉子焼きを飲み下し、アキはちらりと隼人を盗み見た。隼人はその視線に気付き、にっこり笑う。あわててご飯に視線を戻す。

……聞きたくなかった。『匂い？　気のせいだよ』なんて。

そうしてきっと悲しそうに微笑むだろう隼人を見たくはなかった。

自分の嫌な想像で頭をいっぱいにしながら、アキは必死で箸を動

かし続けた。……久しぶりに量を食べたご飯が、ほんの少しの後に
すべてもどされてしまうのも知らずに。

5

朝ごはんを素晴らしいスピードで胃に収めた父、栄(さかえ)は、仕事に出掛けるべく玄関の上がり框(かまち)に座り込み、足袋(たび)を履き始めた。頭にはねじったタオルを巻きつけ、耳に鉛筆を一本挟んでいる。栄の職業は大工であり、代々続く工務店の跡継ぎになる予定だ。

四十台も半ばを過ぎた年になって未だ“予定”なのは、ひとえに彼の父親、つまり四兄弟の祖父が、七十近くになってもバリバリの現役で、元気いっぱいに現場を仕切っているからだ。自分が動けなくなるまで家督を譲る気はないらしい。そのことに関して栄は、父の気のすむようにと考え、傍らで静かに見守る姿勢を貫いていた。

栄はもともと無口で物静かな性格で、その真面目で実直な仕事ぶりを、工務店に勤めるほかの大工や職人たちも評価しており、性格の全然似ていない親子二代のかみ合わない漫才を、現場での隠れた楽しみとしている。

「じゃあ、行って来る。帰りは……六時くらいだろう」

長年愛用している、履き慣れた足袋を履いた栄は、玄関まで見送りに来たハルに声をかけた。

「わかった。ほい、これ弁当」

朝ごはんの残りやらを詰めてナツが作った弁当を渡す。夏だからご飯に梅干は必須だ。兄弟たちは祖父に連れられて現場に遊びに行くことも多かったから、建築現場が暑いことなど百も承知である。

猛暑日になるのがわかっているときなどは、弁当箱ごとクーラーボックスに入れて持たせるのだ。

息子がいつも気を使ってくれる、たっぷり量の入った弁当を受け取り、普段ほとんど動かない表情筋を少し緩ませた栄は、そういえば、とハルに尋ねた。

「アキは、大丈夫か？　寝かせたのか？」

「ああ、うん。寝かせたよ。ここんとこあんま食べてなかったのに、急にたくさん食べ過ぎて胃が受け付けなかったんだと思う。だから多分大丈夫」

「……隼人は？」

「アキに付き添ってるよ」

「……そうか。……行って来る。後頼むな」

栄は自分に似て体格のいい長男と、声を落としてそんなやりとりを交わした後、玄関から出て行った。すぐに軽トラックのエンジン音が聞こえ、角を曲がって聞こえなくなった。

ハルは玄関先でふうとひとつ息を吐くと、おもむろに二階を見上げた。視線の先は、アキの部屋であったが、そこに向かうでもなく、頭をがしがしと掻きながら、風呂場に向かい掃除を始めた。

カーテンを引き、空調をかけて温度を調節した部屋で、アキは眠りについていた。ベッドの傍らの床に座り込んだ隼人は、アキの寝顔を眺めていた。

だいぶ痩せこけてしまったアキの頬を撫でる。眠れぬ夜を幾度も過ごしてきたことを隼人は知っていて、痛々しい隈と泣き腫らして慢性的に赤くなってしまった目元にそっと触れた。

自分を想って、こうまで思いつめてしまったアキに、隼人は複雑な思いだった。嬉しい反面、申し訳なくてどんな顔をしていいのか分からない。

「……出会ってから一年半、か」

そうポツリと零した隼人は、アキと出会ったその日のことを思い出していた。

一番最初の印象は、大人っぽい子だな、というものだった。

高校に入学した隼人は、クラスメートの中でひとり、少し変わった雰囲気を持つナツに興味を持った。進学校とはいえ男子校ならではのうるささの中、机に向かって黙々と本を読む姿は、ひどく大人びて見えた。隼人は知らなかったが、元々ナツは切れ長の涼やかな目もと、少し明るめのさらさらな髪で、近隣の高校生の間で噂になっているほどの美少年だった。

隼人は隼人でそのおっとりとしたやさしい雰囲気と、真面目な態度でクラスから一目置かれており、二人が周囲の喧騒から紛れ、仲良くなるのに時間はかからなかった。

いつものように話しながら歩く帰り道。下校途中の学生がバラバラと帰っていく中、ナツは前を歩くセーラー服の女の子に声を掛けた。

「アキ！　アキも今帰りか？」

その声にくるりと振り向いたのは、近くの女子高の制服を着た、おっとりとたおやかな雰囲気の女の子だった。高くもなく低くもない身長、緩くウェーブした黒髪は肩口で緩く結われ、長いまつげに覆われた大きな瞳が印象的だった。

「あれ、ナツだ。珍しいね、帰りに会うなんて」

そう言ってにっこり笑ったその顔に一目惚れしたことは、ナツにすら言っていないちょっと恥ずかしい思い出だ。

「えっと……ナツ？　お知り合い？」

まさかナツの彼女じゃないかと隼人は内心びくびくしながら尋ねた。

「うん、双子の妹のアキ。おっちょこちょいがトレードマークだぞ」

笑顔全開で言われた『妹』という言葉にほっとしながら、目の前の美少女を見つめた。そう言われてみると鼻筋や全体的な顔の感じがナツに似ているが……おっちょこちょい？

「アキ、こっちは俺の友達、隼人だ」

「あ、僕、吉川隼人（よしかわはやと）です。よろしく」

紹介されてそっけない自己紹介をした。高校一年の春なんて、自己紹介ラッシュだ。もう反射反応といっていい。

「はじめまして、兄がお世話になってます。日向(ひなた)アキです。よろしくお願いします」

にっこりと丁寧な挨拶に、慌ててお辞儀をした。もう勝手に恋に落ちてしまっていて、かわいいかわいいと叫ぶ心臓を上から手で押さえる。

どきまぎする隼人をそのままに、自己紹介完了とばかりに、「それじゃ三人で帰るか」と、マイペースなナツが歩き出した。アキも当たり前のように方向転換して歩き出す、その一歩を踏み出したときだった。

「きゃぁ！」

という悲鳴に、隼人はとっさに手を伸ばす。何故か何もないところでバランスを崩したアキの腰を隼人が引き寄せ、転倒は免れた。一瞬の出来事、中途半端に密着した体制のまま固まったふたりに、ナツは呆れた声音で頭をガシガシ掻いて言った。

「……おっちょこちょい発動。隼人、サンキューな」

「あの……、ありがとうございました。恥ずかしいです、会ったばかりなのに」

真っ赤に染まったアキの顔を見て、隼人は慌ててアキを解放する。落ちているアキの鞄を拾い、持たせてやる。

「ううん、気にしないで。よかった、転ばなくて」

隼人はにっこりと余裕の笑顔を浮かべつつ、何食わぬ顔で三人一緒に家路についた。だが隼人の頭の中は、一目惚れした恋心に戸惑う気持ちと、先ほどアキに触れた時の柔らかい感触とが綯い交ぜになり、その日どうやって家まで辿り着いたのか、全く覚えていないのだった。

いつの間にかアキの大きな黒い瞳が、隼人の顔を見つめていた。一瞬トリップしていた頭を振って、隼人は平静を装って呼びかける。

「アキ？　起きたの？　気分はどう？」

アキはその赤みの引いた唇をゆっくり開いた。

「……初めてあったときの夢、見てた……」

その言葉に隼人は目を瞬かせる。

「わたし、あの時、隼人を好きになったの……。笑顔が、素敵で……」

言いながらも目線を彷徨わせた瞳は、瞼の裏に隠れ、薄く開かれたままの唇は寝息を立て始めた。どうやらまだ夢の中にいたようだ。

隼人はふっと笑って再びアキの頬を撫でた。隼人の妄想が飛び火したのか、はたまたアキの夢を共有したのか……。どちらにせよ、同じタイミングで同じことを考えるなんて、滅多にないことだ。絆の深さだろうか、などと考えて、隼人は直後に頭を振った。

目を閉じてふーと息を吐いた隼人は、何かを断ち切るかのように頭を振って素早く立ち上がり、そしてアキの部屋を後にした。

6

とんとんと階段を下りてくる足音に、ナツは大量の洗濯物を入れた洗濯籠を抱えて顔を上げた。

「おう、隼人。アキはどうだ？」

「うん、よく寝てるよ。顔色はだいぶ良くなったし、もう少し休めば大丈夫だと思う」

「そっか」

ほっとした表情で息を吐いたナツに、隼人は少し意地悪な様子で言う。

「ナツ……相変わらずのシスコンだね……。でもアキの夢に出てきたのは僕みたいだったから。残念だね」

輝かしいほどの笑顔で挑発的な言葉を投げられたナツは、眉を寄せた嫌そうな表情を隠さない。

「隼人……言いたいことはそれだけか？　洗濯干すの手伝え」

当たり前のように自分を使おうとするナツに、隼人は反論せずに苦笑して従う。

この家の洗濯物はナツが取り仕切っている。なんでもハルに干さ

せるとシャツやらズボンやらが皺くちゃになってしまい、アキもあんまり几帳面な性格ではないことから、後からいろいろ面倒くさいよりは、最初から全部自分でやってしまおうということらしい。今は夏休みだから理解できるが、学校がある時でも毎日ひとりで洗濯するのだから徹底している。

そんなナツだが、隼人が休日に遊びに来ると必ず洗濯の手伝いをさせた。しかも隼人が来る日に限ってシーツなどの大物や、普段は洗わない様々なものを洗う。確信犯だと隼人もわかっていたが、几帳面なナツの御眼鏡にかなったのだと文句も言わずに手伝うことにしていた。

変わらないテンポのナツとのやりとりに、隼人はくすりと笑ってナツの後に続いた。

日向家の庭は、田舎だけあって広い。今は五人家族が住まう家屋も、実は広すぎて掃除が大変なのだが、家族全員そんなことは口に出さない。何しろこの家は、栄の父である四兄弟の祖父が、彼ら一家のために自ら設計図を引いて建てた家だからである。長年大工をやってきた祖父のこだわりで、外観は純日本建築、玄関は南向き。家の中も洋間より和室のほうが多く、もし不動産の広告に載っていても敬遠されるタイプだろうと思われる。だが、広く取られた台所や居間の畳の下に隠された掘りごたつ、大きく開いた縁側とそれに向かって広がる庭は、暮らす人の心地よさを考えた、祖父なりの心遣いだと家族は知っているし、頑丈に作られたこの家が大好きだ。

庭は庭で、園芸好きな祖母が様々な木や花を植えたお陰で、一年中花や実がなるようになっている。圧巻なのは縁側の上に張り出すように造られた、藤棚ならぬキウイ棚で、鉄パイプで組まれた骨組みに、キウイフルーツの雌雄二本の木が絡み合うように伸びている。秋になれば熟した大量の実を収穫できるが、今は独特の丸い大きな

葉が、太陽を浴びて更に成長せんと頑張っているお陰で、縁側はほどよく日光の遮られた快適な空間になっている。数年前に祖父が冗談半分で隣に植えた葡萄の木も、いまでは大きく成長してしまって、葡萄の葉もキウイの葉を押しのける勢いで勢力を広げている。

縁側から向かって正面には一面の向日葵が黄色い元気な花を、左手にはサルスベリの大木が、赤い花をいっぱいに咲かせている。裏庭には柿の木、梅の木、グミの木、クランベリー、プラムなどが植わっており（何故みんな食べられる木なのかと、以前隼人はナツに聞いてみたが、ナツは笑って「さあね」と答えるだけだった）、とにかく木と花に囲まれた、小さな植物園のような庭なのだ。

さて、そんな緑に囲まれた庭に出てきたナツと隼人の二人は、向日葵の前に直角にくの字を描くようにしつらえられた物干し竿に、洗濯物を干していく。

五人分の洗濯物は普段からでも多いのに、夏は汗をかく分、余計に増えるから嫌になる。ただ強烈な日差しのおかげで、午後になるとからりと乾いていてくれるのは嬉しいと言うナツに、「それは主婦の感想だよね」と隼人は本音を漏らして、ナツに睨まれた。

他愛もないことを言い合いながら洗濯物を干していたが、ふと途切れた会話の間でナツは、隣で黙々と手を動かしている隼人に目を遣った。

「隼人。お前、いつまでここに居られるんだ？」

目を瞬かせてナツを見た隼人は、とたんに嫌そうな、苦い顔をして薄く笑った。

「ナツは直球で核心ついてくるから、嫌だよね」

さっきまでとは全く別方向に振られた話題は、ナツが本当に聞きたかったことに違いない。さすが県内屈指の進学校で、学年でもトップクラスの頭脳だ。頭が回る。

隼人がここにいること。それがかなりのイレギュラーであること。

隼人の説明がどんなにファンタジックで信じられないことでも、ここに存在している以上、その上で大切なことを、ナツは見切っている。

「そうだね、大体……一週間くらいかな」

吐息に乗せるように小さく囁いた隼人を、ナツはじっと見つめる。

「雲じいのぎっくり腰が治るまで、だから、長くてもその位だろうね。天界の時間はこっちの時間よりだいぶゆっくり流れるけど、それでも……」

「そか。わかった。お前、ウチに泊まるんだろ？　布団用意してやるからさ」

ただ夏休みに泊りにきた友達に言うような台詞をナツは言って、洗濯干しを再開した。

それ以上、何も言わず何も聞かないナツに、隼人は相好を崩してぽつりと呟く。

「やっぱり、ナツはいいよね」

自分にはもったいないくらいのいい友達だと、隼人は素直な気持ちで言う。そんな隼人にナツはぷいとそっぽを向いて顔を隠した。

「ふん、ナツ様だからな！」

表情は見えないが、耳が赤くなっているのを隼人は見逃さなかった。これだからナツはいい。可愛いと言ったら怒るから言わないけれども。

東から射す午前の太陽は、仲良く洗濯物を干す青年達を焦がすように勢いづく。それぞれの胸に秘めた想いをそのままに、時間はじっとりと過ぎていった。

洗濯物を干し終えた二人は、家の中に戻った。日差しに当てられ、少しひりつく頬を撫でながら、ナツが台所へ向かうと、風呂掃除と一階の部屋掃除を済ませたハルが、居間で新聞を広げて茶を飲んでいた。

「ハル兄、今日はバイトないの？」

ナツが台所から声をかける。二つのコップと麦茶の入ったポットを持って居間にきて、そしてはっと立ち止まる。

「あ、麦茶も飲めないんだっけ」

自分を見てちょっと気まずそうにしたナツに、隼人はその行動の

中のナツの自然な優しさに微笑む。

「うーん、飲んで排泄できなくなっても困るしね」

「飲んでもいいけどその後どうなるんだろう？」　と、お腹をさすりながらさらりと言った隼人に、ハルが飲んでいた麦茶を噴き出した。

「ちょ、隼人！　おま、そんなこと言うなよ！」

口からだらりと雫を垂らした情けない表情のハルに、隼人もナツも笑った。笑われたハルは、口元を拭きつつ元凶を作ったふたりを睨み付けた。

「ちくしょー。……今日は休みだ。お前は、ナツ？」

「あはは、ハル兄サイコー。……えっと俺は午後から。じゃあ今日の夕飯お願いね。俺は要らないからさ」

立ったままとぼとぼと麦茶をコップに注いで、ナツはすぐに飲み干した。そして二杯目を注ぎながら台所へ引き返す。冷蔵庫に麦茶をしまい、再び戻ってきたナツは、ハルの隣に腰を下ろして言った。

「ハル兄、今日はアキも食べられるようになったみたいだし、カレーとかでいいかもね。ああ、でもスパイスが胃に良くないかなぁ？」

「そうだなぁ、どっちかって言うとカレーよりグラタンとかの方が優しい感じしないか？　アキの好物だし」

「ハル兄グラタンなんて作れるの？　今日はハル兄が作るんだよ？

ってか夏にグラタンって」

「あ、そっか、そうだったな。んじゃ、他にアキの好きなもので……」

くすくすと笑い声が聞こえてハルとナツはそちらを向いた。言わずもがな隼人が、本日の夕飯に関する兄弟討論を見て笑っているのだった。

「ホントにアキ大好きだよね、ふたりって。微笑ましいってこういうことだよね、きっと」

その言葉に仲良し兄弟は、ちょっとばつが悪そうに顔を見合わせ、そして一瞬の後開き直った。

「ま、否定はしないな。何しろアキは超絶可愛いからな！　自慢の妹だ！！」

「正直アキ以上に可愛い女の子に会ったことないもんね、俺。けど身内の贔屓目じゃないんだからショウガナイよね」

真顔で言い切った妹バカふたりに、隼人はさらに声を上げて笑う。苦しそうに大笑いする隼人に、ハルはやはり真顔で言った。

「そんなアキ大好きな俺たちだけどな。お前だって人のこと言えないだろ」

ふいに真剣に投げられた言葉に隼人は笑うのをやめた。ハルの顔をじっと見つめる。

「……死んでから天使になって、恋人のところへ来た奴の話なんて聞いたことないよ」

それが自分に対するハルなりの賛辞だと、隼人は受け取った。

「はは、そうだね。……ありがとう、ハルさん」

曇りのない笑顔とともに言われた「ありがとう」に、ハルもナツも苦笑した。最愛の妹の心を奪った男であるのに、憎めないのは自分たちの性格か、隼人の人柄か。

アキを見てくる、と二階へ上がっていった隼人を見送ったふたりはどちらからともなくため息をついた。

「あいつの葬式で泣いたのが嘘みたいだな」

複雑な表情で新聞をたたんだハルに、ナツがやはり複雑な表情で言った。

「……一週間くらいだって、ハル兄。あいつ、どうするつもりなのかな……？」

和やかな空気の中で忘れそうになるが、隼人が死んだことはどうしようもない事実であって、覆すことはできない。飲んだり食べたりできないことを除いて、生きているのと変わらない隼人の姿は、錯覚を起こさせる。それがアキの心にどんな影響を及ぼすのかと、ナツは心配していた。

アキの恋人である以前に、隼人は自分の親友である。自分の考えうる最悪の結果になってしまったら、絶対ぶん殴ってやる、と心に決めて、ナツは微妙にぬるくなった麦茶を飲み干した。

「一週間……か」

ハルが呟いて、居間は重い沈黙に支配された。そこに日向家本来の天使がぱたぱたと走って来た。

「ハルちゃーん、ぼく宿題終わったよー」

いままで部屋に篭っておとなしく宿題をやっていたフユが、終わって嬉しそうに一階に下りてきたのだ。手にはプールバッグを持っている。

「今日学校のプールの日だから、僕行ってくるねー」

「おー、隣の晶子と一緒か？　気を付けて行くんだぞ」

小学校五年生なのに自分でスケジュール管理ができるのはすごいと兄ふたりは感心し、エンジェルスマイルを浮かべた愛らしい弟を送り出す。

玄関で揃って手を振って、弟の小柄な後姿を見送ると、長兄と次兄はまた揃ってため息をついた。

「しっかり育ってくれたのは助かるけど、やっぱりちょっと気の毒っていうか……」

「うん、あんまりしっかりされると逆にな。気丈さに、泣けてくるって感じだな……」

ふたりは自然と仏壇を眺めていた。今まで日常、特に意識することもなく過ごしていたが、隼人が現れたことで、無意識のうちに気

にかかったようだ。写真の中、色褪せることのない、笑顔。

「母さん亡くなって、もう七年か」

「七年……か。時間っていうのは、容赦ないよな」

ハルは大好きな向日葵に囲まれて笑う、美しい母親の写真を見つめ、そして呟く。

「母さん、天国にいるのかな」

ナツは無言で、何かを考えているようだ。

仏壇に置かれた母親の遺影は、静かに兄弟を見つめる。ハルはそのまま、母親と過ごした幼い日々の記憶に、久方ぶりに思いを馳せ、目をつぶった。

7

太陽もそろそろ地平線の端に沈もうかという頃。
眠りの淵から眼を覚ましたアキは、ぼんやりと部屋を見渡した。隙間の開いたカーテンから零れる光は、夕方のそれで、薄暗くなった部屋に大きなため息をついた。

また、倒れたのか。

何故だかすっきりしている頭にアキは首を傾げた。が、よく寝たからだ、とすぐに思った。我ながら現金だ。天使の姿で現れた隼人をずっと否定していたのに、その存在に安心して眠ってしまうなんて。

アキはベッドに体を起こした状態で膝を抱え、唇を噛んだ。苦しみ続けた一ヶ月、辛くて、食事ものどを通らずに、眠れなくて、ただ泣いていた日々が、彼が舞い降りたその日のうちに一転した。……やっぱり隼人が好きなのだ。
直後、布団に包まれたままの膝に、アキは頭をぶつけて目を瞑った。ちっとも痛くないし自虐的になったわけでもない。ただ、あまりに冷静に自己分析する自分に嫌気がさしたのだ。
“隼人が好き”、そんなことはずっとわかっていた。そうでなければこの一ヶ月、何のために泣き暮らしたと言うのだろう。好きで好きで、でもその気持ちをどこにもぶつけられなくて、消せなくて。もしかしたら全て夢なんじゃないかと、この馬鹿げた日常は明日になったら全部夢で、彼は笑顔で私の元へ戻ってきてくれるんじゃないかと。否定しては願って、自分の感情と思考に絡めとられて身動

きができなくなって。

だけど何故？

あんなに望んでいた隼人は、今自分の前に現れた。一目見て気を失ってしまうほどに嬉しかった反面、理性のどこかで全てを否定する自分がいる。

彼はもう、死んだ。

どんなに願っても、何を犠牲にしたとしても、もう戻らない。誰かが死ぬとはそういうことだと、知っているではないか。そんな彼が戻ってきた、それは――

がらりと窓ガラスの開く音がして、そちらを見ると、ベランダに続く窓から隼人が入ってきた。

「あ、アキ、起きたの？　具合はどう？」

今朝、朝日に輝いていた真っ白な二枚の翼が隼人の背中で揺れていた。アキはその美しさに、悶々と思考の渦にいたことも忘れ、そういえば話しているときとかご飯食べているときはなかったのになぁと、ふと疑問に思った。

「ん？　ああ、翼はね、使わないときはしまっておけるんだ。便利だよね。どんな風になってるのかは僕も知らないんだけど」

アキの目線で言いたいことを理解した隼人は、そう言いながらばさりと翼を震わせてたたんだ。次の瞬間、消えたように見えなくな

った。

「……どこかに、行っていたの？」

しまっておいた羽を広げて行くところは、きっと空を飛んで行かなければならないところなのだろうと、アキは思った。アキの手の届かない、どこか。

その問いに隼人は優しく微笑んで、人差し指を上に向けた。

「うん、屋根に」

風が頬を掠めていく心地よさに、アキは声を上げた。

「わぁ、気持ちいい！」

夏の夕方、じりじりしていた太陽もその暑さを潜め、少しだけ涼しい風が吹く。遮るもののない屋根の上で、風は踊るようにアキの周りを吹き抜けた。

しまったばかりの翼をもう一度出して、隼人とアキは屋根の上にのぼった。隼人に抱えられて空を飛んだアキであるが、ほとんど一瞬だったために声を出す暇すらなかった。

屋根の上に腰掛けたアキは、しばしオレンジ色に染まる空と、家々のその向こうに広がる田んぼと川原の緑を気持ちよさそうに眺めていたが、横からじっと見つめてくる視線に気づいてぱっと顔を背

けた。
せっかく隼人と一緒にいるのに、思わず景色に夢中になってしまった。そんなアキを見て隼人はふっと笑って、そして言った。
「僕の仕事、見せてあげる」
そうして懐から件の缶を取り出した。
「あ、＞神様の絵の具＜」
「うん」
空に雲を描くための絵の具。どんな風にするんだろう、とアキは期待して身を乗り出した。
「こうやってね」
そう言って隼人はおもむろに絵の具に指を突っ込んだ。透明な水のように見えたその液体は、意外なほどの粘性を持って隼人の指に纏わり付く。隼人はそのまま空に指をかざし、すっと左から横に薙いだ。
オレンジ色の遠くの空に、ふわり。
それまでなかった白い雲が、薄く溶けるように滲み出した。
「わぁ……」
それだけを声に出し、アキは手で口を押さえて、雲に見入った。
隼人はそんなアキを横目に小さく微笑み、さらに絵の具に指を入れ、次の雲を描く。

「今度は犬でも描いてみよっか？」

その言葉に、いたずらっ子のように瞳を輝かせたアキに、隼人は満足そうに笑う。

まるで魔法のようにしなやかに動く指先から、少し茶色みを帯びた、耳の垂れた犬の横顔が空に映し出された。

「空がオレンジだから、あんまり違和感ないでしょ？」

そういってくすりと笑う隼人に、アキは破顔で答えた。

くま、うさぎ、アイスクリーム……と、隼人の指は次々に可愛らしい雲を描き出す。元々絵を描くのが好きだった隼人は、なかなか上手な絵を描く。次のリクエストを尋ねてきた隼人に、アキは少し考えてから「串にささったお団子」と言った。隼人は笑いながらお団子の雲を浮かび上がらせる。お団子はアキの大好物で、よくふたりで分け合って食べた、思い出の品だ。

「アキ」

隼人が唐突にアキに呼びかけた。

「……時が来たら、僕は天界に帰る」

アキの口元だけが笑みの形のままで凍りついた。ふたりの間を、夕方の生ぬるい風が吹きぬける。

「勝手に来て勝手に帰るだなんて、ごめんね。……ごめんね」

帰る。

その言葉にアキの胸は張り裂けるように痛んだ。

ああ

「いつ……？　いつまでいられるの……？」

隼人の顔から目を逸らせないまま、アキの口は勝手に、聞きたくて聞きたくないことを尋ねる。ただ、胸の痛みを堪えるのに必死だった。

「長くても……一週間くらいだと思う」

申し訳なさそうに呟かれた返事に、アキは負けそうになる。

一週間。

あと一週間の後で、また隼人はいなくなる。自分の前から、消える。

ああ

何か言わなければ、とアキは思った。

風の音だけが沈黙を破る。太陽はみるみる沈んでいき、オレンジは紫に変化していく。泣きたくなるほど美しい絶妙なグラデーションの中、先ほど隼人が描き出した雲が、形をゆっくりと変えながら流れていく。

ああ、そうか。
私が天使の隼人を受け入れられなかったのは。
……二度目のさよならを、怖れていたから。

アキの瞳からとうとう流れ出した涙に、最後の光が反射した。
「隼人」
搾り出すような小さな呼び声に、隼人は答えた。
「……何？」
「もう……さよならしたくない」
アキは隼人のほうを見ずに言った。隼人はそんなアキをじっと見つめて言った。
「アキがそれを……望むなら」

何か大切なものを、心の奥深くに沈めたような気がした。何か、忘れてはいけない大切なものを、自分の手で泥の底に沈めたような。このまま、どこまでも、落ちていったらいいと、アキの心のどこかで誰かが呟くのが聞こえた。
急に強風が吹きつけ、隼人は無言でアキを抱き寄せた。アキも何も言わず、その腕に寄り添う。

下からふたりを探すハルの声が響いてくる。夕飯の時間になったのに、見当たらないふたりを心配する声だ。
擦れるような風の音に便乗して、聞こえない振りをした。黙って抱き合ったまま返事すらしなかった。
ただ、お互いが惜しくて、この時間が惜しくて、離れたくない。
希望と絶望の境界線の上で、ふたりは何かを必死に繋ぎとめるように、抱きしめる腕に力を込めた。

いつの間にか輝き始めていた星々と黄金の月に、アキがようやく時間経過を知ったとき、隼人はアキを抱えたまま、よっと立ち上がった。

「じゃ、下に降りようか。ハルさんが心配してる。おじさんも帰ってきてるよ」

うん、とアキが返事をする前に、温度はなくとも柔らかい腕でアキを抱きしめたまま、隼人は屋根の上から庭に飛び降りた。心の準備もなしのいきなりのダイブに、アキはパクパクと口を開け、抗議の目で隼人を睨み付けた。

「なっ、何で直接飛び降りるのっ！？」

必死に呼吸を整え、ぜーはーしながらそれだけ口にしたアキに、隼人は思わず噴出しながら、縁側にアキを下ろした。

「はは、いや、ちょっとやってみたくって。ごめんごめん」

ぷーとふくれたままのアキを見て、苦笑しながら隼人は足の裏に少しついた土を払う。昼間の強烈な太陽の下でカラカラに乾いた土では、そんなに汚れていない。

アキはそんな隼人を横目でじとっと見つめ、

「ぞうきん持ってくる」

と、走っていってしまった。

隼人が仕方なく縁側に腰掛けると、廊下の薄暗がりから、栄がぬっと顔を出した。

「アキは、大丈夫か？」

娘を心配して低く響く声に、隼人は柔らかく微笑む。

「はい、大丈夫です。すみません、日も落ちちゃったのに、屋根の上なんかにいて」

「……お前は、大丈夫なのか、隼人」

アキに向けられたのと全く同じ響きで自分に向けられた言葉に、隼人は驚いて一瞬返事が遅れた。

「！　はい、大丈夫です」

その返答に満足したのか、栄は口元を綻ばせて隼人の後ろを通過した。通り過ぎるときに、隼人の頭にぽんと手を置いて。

「……あのっ！」

一瞬触れた暖かさに、隼人は思わず声を掛けた。振り返り首をかしげて、栄は言葉の続きを待った。

「おばさん……いや、葵さん、元気ですよ」

小さく囁かれた言葉に、栄は目を大きく開けて固まってしまった。普段表情の変化に乏しい栄には、珍しい表情と言える。その顔を見つめたまま、隼人は更に続けた。

「……おじさんに、伝えてくれって。……『しょうがない人ね』って」

隼人を凝視したまま、栄は口を開きかけた。が、廊下を走ってくるアキの足音を聞き、出かけた言葉は、のどの奥に飲み込まれてしまった。

「あれ？　お父さん、何してるの？」

雑巾を片手に戻ってきたアキは、そこに不自然に立ったままの父親に声を掛けた。栄は少しだけ息を吐いて、踵を返した。

「いや、なんでもない」

そのまま立ち去ってしまった栄に、アキは首を傾げて、その場にいた隼人に疑問をぶつける。

「何だったの？　お父さん」

「……ううん、特に、何も」

隼人はにっこり笑って答えた。アキから雑巾を受け取り、足の裏を拭く。やはり大して汚れていないようだ。

「ただ、心配してくれただけだよ。僕たちのこと」

そう言って隼人は縁側の上に立ち上がり、アキを見下ろした。明かりの灯されていない薄暗い縁側では、隼人の表情は見えにくい。栄と隼人が何かの話をしたのは確実だ。ただ、隼人に言うつもりがないことはわかったし、それになんだか隼人が嬉しそうにしているような感じがして、アキはそれ以上、何も聞かないことにした。

その後、相当心配したのだろう、憔悴した表情を隠さないハルに、アキと隼人は正座させられ説教を受け、バイトから帰ってきてそれを目撃したナツに大爆笑された。フユは、ハルが半泣きでふたりを探し回っている間、ハルに指示された通りに先に大人しくご飯を食べ、お風呂に入って早々に寝てしまった。このマイペースぶりは栄に似たのであろう、当の栄も、説教をするハルたちを横目に、黙々とひとり食事をとり、そのまま自室に引き上げてしまった。

くどくどと同じことを繰り返し話し続けるハルの前、殊勝な面持ちで正座したアキの手を、隣で正座する隼人が握った。膝の上に置かれたまま、優しくも強い力を感じさせる手。アキの視線を隼人が受け止めた。

それは共犯者の約束。

それは悲しくむなしい約束。

寂しさと恋しさに囚われた、ふたりの愚かさが形になったもの。

長い一日が、終わる。

8

朝日もまだ顔を出さない、早朝。隼人はまた、屋根の上に上がっていた。

本来、雲じいの仕事を代行する為にやってきた隼人には、こなさなければならない仕事があった。一週間分与えられたノルマ。これさえやっておけば、後は自由にしていいと、雲じいは耳打ちしてくれた。

雲を描く、こんな仕事があることに、隼人も最初は驚いた。子供のお絵かきみたいなものなのかと思っていたが、仕事に就いてからその大変さを理解した。実際、雲じいはいとも簡単に雲を描く。神様会議で決められた通り、雨じいや風ばあの要望に沿ってそれらしい形になるように描かなければならない。隼人も天界での修行中、繰り返し繰り返し雲を描き続けた。しかし案外難しいことに、周りに元々ある雲と似せなければ不自然になってしまうし、かといって描くのに失敗して雨が降らないような雲を描いても仕方がない。

筋がいい、とみんな褒めてくれたが、どんな仕事でも、やっぱり難しいんだなぁ、とアルバイトの経験もない隼人は感心し、雲じいや他の先輩天使の仕事ぶりを尊敬した。

懐から件の絵の具の缶を取り出し、指にとる。いつみても不思議だ。もうだいぶ慣れたが、蜂蜜のようでいてべたべたせず、高級な絹のような感触でいて指に吸い付く絵の具。無色透明だからこそ、気合を入れて集中して描かなければ、思う通りの色は出ない。

夜明け前の空。透き通るような黒。細く弓のような下限の月。かすれるような群青色の雲の群れが、遠くを流れていく。煌めく星々に被せるように、隼人は指を滑らせた。

するりと伸びていく、薄い青。夜の雲は色を出すのが難しい。闇に紛れるように、トーンを暗く押さえなければならないからだ。

隼人はひとつ息をついて、次の雲を描く。次は、雨雲に成長させる種雲だ。これが一番難しく、実はまだ、満足のいく雲が描けたことがなかった。

静かに気合を入れて、とん、と空を押すように点を打った。

「あ、描けた」

ぽつりと漏らすように呟く。成功か失敗かはすぐに分かる。これは、成功だ。

隼人は思わず会心の笑みをこぼした。

遠くに浮かぶ星のような一点。この小さな小さな塊が、風に流され、水蒸気を吸収し、大きくなって雨を降らす。

「……不思議なものだよなぁ」

知らないこと、驚くようなことがたくさんあった。当たり前のように存在している世界は、様々な営みが重なり合ってその形を作っている。自分達の理解の及ばない、途方もない力が、何らかの意思を持って世界を動かしている。

「僕もそっちの仲間、なんだよな」

隼人は自分の手を見つめた。皺のない、人形のような手。血の通わない、冷たい手。感覚はある。生きていたときと変わらない、触れる感触。

なんだか疲れた気がして、隼人はため息をついて屋根に寝転がった。
本当はため息をつくことさえ、自分でそう感じているだけでおそらく息はしていない。鼓動もなく、脈拍もない身体が、呼吸を必要とするのだろうか？

寝転がったまま、右手を空に透かすように、顔の前にかざした。つい昨日まで、空が透けて見えた自分の手。飾りのようなきれいな爪が、弱弱しい月の光を反射して光り、白い手が闇の中にぼんやりと浮かび上がる。

本当は、絵の具のためではなく、必要だった身体。
実体がなければ、触れられないひと。

アキ

ないはずの心臓が、とくんと音を立てたような気がして、隼人は身を起こした。
左の胸を押さえて確認する。……何の音もしない。

「……冗談じゃないよ、早すぎるだろ」

浮かぶのは、焦り。
隼人は胸をドン、と叩いて、これ以上苦しませないでくれ、と願った。……誰にでもなく、願った。

だいぶ日が高くなり、蝉が鳴き始めた。耳に心地いいとはいえない蝉の声に、アキは重い瞼を上げた。しばらくはそのままでぼーっとしていたが、はっ、と気がついたように、ベッドから跳ね起きる。

パジャマのままで一階へ駆け下り、ぼさぼさの髪を振り乱し、居間の障子を開けた。

「あ、アキ、おはよう」

隼人は朝食の準備を手伝い、皿を食卓に運んでいるところだった。爽やかな笑顔で挨拶をされ、アキはその場にへなへなと座り込んだ。

「……お、おはよう」

隼人が、いる。夢ではなく、現実に。

思わず大きなため息をついたアキに、隼人が近くに寄ってきた。

「アキ？　大丈夫？　気分でも悪い？」

心配そうに覗き込んでくる隼人に、アキは慌てて首を振った。

「ううん、大丈夫。何でもないの」

そう言って立ち上がり、照れくさそうに笑うアキを、隼人はそのやさしい空気で包み込んでくれるようだった。

「おーい、隼人、こっちも持ってってくれるか？」

台所からハルの声が響く。

「はーい」と返事をした隼人は、アキの髪を撫でて言った。

「アキ、頭ぐちゃぐちゃだよ。ご飯だから、着替えて顔洗っておいでよ、ね」

まるで小さい子供の面倒をみるようだったが、どんな言葉でもアキは心底嬉しかった。うん、と元気よく頷くと、洗面所へ向かって走っていく。

隼人が、いる

それだけのことが、アキをこの上なく上機嫌にしていた。洗面所の鏡を見れば、隼人に言われたとおり、どう寝たらこんなになるのかというほど、髪はぼさぼさになっていて、アキは慌てて櫛を手に取った。こんなところを隼人に見られてしまうなんて。

ばたばたと走り回って、ようやく見られてもいいくらいに身なりを整えたアキは、今度は障子の隙間から、居間を覗き込んだ。

もうすっかり朝食の仕度も済んで、手持ち無沙汰になったのか、隼人は柱に寄りかかり、テレビを見ている。なんでもない日常的な姿に、アキは胸が震えるように感じて、首を振った。

「おい、アキ、何してるんだ？」

目の前で不審な行動を繰り広げるアキに、ナツが後ろから声を掛ける。これは元気になった、と解釈してもいいのだろうか？　と眉を顰めていると、アキが小さな声で呟いた。

「隼人がずっといてくれたら、毎日楽しいのに」

言葉の真意を測りかね、ナツは眉間にしわを寄せて無言でアキの肩を叩いた。

「わ、ナツ！　いるんなら声掛けてよね！　びっくりした」

胸を押さえて、ほおを上気させて笑うアキに、ナツはさらに眉を顰めたが、何事もなかったように振舞った。

「おう、悪い。さっさと入れよ、アキ。後がつかえてるだろ？」

そういって振り向いたナツの後ろには、いつのまにかフユが眠そうに目を擦りながら立っていた。

「おはよう、ナッちゃん、アキちゃん」

「おはよう、フユ」

アキとナツは揃って声を掛けると、三人一緒に居間に入っていった。テレビを見ていた隼人は、三人に気づくと立ち上がった。

「おはよう、ナツ。フユくん」

にっこり笑った隼人に、フユが走り寄っていって抱きついた。

「隼人兄ちゃん、おはよう！」

ころん、と自分の懐に飛び込んできたフユを、隼人は難なく抱きとめた。ただ、体温のない自分の身体では、フユが冷えてしまうだ

ろうと、離れた方がいいと言うと、フユが逆に隼人に擦り寄るようにして言った。

「ううん、暑いから、隼人兄ちゃんはひんやりしてて気持ちいいよー」

暢気な子供の発想に、みんなが笑った。隼人も苦笑してフユのふわふわな髪を撫でた。

「お、みんな起きてきたな。後は父さんだけか」

台所からハルが長身を折り曲げるようににょきっと顔を出した。

「父さんなら洗面所にいたからもう来るよ」

ナツはそう言いながら台所に入っていく。コトコトと弱火にかかっている鍋のふたを開け、傍に置いてある味噌を適量溶かし込む。

「今日は豆腐とわかめしか入れてないぞ、だしは出てるだろ？」

ハルが再び台所へ戻り、ナツの隣に立った。ナツは味噌汁の味見をして頷く。

「うん、これでオッケー。ハル兄、そろそろ味噌の分量覚えたら？」

料理が苦手なハルは、これまでの練習の成果で、ある程度の簡単な料理を作れるようにはなったが、味噌汁に入れる味噌の量が未だに判断できず、しょっちゅう入れすぎては栄に怒られていた。そこで仕方なく、味噌を入れる前まで自分で作り、最後の仕上げはナツ

に頼むことにしているのだ。これじゃいつまでたっても進歩しないよ？　とナツは言うのだが、何故かどうしても上手くならない。
弟の視線を苦笑いで誤魔化し、味噌汁を運ぼうと持ち上げる。

「ハル兄」

「ん？　何だ？」

不意に呼び止められ、鍋を持ったまま振り向く。ナツは自分から呼び止めておいて、下を向き何か考え込んでいるようだ。

「……いや、やっぱ何でもない。ごめん、ハル兄」

「……？」

顔に疑問符を貼り付けたハルに、フラフラと手を振って、ナツは背中を向けてしまった。変だなとは思いつつ、ハルは重い鍋を置く為に、そのまま居間へ移動した。

台所にひとり残ったナツは、腕を組んで思案顔のまま立ち尽くしていた。

……アキが、おかしい。

「あいつちゃんとわかってる……よな？」

二卵性であっても、同じ日に生まれずっと一緒に成長してきた双子である。ナツはアキの変化を敏感に感じ取っていた。

嫌な予感が当たらなければいい。

ナツはそう願い、髪をがしがしとかきながら、家族の待つ居間へ向かった。

9（前書き）

年明けですね。物語も中盤に差し掛かってきました。のろのろペースではありますが、もう少しお付き合いください。

9

「それで今日は、どうする予定なんだ？」

朝食の席で口をもぐもぐさせながらハルが問う。目線の先は、アキだ。

「どうって……どうしよう？」

問われたアキは、さらに質問を隼人に回した。

食卓には着かず、少し離れたところでぼんやりテレビのニュースを眺めていた隼人は、話題を振られて考える様子を見せ、またアキに質問を戻した。

「そうだね……アキはどうしたいの？」

「えっと……、天気もいいし、どこかへ出かけたい……かな」

箸を持ったまま、アキはもじもじと言った。せっかく隼人がいるのだ。デートくらいしてもいいじゃないか、と。

しかしその答えに、隼人は困ったように笑った。

「外へ行くなら、僕は一緒にいけないな……残念」

「は？　何でだよ」

玉子焼きを摘んだハルが、口に放り込みながら聞く。ナツも視線

だけ隼人に向けた。

「えっと……どう説明したらいいかな。簡単に言うとね、この家の周りには結界が張ってあるんだ。僕が問題なく存在できるように」

分かるような分からない説明に、アキは額にしわを寄せて首を傾げた。

「死んだ人間は生き返ることはない。これはこの世界の絶対のルールだ。僕は厳密には生き返った人間ではないけど、ここに存在するべきではない魂だ。……わかる？」

隼人は全員を見渡して確認する。みんな黙って頷いた。栄はひとり黙々とご飯をかき込みながらテレビを見ていたが。

「それを無理なくこの場に居られるようにしているのが今張ってある結界で、そこから出ると、僕はこうしてのんきに存在できなくなる。存在を保つのがとても難しくなるんだ。力が要る。だから僕はこの家を離れられない」

隼人の固い説明に、全員が黙り込んでしまったため、食卓は重い空気に支配された。箸を持つ事さえ躊躇われるような静けさの中、会話するきっかけすら失ってしまった。

そこにずずずー、気の抜けた音を立てて、栄が味噌汁を啜った。そして固まってしまった子供達を見渡し、ことん、とお椀を置いて一言呟いた。

「……家にいればいい」

渋い低音の声が響き、つっかえていた空気が流れ出す。ハルは大げさな素振りをしながら、いつのまにか落としてしまった箸を拾う。

「うん、そうだそうだ、外はめちゃくちゃ暑いぞ、家にいればいい。そうだ、庭で水遊びなんかしたらどうだ？　な、フユ、やりたいだろ？」

「うん、ぼくやりたーい」

きゃらきゃらと笑いながらはしゃぐフユと、安堵の表情のハルを見て、隼人はがっくりと肩を落とした。

「ご、ごめんなさい……何か……。僕、もうしゃべらない方がいいかも」

先ほどの重い空気を作り出したのは自分だと、鈍くはない隼人は謝った。仕方のないことだが、隼人が『死んでいる』ことを強調してしまう話題では、雰囲気が盛り下がる。説明も自分が話すとどうしても硬くなってしまう気があり、隼人は落ち込んだ。

「だ、大丈夫だよ、隼人。ね、今日はみんなで水遊びしよ！」

デートに行けないのは残念だが、一緒にいられるならどこだって構わないと、アキは笑った。

「うん……ごめんね」

再度隼人が申し訳なさそうに言うと、ご飯を食べ終わり、食器を持って立ち上がったナツが、通りすがりに隼人の背中をバーンと叩いた。

唸ってうつぶせに倒れた隼人が『何するんだ』という顔で振り向くと、そこには凶悪な笑顔を浮かべたナツ様が降臨していた。

「……水着は貸してやる」

それは暗に、食卓の空気を重くした罰として、水浸しにするぞ、という意思を含んだ笑顔だった。

水しぶきに陽の光が乱反射する。

庭のキウイ棚の下に出した丸いビニールプールで、フユとアキが水着姿で戯れていた。ハルは上半身裸になって、ホースで水をかける役だ。

日向家の庭は高めの生垣で囲まれていて、さらに大きなサルスベリと一面の向日葵が、外からの視線を遮っている。可愛い妹と弟が変な輩に狙われる心配もなく、またキウイ棚が容赦ない直射日光から肌を守ってくれるため、ハルも安心して水遊びを推奨したのだ。

ナツと隼人は遊びに加わらずに、縁側でスイカを切りながら、きゃあきゃあと弾ける笑い声を聞いていた。

ナツはスイカの切れ端を口に放り込みながら、ざくざくと切り分けていく。

切り終わる頃には、おいしい部分はなくなってしまうんじゃないかと隼人は思ったが、逆らえば水浸しの刑になるので、黙ってそれを見ていた。

適当な大きさに切り分けたスイカを、ナツが隼人の持っているお盆の上に置いていく。

「そういや、天国にスイカはあるのか？」

素朴な疑問だ。大体ものを食べているのかすら分からない。

「あるよ。世界中のどんな食べ物も、食べたいと思ったら出てくるよ」

隼人は食べたそうにスイカを見つめて言う。

「出てくる？」

「うん、料理好きな人は自分で料理もするけど、そうでない人はね、ただ自分が食べたいなって思えば、なんだって食卓に上がるのさ」

隼人は何でもないことのように言うが、ナツとしてはとても意外な話だ。

「天国って便利なのな。じゃあ例えばフランス料理のフルコースが食べたいって思ったら、それが出てくるのか？」

「うん、そうだね。ちゃんと想像できたら、の話だけど」

「は？　まさかアレか、全部自分の想像の産物ってヤツか？　じゃあ食べたことないもんだったら結局食べられないんじゃないか」

ナツは切ったスイカを盆に載せて、水遊びに夢中になっている三人の元へ持っていってまた戻る。あの輪の中に加わるつもりはない。

スイカの汁でべたべたになった手を、濡れ布巾で拭きながらナツは微妙な顔をした。
隼人はそんなナツを見て笑う。
「はは、正解。要するにね、天国に住んでる人って体がないじゃない？　食べる必要が最初からないんだよ。食べ物は食べてるつもり、飲み物は飲んでるつもり、で、精神的に満足できたらそれでいい、って仕組みになってる。本当は天国に住んでる人たちはそのことに気づいてない。自分には体があるって思っているんだ。おいしいものいっぱい食べられて幸せだなって。僕は天使になったから、それを知っているだけ。僕も最初天国に住んでたときは、何て便利なんだろうって思ったけど」
当時のことを思い出したのか、隼人は苦々しく笑った。隼人は思い出す。祖父母と暮らしていたあの頃。娘よりも早く天国に来てしまった孫を、可哀想に可哀想に、と毎日パーティーのように盛大にもてなしてくれた。毎日こんなに料理を作るのは大変だろうから、もういいよと、数日してから言うと、「あら、作っているわけじゃないから大丈夫なのよ」と何事もないかのように言われ、きょとんとした。
天国で暮らすと、それまでの生活観が一変する。
物は売っていない。欲しいものは願いさえすればすぐに手に入るから。お金も必要がない。買う必要がないから。服も、食べ物も、高級な化粧品も。車や家、広大な土地。望めば何だって手に入る。ただし、細部まで思い描くことができるものに限り。
「空想の中で、生きてるようなものなんだ。それに気づいてしまえ

ば、ひどく虚しい。だから気が付かないように、そういうふうにあの世界はできている」

あっという間にスイカを食べ終え、再び元気いっぱいに遊び出した三人の姿を、羨ましそうに見つめる隼人の目は、さらにどこか遠いところを見ているような気が、ナツにはした。確かに、この自分の親友は、遠い世界へ行ってしまった。

「お前は、虚しいと思ったのか？」

ナツの茶色の瞳のその奥が、水底に揺らめく宝石のように光って、隼人は少しだけ微笑んだ。

生きている人間が、擦り切れるように生きるこの世界。死んだ人間が、夢の中を生きるあの世界。虚しい世界は、どちらか。

「……そのことに気づいたときは、ちょっと虚しいって思ったよ。でもその世界に生きる人にとっては、全部本物なんだ。だから本当は、虚しいとか、そうじゃないとか、誰にとってもどうだっていいんだ」

どこで生きていたって、どう生きていたって、願うことはひとつだ、と隼人は笑った。何か大切なものを見つめるような、慈しむような柔らかい笑顔で。

「大切な人が、幸せに暮らしてくれたら、それでいい。できれば自分も、一緒に幸せに暮らせたら、それが一番嬉しいと思うけど」

二つの世界を知る隼人。その一番の願いが、叶えられないまま宙ぶらりんに揺れている。誰にだって叶えてやれない。たとえ神様だって叶えられない。

緑色の葉の下で、顔にかかる陰も緑色だ。風に揺れて擦れる葉の音に、蝉の合唱が重なる。

ここに、いるというのに。

すぐ傍に、いるというのに。

ナツはどうしようもないやるせなさに、両手で顔を覆って後ろ向きに倒れこんだ。

「ナツ？」

不審そうな隼人の声が聞こえた。

『死』というものの本質は、案外こういうものかもしれない、そうナツはぼんやり思った。

指の隙間からこちらを覗き込む親友の顔が見えた。知り合って、友達になって、一年とちょっと。水の中を泳ぐように、適当に世の中を渡ってきた自分に対し、真面目一辺倒で誠実にやってきた隼人。実際どこに共感を覚えて意気投合したのかすら不明だ。

―何で死んだんだよ

そう言いたくてナツは口をつぐんだ。誰も責められない。ただ、隼人はもう戻らないと、それだけが分かっていることだから。大きく息を吸って吐き出した後、ナツはよっ、と勢いをつけて体を起こした。

「大丈夫か？　暑いのか？」

心配そうに覗き込んでくる隼人の顔を見て、ナツは思わず笑って

しまった。何がおかしいのか、と不思議がる隼人の顔を見てさらに笑う。

……真面目すぎるからダメなんだよ

長所でもあり欠点でもある。しょっちゅうそう言ってあげていたのだが、持って生まれた性格なのだろう、死んだって直っていない。

隼人はナツのことをもったいないくらいのいい友達だとよく言ってくれた。しかしナツに言わせれば隼人こそナツにとっての“もったいないくらいにいい友達”であった。母親を早くに亡くし、寡黙な父と不器用な兄と共に家を、家族を守らなければならなくなったナツにとって、同年代の少年達は幼すぎてうるさかった。ピリピリした雰囲気を出していたこともあって自然とひとりになってしまっても、ナツには静かでちょうどいいとしか思えなかった。そんなナツの隣に、隼人はいつの間にかそっと、まるで最初からずっと隣にいたかのように寄り添っていた。凹凸のようにぴったりとはまる会話にナツの心がどれだけ癒されたかを隼人は知らないだろう。ナツがどんなに不貞腐れた、いじけた発言をしても、真面目に考え応えてくれる隼人の素直さがどんなに救いになってくれていたかも。

「馬鹿は死んでも直らないって言うけど、真面目すぎなのも直んないもんか」

ぼそっと聞こえないように呟いた言葉は、やはり隼人には聞こえていないようだった。ナツは心に浮かんだ感傷を吐き出すようにふっと笑った。

「ほら、スイカ食べろ、熱中症かもしれない」

真面目な顔でスイカを差し出してくる隼人に従い、ナツはくすくす笑いながらすっかりぬるくなったスイカを頬張った。泣きそうに

なっていることなど微塵も表に出さずに。

―俺だって、大好きだったんだよ、隼人。お前のそういうところが。もちろん、アキとは違う感情だったけど。

強い強い日差しの下、揺れる緑に遮られた日陰に踊る水しぶきと歓声。そこに加わる蝉の大合唱。

ナツはスイカを齧りながらも、心配そうな顔で見つめてくる隼人に、『心配するな』と笑顔を見せた。これが、隼人と過ごす最後の夏だと、本当の最後なのだと、スイカと一緒に腹の底に飲み込んだ。

―死んで欲しくなんて、なかったよ、隼人。

スイカを持っていない左手が無意識に虚空を彷徨い、隼人の腕に触れた。夏の暑い日差しと気温の中で、触れた瞬間は暖かく感じたが、中から伝わってきたのは冷たさだった。確かに触れているというのに、この上なく不確かな存在をぎゅっと捕まえるかのように、ナツは無言で隼人の腕を掴んだ。つかまれた隼人は何を思ったか、ナツの頭に手を載せて、髪をそっと撫でてきた。

まるで聞き分けのない子供を撫でるような優しい感触に、ナツは照れくさくなって頭を豪快に振ってその手を落とした。

「……何すんだよ」

「最初に腕掴んできたのはナツだろ？」

唇を尖らせて照れを隠すように言ったナツに対し、隼人は明るく笑いながら再びナツの頭に手を伸ばした。

「だからやめろって！」

「ははっ」

キラキラと輝くようなナツと隼人の笑い声が辺りに響いて、ハルとアキ、そしてフユはビニールプールの中で顔を見合わせた。そしてお互いにっこりと笑い合い、いつのまにかくすぐり合いに発展して子供のようにはしゃぐ二人を、キウイ棚の下から静かに微笑ましく見守った。

かつて過ごした日常が、再び戻ってきたような、そんな幸せを絵に描いたような一瞬だった。

「そういえばさ」

ずっと気になっていたんだけど、ひとしきり騒いで疲れたナツが額の汗を拭いながら口を開いた。髪の毛はぐちゃぐちゃになり、汗だくになりながらもなんだかすっきりした表情だ。

「何？」

隼人は髪を少し乱した程度で、ひとり涼しい顔をしてナツに振り返る。

「お前、家には行かなくていいのか？　いや、ここから出られないとは言ってたけど、さすがに親には会っておいた方がいいんじゃないか？」

「家にいるのは全く構わないが」と付け加えながら髪を手櫛で整えるナツに、隼人は一瞬固まったように動きを止めたが、何事もなかったかのように手をひらひらさせた。

「いや、いいんだ、あの人たちは。息子の幽霊が出たって、大騒ぎになっちゃうよ」

笑って言うその言葉が、ぎこちなさにぶれているのに、ナツは気づいていた。だから何か言おうとして開いた口をすぐに閉じた。両手を固く握り締め、それでも顔だけはにこにこ笑う隼人に、それ以上は追求することができなかったから。

「……なあ、隼人」

蝉の声が一瞬途切れた。

「……何？」

首を傾げた隼人に、ナツは単刀直入に聞く。聞けない質問の代わりに問う。もうひとつ聞きたかった事。

「お前、まだ何か隠してるだろ」

隼人が貼り付けるように浮かべていた微笑がさっと消えた。驚きに見開かれた瞳を、ナツの真剣な表情が食い入るように見つめた。一瞬で場に鋭い緊張感が満ちた。

「……うん」

小さく、零れるように隼人の口から落ちた肯定の言葉。戸惑いと驚きが綯い交ぜになったような表情で、隼人はそれ以上を口にしなかった。

しばらくの間、緊迫した状態のまま見つめあっていたが、ふいにナツがため息をついて顔を背けた。

「……お前らよく似てるよ、双子の俺よりずっとな」

ナツは吐息にのせて囁くようにそういうと、先ほど整えたはずの自分の髪をぐしゃぐしゃにかき乱した。隼人はそんなナツを見つめたまま立ち尽くしていた。

「ナツ……」

「あんまり、思いつめるんじゃねーぞ」

言葉と共に、ぼすっ、と隼人の腹に軽いパンチを入れ、ナツはスイカの皮を回収し、家の中へ入っていった。

残された隼人は、痛みはしないがお腹を擦り、首を緩く振ってため息をついた。

「あんまり勘がいいのも、どうかと思うよ……ナツ」

目の前のプールでは、はしゃぎすぎて疲れた様子のハルに、水をかけていたずらするアキとフユが笑っている。その向こうで一面に咲いた向日葵が、風もないのにざわりと揺れた。こちらを向く花の中心が、ちょうど自分を監視する目のように見える。ただそこに咲いているだけの、無害な花であるというのに。

「……わかってますよ、葵さん」

隼人の呟きは、再び鳴き始めた蝉の声にかき消された。

10

隼人が日向家に現れて四日。それまでの静けさが嘘のように、日向家は活気付いた。それはやはり、一家のムードメーカーであるアキが元気になったことが一番の原因だろう。

本来アキが多く請け負っていた料理を再開し、家族は久しぶりのアキの味に舌鼓を打った。アキはあまり几帳面ではないが、アキが一番母親から料理を教わっていて、いわばおふくろの味の継承者であり、意外にも料理は上手い。ナツが料理上手なのは単に器用だからで、アキが料理をしないときはナツが適当に作るのだ。

隼人は食べられないながらも、楽しそうに料理を作るアキの姿をにこにこして眺め、みんなが食卓を囲むのを微笑ましく見守っていた。

その日の夕食が終わって、それぞれが自由な時間を過ごしている頃。隼人は何気なく縁側に座って、外を眺めていた。サワサワと風に揺れる向日葵。薄暗闇の中に浮かび上がる大輪の花をぼんやり見つめていると、ふいに後ろから声を掛けられた。

「アキは、どうした？」

一番風呂を浴びて、すっかりくつろいだ雰囲気の栄であった。浴衣を着流し、飄々とした様子である。

「お風呂に入ってますよ」

にこっと笑って隼人は答えた。ほぼ一日中べったりしているが、さすがに風呂まで一緒に入っては、アキ馬鹿たちになんと罵られるか。確実に無言の圧力を掛けてくるであろう、アキ馬鹿その一である父親の栄を前に、隼人は思考を笑顔に隠した。

しかし不意に真剣な表情になって、囁くように言った。

「……そろそろ、来る頃かなぁって、思ってましたよ」

栄はその滅多に感情を表さない顔を翳らせて、遠くを見つめた。視線の先には、庭の向日葵。

「……ああ」

そうして隼人の隣に腰掛け、男ふたりは一旦沈黙した。月明かりの下、ただ黙って庭を見つめる栄は思いつめたような表情で、しかし隼人は逆に口元に笑みを浮かべた、穏やかな顔をしていた。何をするでもなく、言うでもないふたりの間には、それでも優しげな空気が流れていた。まるで、そのときを静かに待っているかのように。

「……アレは、元気だって言うが、その……」

口を開いた栄が、再び口を閉ざしてしまう。その姿に苦笑して、隼人は栄が聞きたかったことを汲み取って答えた。

「はい、元気にしてますよ、葵さん。……おばさんって呼ぶと怒るんですよね」

思い出したように苦々しく笑いながら、隼人は一瞬途切らせた言葉を、静かに続けた。ずっと話したかった言葉を、栄に伝える為に。

「……天国に着いた時、祖父母と一緒に僕を迎えてくれたんです。『来るのが早すぎよ』って怒られました」

気がついたとき、隼人は真っ白な門の前に立っていた。

門、といっても扉はなく、ちょうど神社の鳥居のように、くぐる穴が開いているだけのものだ。しかし上は見上げるのに首が痛くなるほど高く、それを支える左右の柱は四角く、柱というよりは建物のようにそこに建っていた。石造りの重厚なその門は、表面を繊細でかつ大胆な彫刻に覆われ、そのデザインは歴史の教科書にあった昔のヨーロッパの彫刻を思い起こさせた。

こんな大きな門、造るのにすっごく時間がかかるだろうなあ、などとつい暢気なことを考えてしまったのだが、ふと前をみると、門の向こう側に子供の頃に亡くなった祖父母の姿が見えた。泣きながら手を振る、懐かしい姿に、あぁ、もしかしてとその答えが頭をよぎる。

ほとんど無意識のうちに、一歩、二歩と踏み出して、その門をくぐり終えたとき、とても大きな力で締め付けられるような気配とともに、隼人は自分の死を知った。

思わず立ち止まって門を振り返る。が、そこに今さっきくぐってきたはずの重厚な門は影も形もなくなっていて、真っ白な空間が広がっているだけだった。

ああ、もう戻ることはできないんだな、と頭で理解する。

行く場所も分からず、とにかく前へ進む。祖父母が必死に呼んでいたから。だんだん近づいていく祖父母の姿は、幼い頃見送った姿よりも幾分若い気がした。けれどもやっぱり皺くちゃな顔にもっと皺を寄せてふたりは泣いていた。

「隼人……」

名前を呼ばれ、抱き寄せられ、隼人はぼんやりと考える。

ああ、僕はやっぱり、死んじゃったんだな

「何でこんな早く」と、手を握り締めながら泣く祖母と、もみくちゃに抱きしめてくる祖父。

頭では理解していても心が追いついていない。わんわん泣く祖父母を逆に慰めるように、隼人はその曲がった背中を撫でる。

ふと、前を見ると、その場にもう一人の人物がいた。おかしいな、父方の祖父母はまだ健在だったはずだし……と隼人は思い、顔を上げてよく見てみる。

今にも泣きそうな顔で立つ若い女性。どこかで見たことがある、と隼人は思った。

「あ……えっと、おばさん……？」

記憶を探ると、その答えはすぐに出た。毎日のように出入りしていた日向家。その仏壇に飾られた写真の中に、このひとは笑っていた。

日向家の四兄妹の母。栄の妻。日向葵（ひなたあおい）。

隼人が呟くと、そのひとはその写真と同じ笑顔でにっこりと笑った。そしてその笑顔を顔に貼りつけたまま、無言で拳骨を飛ばして

きた。祖父母を抱えて辛うじてよけた隼人は、突然の展開に目を白黒させる。
葵はちょっと残念そうに、当たらなかった拳をぶらぶらさせて言った。

「今度おばさんって言ったら、本気でぶっ飛ばすわよー！　葵さんって呼べって言ったじゃない！」

プンスカ、という形容がぴったりくるほど、子供っぽくむくれる姿は、とても四十近くで亡くなった人とは思えない。歳はどうにせよ、隼人にとっては恋人のお母さんなのであるから、初対面ではおばさんと呼ぶしかなかったのだが。
おっかなびっくりしながらも、隼人は口を開いた。

「い、いや、僕、おば……葵さんとは初めてお会いするんですが……写真でしか」

「あら、そう言われてみればそうかも。ふふ。わたしったら勘違い！　じゃあ改めましてよろしく。アキたちの母です」

コロコロと表情を変え、今度は満面の笑みで手を差し出した葵に、隼人は少し警戒しながらその手を握り返した。

「初めまして、吉川隼人です。アキさん……いや、日向家の皆さんにはお世話になって……」

社交辞令のようだったが、初めて会う彼女の母親に、隼人は緊張し何を言ったらいいか分からなかった。

「うん、こちらこそ！　でももう死んじゃったからお世話できない

わね！」

あっけらかんと言い放った葵に、隼人はもちろん、はらはらと成り行きを見守っていた祖父母も沈黙した。祖父母ももちろん初対面であったし、葵が誰なのかすらいまひとつわかっていない。だがもう少し言い方があるだろうと、三人でじとりとした視線を向けてみるものの、自由な雰囲気のそのひとは、そちらを気にすることも見ることもなく、口元だけは笑みの形を保ったまま目を閉じた。

「来るのが早すぎよ、もう」

瞬間、零れ落ちた涙が、本当の葵の人となりを物語っていた。

ああ、アキはこの人の不器用なところに似たんだろう

隼人はそう思った。よく見てみれば、本当に似ている。アキの目は、お母さんの目だ。くるっとした髪の毛のくせも。

「僕も、そう思います」

目の前で涙を流すそのひとには、残してきてしまった恋人の面影が確かにあった。

子供の恋、だったのかもしれないけど、本当に大切に、大切にしてきた、最愛の人を。

……残してきて、しまったんだ。

自分の死を理解しながらも泣く暇もなかった隼人の目から、ようやく一粒の涙が落ちた。

「ちょっと、あっけなさ過ぎますよね、こんな終わり方。……さよならもできなかった」

それでも静かに、冷静にしか涙を流せない隼人を、葵は抱きしめた。

「……本当にもう、何してるのよぅ。ほんとにっ……」

そして声を上げて泣き出す葵に、隼人はどこか気持ちが落ち着くような思いがした。

葵の声がアキの声と似ていたせいもあったろう。何の遠慮も配慮もなく、ただ感情のままに泣く葵につられるように、とうとう隼人も声を上げて泣き出した。それを見て、それまで葵に対し微妙なわだかまりを抱えていた祖父母でさえも泣き出し、ひとしきり四人でわんわん泣いた。

ただ真っ白な空間に、泣く人の声だけが響き、どこかへ吸収されるように消えていく。

自分がこれからどうなるのか、どこへ行くのか、まったく未知なる不安の中、隼人は温かさに包まれて泣き続けた。

ぼんやりとしている間に場所が移動し、はっきりと目を覚ましたときにはベッドの中だった。

部屋に見覚えはなかったが、温かい空気に包まれた空間に、隼人は思考を巡らす。

僕は、死んだんじゃなかったっけ？

そう思いつつも、身を起こすとそれは見慣れた自分の身体、手に触れるのは布団の感触。存在している、僕。

何もかもが夢だったのか、と飛び起きて、部屋を後にする。いきなり飛び出してきた隼人に驚く祖父母の姿も目に入らず、外へ飛び出した。

まぶしい光に目を顰め、慣れた頃にあたりを見渡すと、そこは期待したとおりの住み慣れた住宅街でもなんでもない、ただ果てなく広がる平原だった。

「あれ、引っ越したっけ？」

ぽつりと零れた言葉は、自分でも間抜けだと思った。

力を失くしてその場にへたり込み、どこまでも続く野原を見つめた。

花のにおいが漂う明るい場所。地平線の先には青い空。何も変わらない、生きていたときに見ていたのと同じ空なのに。

ふっ、と顔に影ができた。目だけ動かして確認すると、そこには葵が立っていた。

陰になっているのに、その黒い瞳は自ら光を放つかのように、煌めいて見えた。

「あなたは、死んだのよ」

厳かに響くその声が、ふわりと吹いてきた風に乗って流れていく。

殴られるよりも、大声を出されるよりも、心にずっしりと響いた。

「……はい」

隼人は理解していたはずの死を、ようやく受け入れた。

その後葵は、祖父母と暮らす隼人のところへしょっちゅう遊びに来ては、お茶を飲んだりおしゃべりをしたりするようになった。不安定だった隼人を心配したのか、それとも単に暇だったのか。真意は分からなかったが、いつも明るく元気な葵の姿が、隼人の心をゆっくりと上向きにしていった。

「……時々、思い出したように僕に聞くんです。フユは大きくなった？　とか、ハルは相変わらずにょきにょき育ってるのかしら？　とか」

隼人は苦笑して言うのに、栄は無表情を貫き黙っている。いつの間にか持ち出してきた酒をちびちびと舐めながら、ただ黙っているのみだ。隼人のために用意してくれたお猪口には酒が注がれてはいるが、やはり飲むことはできない。なんだか仏壇に供えられた形だけの酒みたいだなぁと思いながら、隼人は慣れない匂いだけで酔った気分になる。

「……天国には“窓”って呼ばれる場所があって、そこから生きてる人の世界を見ることができるんですよ。そのひとが見たい人の姿を映してくれるんです。僕もよく“窓”へ見に行きました。アキの

こと」

隼人は飲めない酒を手に取り、手の中で転がすように揺する。その小さな水面には、白い月の光が、おぼろげに反射して揺らいだ。

「葵さんも自分で見に行って知っていたのかもしれません。でも、葵さんは僕に聞くんです。知ってることを、わざわざ確認したいみたいに。話してあげると葵さんは、いつもすごく優しい顔でありがとうって言うんです。……本当に、喜ぶんですよ」

とぽとぽと酒を注ぐ音だけが響いて、栄はやはり何も言わない。元来無口な性格ではあるが、こうも話さない栄を見るのは、隼人も初めてであった。隼人は仕方なく目の前の向日葵に目を遣って話し続ける。

「不思議な人ですよね。葵さん。僕がこうしてここに来ることも、葵さんには反対されたんですよ。結局行くと決まった後も、『何か伝言はありますか？』って聞いても、『ないわ』って怒るんです」

隼人はその時のことを思い出すように笑った。

「……でも、葵さん、僕がここへ来る直前に、わざわざ僕のところに来て言ったんです。『しょうがない人ね』って、おじさんに伝えてくれ、って」

不貞腐れたような照れたような表情でそうひと言口にした葵を思い出し、できるだけ真摯な思いでその言葉が伝わるようにと、隼人は静かに言った。そしてくるりと首を回して栄を見るも、栄は変わらず下を向いたまま、目線は地面に固定されている。

隼人はしばらくの間黙っていたが、沈黙の重さに堪り兼ねて小さ

く訊ねた。

「……おじさん何かしたんですか？」

素敵な夫婦であり家族であることは隼人には分かっているし、別に夫婦の間の詳しいことが知りたいわけではない。『しょうがない人』という短いメッセージの意味を自分が知る必要なんてない。伝えることが隼人に託された仕事だ。ただ何故栄が何もいわないのかが気になった。

普段から無口な人ではあるが、もしかしたら、亡くなった奥さんが天国で元気にしてるだなんて話、無神経だっただろうかと隼人がおろおろしだした頃。

「……それだけ、か？」

ようやく重い口を開いた栄は、低く呟いた。小さすぎる低音を、隼人は聞き逃した。

「え？　何ですか？」

目をぱちくりさせて聞き返す隼人に、栄は渋い顔をしてもう一度言った。

「葵は、それだけしか言わなかったのか、と聞いたんだ」

ぷいっと顔を背けて言ったその栄の様子は、誰がどうみても照れ隠しそのものだった。自分の話が栄を嫌な気分にさせたわけではないと分かった隼人は、赤くなった耳を微笑ましいと思いつつ、申し訳なさそうに笑った。

「すみません、これだけ、です」

それを聞くと、栄はお猪口に残った酒をくいっと飲み干し、立ち上がった。

「……そうか」

そのまますたすたと歩き出してしまった栄の背中に、隼人は慌てて声を掛けた。

「あ、あのっ……！　そのときの葵さんっ！」

廊下の途中で歩みを止めた栄は、背中を向けたままで隼人の言葉を待っているようだった。隼人は慌てて立ち上がって、その浴衣の似合う広い背中に告げた。

「……すごく照れてました。はにかんでたって言うか……。僕は葵さんが生きていた頃のことは知りません。それでもこの家で、葵さんがどれだけ大切にされているかは知っています。家に最初に来たとき、写真に挨拶しろって四人みんなに言われたんですから！」

勢い込んで大声を出したため、息が切れて、隼人は急いで深呼吸をした。

「僕は知ってます。おじさんがずっと葵さんのことを想っていることも、葵さんがずっと、ずーっとおじさんのことを想っていることも」

ぴくりと、栄の肩が動き、栄は半身をこちらに向け、何か言いた

そうに口を開いた。だが隼人はそのまま言葉を続けた。

「だって葵さん、僕に一度も聞かなかったんです、おじさんのことは。ハルさんやナツ、アキ、フユ君のことは何度も何度も聞くのに、おじさんのことは一度も話題に出さなかった。しかも僕からおじさんのことを話すと、葵さん逃げるんです」

栄の瞳が訝しげに顰められた。妻は自分が好きだという内容の話ではなかったか、とその瞳は言っている。職人の持つ独特の鋭い眼光に捉えられた隼人は、少し怯みながらも、拳を握って気持ちを奮い立たせた。……葵に頼まれたわけじゃない。だけど、伝えなくては。そう、思って。

「僕も最初は疑問でした。だけど気づいたんです。葵さんは、本当はおじさんの話を一番聞きたかった。何より気になってた。聞いても聞いても足りないくらい。でも聞いてしまったら際限がなくなるから、もう二度と会えないのに、会いたくなるから……。大好きな気持ちばかりが大きくなってしまうから……。だから聞きたくても聞けなかったんです」

栄はあまり大きくない瞳を精一杯見開いて、隼人の必死な顔を凝視していた。それに気づかないまま、隼人の勢いは止まらない。

「きっと、“窓”にも近づかなかったんだと思います。だって“窓”からは見えてしまうから、おじさんの姿。……でも、みんなに会える僕が頼まれた伝言は、ひとつだけです！　おじさんへの伝言だけだったんですよ！　それって……、葵さんの気持ちそのものだと思いませんか！」

最後にはぜーはーと肩で息をしながら言い切った隼人は、額にう

っすら汗さえ滲ませていた。その様子に栄は、ふっと息を吐き、首を振りながら隼人に近づいた。わずかに見える口元は、笑いの形に歪められていた。
隼人の目の前までやってくると、栄はおもむろに隼人の肩に手を置き、その目を見つめた。

「ありがとう、な」

まさにはにかみの表情で告げられた短い一言に、隼人は一瞬息を止めた。頬を薄っすら赤く染め、口元の笑いを必死にこらえるように息を詰め、それでもその瞳が幸せそうな光を宿していることは隠し切れない。
普段無表情の人の、滅多に見れない表情には、なんという威力があるのだろうと、隼人は目を見開いて立ち尽くした。そして隼人が呆然としているうちに、栄は今度は本当に立ち去ってしまった。

置いてきぼりにされた隼人は、気まずげに頭を掻き、その後視線を下に移して同じく置いていかれた隼人の分のお猪口を見つけた。とりあえず片付けないと、と手を伸ばしたとき、自分より少し大きな手が、横からお猪口をさらっていった。

「……父さん、とっときの日本酒開けたのか」

減ることもなくお猪口に残ったままの酒を、一息に飲み干したハルが、楽しそうに笑った。

「ふふ、それだけ気になってたんでしょ、母さんの話」

栄が去っていったのと反対側の、西に続く廊下の影から、ナツも姿を現した。隼人は目をぱちぱちさせながら、のっそり現れたふたりに尋ねた。

「ふたりとも、聞いてたんだ……？」

ぽかんとした表情の隼人に、ナツが苦笑して答えた。

「そりゃあれだけ大きな声じゃさ。そこまで大きくないもん、この家。防音設備なんてないし。丸聞こえだよ」

「それにしても母さんも本当に天国にいるんだな。しかもかなり元気そうだ」

ハルは安心したように笑った。ナツもつられる様にしてくすくす笑い出した。隼人は栄とふたりきりで話していたつもりだったが、予想外にギャラリーが居たことに、複雑な心境だった。そんな隼人の顔を見て、ハルは隼人の髪をぐしゃぐしゃと撫でた。

「別に大層な内緒話ってわけでもなかっただろう？　俺たちの母さんの話だ、聞いて悪いことはない」

「うん……まぁ、そうだけどね」

隼人は諦めたように笑った。すると今度はナツが隼人の肩を労う様に叩いた。

「父さん嬉しそうだった。……ありがとな、隼人。母さんからの伝言が聞けるなんて、父さんも思ってなかっただろうな。しかし……」

そこでまたくすくす笑い出したナツを、隼人は不審そうに見た。

「ど、どうした？　ナツ？」

同じくハルが不審そうに問うたのに、ナツは笑いながら答えた。

「いや、あの、母さんの伝言……。はは、見抜かれてるな、父さん！」

「……？　ナツは葵さんの伝言の意味が分かったの？」

隼人が意外そうな顔でナツを見た。『しょうがない人ね』の意味するところなど、隼人には見当もつかない。

「伝言聞いたときの父さんの顔、苦いもの食ったような顔だった？　それとも赤くなった？　ああ、見たかったなぁ！」

ひとり興奮するナツに、ハルも疑問を浮かべた表情で隼人を見た。

「……？　俺はさっぱりわからんけど……。うーん、母さんの伝言かぁ、どういう意味なんだ？」

「いいんだよ、俺はわかっちゃったけど、母さんから父さんへの伝言なんだから、父さんだけに伝わればいいのさ」

ナツがようやく笑いを収めてそう締めくくった。自分だけ答えを知ってるなんてずるいと、隼人もハルも思ったが、これは面白おかしいクイズではないと、そう思い直して諦めた。

一方、自分の飲んだ酒の後始末をするために、どかどかと台所へ向かっていた栄は、その足を居間の仏壇の前で止めた。いつのまにかそこに飾られていた向日葵の花に、酒瓶を持ったまま大きくため息をついた。

子供たちはみな、向日葵は母親の大好きな花だったと知っている。だからしょっちゅう飾っているし、庭の向日葵も毎年咲くように手入れしている。だがこの花に込められた思い出は、栄しか知らない。

今でも鮮明に思い出せる。結婚を申し込んだときの、葵の咲き誇るような満面の笑顔。

『ふふ、じゃあ私、“日向葵（ひなたあおい）”になるのね。順番はちょっと違うけど、“向日葵（ひまわり）”になれるのね』

唐突に蘇った記憶に、栄は思わしげにため息をつき、その場を離れた。

『しょうがない人ね』

死んだ妻からの伝言。栄は、その意味することをちゃんと知っていた。

11

ナツとハルが、栄と隼人のやりとりを廊下の影から立ち聞きしている頃。

風呂はカラスの行水派のアキは、濡れた髪を拭きながら自室に戻っていた。アキも年頃の女の子なので、風呂上りの肌の手入れは欠かさない。実のところ、ここ一ヶ月はそれどころじゃなくほったらかしにしていたが、やはり隼人が戻ってからは気になるらしい。ドレッサーの前に陣取り、入念に化粧水をつけ、鏡の中の自分を覗いた。

自分でも呆れるくらいに一気に元気になって、とアキは思う。本当に現金な性格だ。痩せた頬も身体も、そう簡単には戻らないけど、顔色は大分良くなった。泣くことも無くなったから、目の下の赤みも取れてきた。

「……あと、三日……」

鏡を前に、頬を両手で挟んだまま、アキは呟いた。

隼人の言った一週間という期限まで、残された時間はあと三日。三日、その時間を考えると心が壊れそうになるほど痛む。隼人が、また、いなくなる。鏡の中の険しい顔をした自分にはっと気が付いて、アキは瞳を閉じた。

けれども隼人はこうも言った。……私が望むなら、そばにいると。可能なのだろうか、そんなことが。

隼人は死んでしまったと、分かっているはずなのに期待してしま

う。隼人が天使として戻ってきた事実、神様の存在、今。死んだ人が天使になってこの世に留まり続けるなんて、聞いたこともないけれど、もしかして、もしかするのか。

「ふーん、アンタがアキ？」

不意に背後から掛けられた声に、アキはぎょっとして振り向いた。ベランダに続く窓からの侵入者。けれども悲鳴を上げる前に、その背中にふわりと揺れる羽を見て、アキは声を出すのを躊躇った。

金色の髪に鮮やかな緑の目をしたその人は、見るからに日本人とは違う欧米人系の顔立ちである。身長はあまり高くなく、少年といった感じだ。隼人が着ているのと同じノースリーブの青い服を纏い、手に一輪の向日葵を持っている。ただなぜか彼の眉は顰められ、イライラのオーラが全身から発せられていた。

「ちゃんと“道”があるから迷わないって言われてたけど、まぁこんな結界張ってたら迷いようがないよね。“道しるべ”も持ってるし」

金髪の少年はその手の中の向日葵をくるくると回しながら、きょろきょろと物珍しそうに部屋の中を見渡した。ぶつぶつ呟いているのは独り言のようだが、アキの耳にも届いた。

だがそのときアキは絶対的におかしなことに気がついた。羽を背負ったままの少年の姿の背後がぼんやりと透けて見えるのだ。よく見れば手に持った向日葵さえも透けている。色は付いているのだが、何しろ背景が透けて見えるのだから、まるで幽霊を見ているような気分になる。

「あのう……」

アキは警戒しつつも半透明の彼に声を掛けた。しかし少年はあえて無視するかのように独り言を続けた。

「大体ハヤトの大馬鹿は何してるんだ？　＞器＜に定着しちゃったらどうなるかってアイツも分かってるだろうに」

ぶつぶつ言いながらもどんどん部屋の中に入ってくる。足音はしない。アキはわけの分からなさに混乱し、椅子の上で固まっていたが、その言葉に思わず聞き返した。

「え、どうなるの？」

すると少年はいきなりアキの方に向き、くっつくくらいにぎりぎりまで顔を寄せてきた。

「アンタのせいだよ、アンタの！　ハヤトが正天使になっちゃったらぜーんぶアンタのせい！」

驚いて身を引いたアキの鼻先を刺す勢いで指摘してきた少年の表情は怒りと焦りのそれだ。アキがわけの分からなさに目をぱちくりさせて絶句していると、今度は一転、呆れた表情でため息をついた。

「……ったく、何も知らないんだね。ハヤトらしいといえばそうだけど、止めないとあのオバサンに怒られるの、ボクなんだよね！」

じとっと見つめられる視線に居心地悪くたじろぐも、アキは懸命に質問した。

「あの……すみません、全く分からないので説明していただけませんか……？　あなたが誰なのか、とかも……」

「ボク？　……ちぇ、ハヤトのやつ、このボクというシンユウのことも話してないワケ？　……まぁいいか、ボクは」

「アレックス？」

開け放したままのドアの向こうに、隼人が驚いた表情を浮かべて立っていた。いま正に名乗ろうとしていた少年、アレックスはすぐに喜びの表情を浮かべて隼人に駆け寄った。

「わぉ、ハヤト！　元気そうだね！　ってゆーかボクのこと話してないってヒドクない？　ボクたちってシンユウかと思ってたんだけど！」

「ちょ、ちょっと、アレックス！　え？　何でここに？」

飛びついてきたアレックスを驚きながらも慣れたように抱きとめた隼人は、疑問を口にした。その隼人の質問に答えないまま、アレックスは隼人にがっしりしがみつき、次の瞬間がばりと顔を上げて言った。

「ハヤト！　キミ、もしかして汗かいたりした？」

そしてくんくんと鼻を動かしだしたアレックスを訝しげに見遣って、隼人は先ほど少し汗をかいた額を撫でた。

「は？　……いや、そういえばさっきちょっと……。におう？」

「におうとかそういう問題じゃなくて！　その身体で汗かくなんてありえないデショ？　ねぇ、今の状況、ちゃんと分かってる？」

慌てた様子のアレックスに対し、隼人は冷静だった。

「……大丈夫、分かってるよ」

余裕を持って呟かれた言葉に、アレックスは不満げに口を尖らせた。

「絶対分かってない！　それ以上融合が進んだら、＞器＜から離れられなくなる！　そうしたらどうなるかってちゃんと説明聞いてたよね？　ボクは」

「アレックス」

隼人の真剣な色を湛えた瞳に見つめられ、アレックスは頬を膨らませて黙った。隼人はくるりと身体の向きを変え、未だ状況を把握できずにただ二人の成り行きを見守っていたアキに向き直った。

「……アキ」

「は、はいっ」

名前を呼ばれたアキは、目を瞬かせて背筋を伸ばし、隼人と、その後ろに立つ不機嫌そうな顔をしたアレックスをきょろきょろと見比べる。アキの不安そうな表情に気づいた隼人は、アキに歩み寄り膝を付いて、その手を握った。

「アキ、ごめんね。びっくりしたでしょ？」

少し悲しそうな表情で見上げてくる隼人に、アキは首を振って否定するほかない。

「彼は、アレックス。天界で知り合った友達なんだ。準天使としては先輩でね。彼は雨じいのところで働いてるんだけど、いろいろ……」

「……ハヤト。話すべきはそんなコトじゃないだろう？」

にこやかに話し出した隼人の後ろから、腕組みをしてしかめっ面のアレックスがイライラと口を挟んだ。

「アレックスはちょっと黙ってて」

「……」

注意されたアレックスは、その本来なら優美に整った顔を存分に歪ませ、苛立ちを隠さずにその場に勢いよく座り込んだ。つーんとした態度は、「もう話さないぞ」といった様子だ。

アキはそんなアレックスをハラハラしてみていたが、隼人の目が「気にするな」と言っていたので、話に集中することにした。

ふう、とひとつ息を吐いた隼人は、アキをまっすぐに見据え、本題を話し出した。

「アレックスが言いたいのはね。つまり、この僕の身体のことなんだ」

「……＞天使の器＜……？」

「そう。よく覚えてたね」

不安を隠せない瞳でアキは記憶を掘り起こし、隼人は苦笑いした。その笑顔は切ないような、誇らしいような、いろいろな感情をない交ぜにしたような、複雑な笑顔だった。

そうして、隼人はゆっくりと語りだした。自らの今の身体に秘められた秘密……＞天使の器＜の真の用途についてを。

「はぁ？　地上へ行く？」

葵は思わず素っ頓狂な声を出し、目の前で澄ました顔をしている隼人を見つめた。

準天使となり、天界で過ごすようになった彼が、天国の葵の家にやってくることは稀だ。ひさしぶりに訪ねてきた隼人が全くとんでもないことを言い出したので、考えを整理するためゆっくりと紅茶を飲み、何度か目を瞬かせ、ようやく口を開いた。

「雲じいがぎっくり腰になったって言う噂は聞いたけど、それと関係ありそうね。まさか代わりに仕事をするとか……？」

「そのまさかです」

にっこりと、いっそ清清しく言い切られた言葉に、葵は納得しそうになったが、いやいや、と首を振った。

「ちゃんと理解して言っているの？　たとえ雲じいが許可して、一神議〈しんぎ〉にも通ったのだとしても、準天使が地上へ降りるなんてありえないわ。負担が大きすぎる。ましてあなたは日も浅いし力だってそんなにないって言うのに」

非難がましい葵の言葉をさらりと流すように、隼人は目の前に出された紅茶を飲み、視線を窓から庭へやった。

葵の家の庭には、一面の向日葵が広がっていた。四季も時間の流れも実質存在しない天国では、全てが住人の思い通りとなって実現する。葵の小さな家の周りには、いつでも大輪の向日葵が揺れている。目に痛いほどの黄色と緑のコントラストに少し目を細め、隼人は葵に視線を戻した。

暖かい光が差し込む室内は、葵の苛立ちで温度を少し下げたようだ。冷ややかな葵の視線を感じながら、隼人はタイミングを見計らって口を開いた。

「はい、まぁそうですよね。葵さんの言う通りです。……それで、＞天使の器＜を借りることになりました」

軽い調子で言われたその言葉に、先ほどまで興奮気味で赤かった葵の顔から血の気が引き、一瞬で青白くなってしまった。ぎぎぎという音がしそうなほど、不自然にゆっくりと向けられた顔には、驚愕が貼り付いていた。

「ちょっ、＞天使の器＜って言ったの？」

振り絞るように出された小さな問いに、隼人は躊躇なく答えた。

「そうですよ、＞天使の器＜です。アレ使わないと、地上で＞絵の具＜使えないじゃないですか。あの絵の具、ホント不思議ですよね、天界では実体ないのに地上へ持っていくと実体化するなんて。神様はそんなこと気にしないかもしれないけど、僕ら準天使は……」

「アレを使ったらどうなるか分かって言ってるの？」

怒気を孕んだ言葉に、隼人はこっそり苦笑した。下を向いたままの葵の表情は、きっとものすごく怒っているときの憤怒の表情だろう。反対されることなど最初から分かっていた。

「……そうですね、わかってます」

「わかってるなら、簡単に使うなんていえないはずよ！　あなた二度と転生できなくてもいいわけ？」

興奮して叫ぶ葵は、涙目になっている。抑えきれない感情が爆発するのを何とか抑えるように、両手をしっかり握り締め、隼人の目をまっすぐ見つめた。

「あれはただの肉体を貸してくれる人形じゃない！　＞正天使＜になるための＞器＜なのよ！　そして＞正天使＜になれば、再び転生することもなく、永遠に天使として天界に留まるの！　あなたそれをちゃんと分かってて……！」

「わかってます」

葵の勢いを遮るように、隼人は静かに、しかしはっきりと声に出した。葵に向けられたその瞳には、凄烈な程の決意がみなぎっていた。

「僕は、再び生まれ変わることが出来なくても、その代わりに正天使としてアキを見守り続けることが出来るならそれでいいんです。この先アキが危ない目に遭ったとしても、正天使なら助けられる力がある。……アキは僕が守ります。たとえアキが僕を忘れてしまっても、他の誰かを好きになっても」

少しの躊躇も揺らぎもなく、まっすぐに言い放たれた決意に、葵は大きくため息をつき、「あなたちっともわかってないわ」と、ぽつりとこぼした。

そうして頭痛を堪えるかのように額に手を遣り、しばらく考え込んでいたが、静かに目線を上げ、何も言わず葵の返答を待っている隼人を見つめた。

「正天使は、あなたが考えるほど自由な存在じゃない。長い長い年月を経て、自我をなくし、ただ神の命に従って動く人形になる。自らが存在する意味も、希望も何もかもを失って、疑問を抱くことも忘れて、そして消えることすら許されない。永遠に存在し続けるのよ？　あなたもそうなりたいと？」

可愛らしい内装の部屋の真ん中に置かれた、暖かい温もりを持った木のテーブル。それを挟んだ二人の間には、空間に全くそぐわない、重苦しく痛いほどの空気が立ち込めていた。恐ろしい響きを持って告げられた真実にも、隼人は動じなかった。

「そのことは、聞きました。でも僕が完全に僕でなくなるまでに、アキが一生を全うするよりも長い時間がかかるとも言われました。

……僕の望みはひとつです。アキを見守ること。僕が、消えてしまう前に」

「消えないわよ、そう簡単に！　そのままの状態だってアキのことを見守ることは出来るでしょう？　私を見なさいよ、死んで何年経つと思う？」

「僕と葵さんでは違うんですよ！　僕はあとどれくらい僕でいられるのか自信がない！」

言い争いの状態になって、始めて隼人が声を荒げた。がっしりとした木のテーブルは、隼人に叩かれて少し揺れ、紅茶のカップがカチャリと音を立てた。今までの冷静さを欠いた隼人に、葵は感じた違和感と疑問を口にした。

「……あなた、まさか……」

「とにかく僕は＞天使の器＜を使って地上へ行きます。もう決めたんです」

葵の言葉を遮って、隼人は口論を無理やり終わらせた。ぷいっと逸らした横顔には、最初の冷静さも余裕もなく、若い青年の焦りと不安が滲み出ていた。

葵はそんな隼人を見て、再びため息をついた。少し零れた紅茶を見つめ、内心の苦々しさを抑える。

「そこまで言うのなら、じゃあこうしましょう」

渋い顔をして切り出した葵に、隼人はぱっと顔を向けた。

「あなたは＞天使の器＜を使って地上へ行く。地上の時間と天界での時間は流れ方が違うわ。＞器＜が魂と融合してしまうのに天界の時間で約一ヶ月かかる。地上の時間でのおおよそ一週間と少し。保険をかけて一週間よ、あなたが地上に居られるのは。一週間以内に、確実に天界に戻り、そして器との融合を解くの。……これが約束できないなら、私はどんな手を使ってでもあなたを地上へは行かせない」

有無を言わさない圧力を持った葵の言葉に、それでも隼人は反論した。

「でも、それじゃあ正天使には……」

「言ったはずよ、約束できないなら行かせないって」

隼人の反論もなんのその、ぴしゃりと撥ね付けるように葵は冷たい視線を投げて寄越した。

「あなたが地上へ行きたいと思った最初の目的は何？　アキに逢うためじゃないの？　正天使になりたいなんて希望は、後から付いてきたものじゃない？　ダメよ、惑わされては。最初の目的を思い出すの」

ぐうの音も出ない隼人は、唇をかみ締め苦い顔をしながらも、葵の言うことを聞くことにした。どちらにせよこのままでは葵は自分が地上へ行くのを、それこそあの手この手で邪魔するだろう。それなら条件付でも行くことを選ぶ。決意を固めた隼人は、キッと顔を上げて、目の前で澄ました様子で茶を飲み始めた葵を見た。

「わかりました、葵さん。その条件、飲みます」

もうすっかり冷めてしまった紅茶はおいしくも何ともない。形だけでも格好が決まるようにとぐいっと一息に飲み干すと、葵は隼人の目を見つめた。

何の因果か、お互い死んでから初対面を果たすことになった、いつかは義理の息子になっただろう青年。一度天国に来た人間は、どんなに望もうともそのままの姿で生き返ることがないように、愛しい人に会えるようなチャンスも用意されてはいない。どんな形であれ、再び恋人に再会する機会など、誰にでも与えられる幸運ではないし、今回の一件はほとんど奇跡に類する事件だ。

「……いい？　一週間よ。守れなかったら引きずってでも連れ戻すから」

だがしかし、あくまで正天使になってしまう危険からは遠のけたい事情が、葵にはあった。葵の固執する態度に、疑問を抱きながらも、隼人はそれを尋ねなかった。そうしてそのまま「行くまでにもう少し時間かかるんで、また来ます」と言い残し、陽だまりの中に浮かぶ小さな家を後にした。

12

天国の片隅。陽だまりと向日葵に埋もれるように立つ小さな家の中。

隼人が去り、後に残された葵は、空になったカップを見つめ大きな独り言を呟いた。

「あーあ、誰かしら？　あの子に余計なことを吹き込んだのは？」

誰もいないというのに返事を期待するその言葉には、やはり反応はなかった。葵は一瞬眉を寄せた後で、部屋の隅をじっと見つめた。すると。

「……いやはや、それも運命じゃよ」

独特の声と共に空間を揺らして白い髭がふわりと現れた。

いたずらがバレた時の子供のような顔をして頭を掻く老人に、葵はこれ見よがしなため息をついた。部屋の隅に現れた小さな老人は、自慢の白髭を撫でながら何事もなかったように我が物顔でテーブルに近づく。そしてテーブルを挟んで葵の目の前の椅子に腰掛けながら「茶！」と言った。

「ったくふざけんじゃないわよ、じじい！　どこがぎっくり腰なのよっ。飲みたきゃ勝手に淹れるのね！」

それまでじっと老人の行動を見ていた葵だったが、さすがに我慢しきれなかった苛立ちを言葉にして指を鳴らすと、まるで魔法のよ

うに空間からティーカップが現れ、老人の前にちょこんと座った。だがそれを見た老人は、なにやら困った顔をした。

「わし、今日は実体で来たからのー、これじゃ飲めんわい」

確かにしわしわの小さな手は、目の前のカップを掴めずにすり抜けた。その様子に更に苛立ちを深めた葵は、思わずテーブルを叩いて立ち上がった。

「ちょっと、雲じい！　まさかあの子を正天使にするつもりじゃないでしょうね！　回りくどくあの子の意思みたいにしてるけど！　完全に神の都合のいいようになってるとしか思えないわ！」

「おおこわっ！　これ、テーブルがかわいそうじゃぞ、叩かれるのは今日何度目かの」

葵の怒りをまるっきり無視して、さすさすと労わる様にテーブルを撫で始めた雲じいに、葵は呆れてどさりと椅子に座り直した。そして髪をがしがしと掻きながら、じとりとした目線を雲じいに遣った。

「……で？」

「……」

心に疚しいことがあるといわんばかりに、さっと視線を逸らした雲じいは、誤魔化すようにティーカップに手を伸ばす。先ほど持てなかったカップは何事もなくその手に収まり、いつの間に淹れたのか温かい紅茶が湯気を立てていた。ふーふーと息を吹きかけ冷ましながら、一口こくりと飲んだ後、無言の圧力に負けたのだろう、し

ぶしぶ口を開いた。

「……上に目を付けられておる。人手不足なのはおぬしも知っておろう？」

「だからって、なんであの子が？」

「適正があるのじゃ、この上なく。こればっかりはどうにもならん」

小さな暖かい部屋に、ふたりの会話が静かに響く。葵のティーカップからも、再び温かい湯気が立ち、一見穏やかなティータイムだ。だが剣呑さが滲んだ二人の顔は、ものすごく渋いお茶を飲んでいるかのように、刻一刻とだんだん険しくなっていった。

「……それってあたしの、せい？」

まるで怯えているかのように葵が呟いた。

雲じいは泣き笑いの表情になった。

「……嘘は言えんね。……それもある」

その言葉を聞いた瞬間、葵は両手で顔を覆い、テーブルに突っ伏した。

「だから……、だから正天使になんて、なってほしくないのよ……」

涙の滲んだ声で葵は小さく呟いた。何もかもを分かっているかのような優しい表情で、雲じいはお茶を一口啜った。

「……それも含めて、彼の運命じゃから。すでに起こってしまった

ことに対して、わしらが出来ることは少ない。じゃが……」

途切れた言葉に、訝しげに葵は顔を上げた。雲じいの視線は、先ほどの隼人と同じように、葵の背後の窓から、一面に咲く向日葵に向けられていた。

「……孤独な魂は、恐れる。ここに居れば居るほど、自分が消えてしまうかもしれぬという恐怖は強まるじゃろう。自分ではどうにも出来ないならなおさらじゃ。……おぬしにも覚えがあろう？」

問われて葵の脳裏に苦い記憶が蘇った。自分ではどうすることも出来ない、もどかしさや辛さ。あの子が負っているモノの、不安定さと儚さを思えば、今の選択も理解できる。理解はできるが……。

葵はぐだっとテーブルの上に頭を乗せ、考えこんでいる様子だったが、しばらくしてゆっくりと立ち上がった。

「……何とかするわ。あの子を正天使にはしないし、消させもしない」

それはまるで、何か大切なことを宣誓するかのように、静かに、厳かに響いた。

ゆっくりと瞬いた瞳には、先ほどまでは影を潜めていた輝きが戻り、溢れんばかりの力を放ち始めた。そうかそうか良かったと、満足げにうなずき静かに茶を啜った雲じいをじろりと見下ろし、葵は高圧的に言い放った。

「じじい、アンタにも手伝ってもらうわよ！」

外野にいたはずなのに、いきなりピッチャーに指名された雲じいは文字通り椅子から飛び上がって驚いた。

「はぁー？　わしも？」

「何そんなに驚いてるのよ！　ある意味共犯でしょ、既に！　大体手伝うつもりがないならわざわざここへ来る意味もないでしょうが！　いい年だからってボケてんじゃないわよ！」

がやがやと賑わい始めた室内に対し、庭を吹きぬける静かな風は、優しく隼人のほほを撫でていった。

外壁に寄りかかるように窓の下に蹲っていた彼は、埋もれそうな程咲き誇る向日葵を前に、泣きそうなほっとしたような表情を浮かべていた。

自分を想ってくれる、その優しさに涙が零れそうになり、慌てて目頭を押さえた。

「葵さんって雲じいの前ではすっごく態度悪いんだな。というよりあの二人って知り合いだったんだ、知らなかった」

涙を誤魔化すように苦笑して呟き、ごしごしと顔を擦った。もう既にバレているのだろうけど、顔を合わせるのも気まずいと、隼人は適当な場所まで四つんばいで移動した。そして生えたばかりでいくらも経っていない純白の双翼を広げ、今度こそ陽だまりの家を後にした。

「だーかーらーねー、正天使になっちゃうと、ボクも困るワケ！だってボクの唯一のシンユウなんだよ、ハヤトは。ハヤトがいなくなっちゃたら、ツマンナイでしょー？」

アメリカ人と思しき金髪の少年、アレックスの辞書に遠慮という文字はないらしい。

隼人が話し始めたのにも関わらず、途中からやはり口を挟みだし、最終的にはアレックスが一人で話を続けていた。……その話は、自分がいかに隼人と仲がいいか、そして隼人との天界での楽しい暮らしについてなどが主だった。

最初は話の軌道を修正するのに躍起になっていた隼人も、途中から諦めたようにアレックスに話をさせていた。アキはといえば、目をぱちくりさせて、わけもわからずアレックスの話を聞いていた。アキが聞き上手なのもアレックスが調子に乗った一因であったに違いない。

「あーはいはい、アレックス。その話は分かったよ。だけど今話したい一番の問題は……」

「このままここに居続けると、ハヤトはすぐに＞天使の器（うつわ）＜と完全融合しちゃうっていう問題だよ」

何とか自分の話を切り上げて、再び軌道修正しようとした隼人に、アレックスは口を尖らせて言った。

「別にボクはそこまでバカじゃないよ。ボクよりバカなのは、ハヤト、キミだよ。いくら居心地がいいからって、ずっと天界に帰らないなんて、この状態では自殺行為さ。……ボクたちもう死んでるとかいうツッコミはいらないよ」

こほん、とわざとらしく咳払いをして、アレックスは続けた。

「キミがこっちに来てから、思ってた以上に融合の進行が早まってる。なんでだか分かる？　キミ自身が、そう望んでいるからさ。もうこのまま正天使になっちゃおうって。だけどそれって約束違反でしょ？　ボクとも約束したし、あのオバサンとも約束した。正天使にならないうちに戻るって」

意思の篭った大きな緑の瞳に見つめられ、隼人はたじろいだ。後ろめたさは、確かにある。

「キミがどんなに望もうとも、ボクらはそれを阻止するよ。オバサンも言ってたろ？　どんな手を使ってでも連れ戻すって」

いつの間にかアレックスは、隼人の近くまでにじり寄っていた。全身から発せられる圧力に、隼人は思わず目を逸らした。

「あ、あの……。隼人が正天使になることは、そんなに悪い……事なんでしょうか？」

隼人の隣に座り込んだアキが、控えめに声を出した。隼人がそん

なにも望むことならば、叶えてやってもいいのではないか、とアキは思ったからだ。どうもアレックスの勢いに負けてしまうが、隼人のことなのだ、アキにだって発言権はある。
しかしそんなアキの一言は、アレックスをより激怒させた。
「アンタ、ボクの話聞いてた？　＞正天使＜って聞こえはいいけど、実際天界では、『魂の流刑（るけい）』って呼ばれてるんだよ？　本来＞天使の器＜は、癒しようのない、傷の治らない、もう転生できない魂を、天使に創り変えるために作られた道具。ハヤトみたいな立派でキレイな魂を、何が楽しくて正天使にしなきゃならないワケ？」
アレックスの勢いとその内容は、アキを閉口させるのに十分だった。口をぱくぱくさせて結局何も言えないアキを見て、アレックスはわざとらしく大きなため息をついた。
「ハヤト、キミだって何も反論しないのは、迷いがあるからだろう？」
一転、穏やかな調子になって向けられた言葉に、隼人は顔を背けたまま、沈黙を守った。
「……だったら悪いコトは言わない、とにかく天界へ帰るんだ。もし今のままでここに居れば、あと一日そこらで限界になっちゃう。天界に帰れば、融合の進行は抑えられる。時間の進み方が違うから。キミも分かってるだろう？」
「でも僕は帰れない……！　アキを置いて帰るわけにはいかないんだ」
強い意志を持って発せられたその隼人の言葉に、アキは屋根の上

で交わした約束を思い出した。私が、望むなら……。
アキが口を開こうとしたその時、アレックスがそれを遮った。
「置いて帰れない？　この女を？」
自分をきつく睨みつける瞳に、アキはたじろいだ。見慣れない緑の瞳が、語っている。『余計なことを言うな』、と。
―一体、何を言おうとしたの？
はっきり言って、アキ自身にもよく分かっていなかった。
帰って？
帰らないで？
私の我侭のために隼人は自分を犠牲にしようとしている。それだけは分かる。
―でも、どうしたらいいの？
……帰らないでほしい、でも帰らなければ隼人は。
ふいに、涙がぽろりと落ちて、アキは自分がどうしようもなく追い詰められていることを知った。今の自分に、隼人にかけられる言葉など、ない。
「あーあ、ボク自分勝手なヒトってきらーい。ねぇ、今一番泣きたいのってハヤトだと思わない？」
アレックスは呆れたようにアキを見てそう言った。
アレックスにどう思われようと、アキに自分の涙を止めるすべは

なかった。止まれ、と思っても、勝手に流れ落ちる涙は全く言うことを聞かない。かえって余計に溢れ出してしまう涙に、アキはとうとう降参して顔を覆った。その直後、温かいものに、アキの体は包まれた。

「アレックス、違うんだ。正天使になろうとするのは僕の意思だ。アキのせいじゃない」

いつの間にか隼人がアキを抱きしめていた。ほんのりとしたぬくもりに思わずほっとしたのも束の間、アキはその異常に気が付いた。

隼人の身体が、熱を持っている。

ほんの三日前までは、一切の温度を持たない、ただの人型だったはずの隼人の身体。今は一般的な平熱までには届かないものの、ぬくもりを感じられるほどには温かくなっているのだ。

「僕の親友だっていうのは認めるけど、アレックス。あんまりアキをいじめないでくれ。すべて僕の意思なんだ」

「キミの意思だとしてもだよ？　ありえないでしょ？　このままずっとここに残ることが出来るなんて、ホンキで思ってるの？」

頭の上で始まった二人のやりとりも、アキの耳には入らない。ああ、そういえば、さっき少しだけど汗をかいたって言ってた……。

髪を撫でてくれる隼人の指の感触が、身体から伝わるぬくもりが、アキに決断を促す。このままでは、隼人は本当に正天使になってしまう。意思を持たない人形に、二度とこの世界に生まれ出でない永遠に封じられた魂に……

―帰さなくちゃ。

そう思ったとたん、アキの体はびくりと強張り、瞳からは更に大粒の涙が零れた。その雫がほほを伝い、アキを抱きしめる隼人の肩を濡らした。

「アキ？」

アキの微妙な変化に気づいた隼人は、アキの顔を見つめた。顔を俯かせたのアキは、目を見開いたまま、何か訴えようと必死に言葉を搾り出そうとするように唇を動かしていた。

「……アキ？」

いぶかしんでアキの顔を覗き込もうとする隼人を、アレックスが肩を掴んで止めた。

「アレックス？　何を……」

「タイム・オーバーだよ、ハヤト」

アレックスの声も表情も、事実だけを伝えようとする無感情なものだった。

顔だけをアレックスのほうに向けて疑問をぶつけようとした隼人の手を掴み、アレックスは自分の持っていた一輪の向日葵を無理矢理隼人に持たせた。実体がなく、透けていたはずの向日葵は、なぜか隼人の手にしっかりと掴まれた。

手にした向日葵を見たとき、隼人は目を見開いてアレックスを見、口を開けて何か言おうとした。しかしその直後、素早い動作でアキ

に視線を戻し、アキの肩に置いた手に力を加えた。
アキが不審に思い顔を上げた一瞬だった。隼人の声にならない声が零れ落ちる直前だった。
その瞬間、隼人は消えた。
「……は…や……と……？」
隼人は消えた。
アキの左肩に小さな温もりだけを残して。

13

「え……？」

あまりに突然の出来事に、アキは何が起きたのか一瞬分からず、きょろきょろと隼人を目で探した。

小さな部屋の中には半透明に透けるアレックスしか居なかった。先ほどまで確かに自分を抱きしめてくれていた隼人の存在が、なくなっていた。混乱しているアキを、アレックスは至極落ち着いた様子で腕組みをして、高圧的に見下ろした。

「ねぇ、さっきハヤトに何て言うつもりだった？」

未だ状況についていけないアキは、何故今、そんなことを聞くのだろうかと、涙目のままアレックスを見上げた。

「何って……。『私はもう大丈夫だから、天国へ帰って』って……」

混乱した思考の中でそれでも律儀に答えたアキに対して、アレックスはとたんに大げさな素振りで大きくため息をついた。

「はぁー。ぶっぶー」

両手を使ってわざわざバツ印を表現するアレックスを、アキは呆然と見上げるしか出来ない。

「この場合、『帰らないで』も『帰って』も、不正解だよ、バカ女」

『バカ女』呼ばわりされても、アキにとってはさほど重要なことではなかった。

隼人が、居ない。……居なくなった。

何も言えないまま、何も聞けないまま。

アレックスが何の目的でここへ来たのかは分からない。ただ彼は、彼も隼人のことが大好きで、守りたいと思っている、そのことはアキにも理解できた。しかしこの仕打ちはあんまりではないか？　アレックスに一体どんな権利があって、こんな風に隼人と引き離すのだろうか。

「……どうして、突然隼人は消えたの？」

じわじわと浮かんできた怒りを押し隠した瞳で見上げ、問う。するとアレックスは意外だったのか、一瞬驚いた表情を見せたが、次の瞬間またいじわるな顔つきになって言った。

「あのヒマワリはキミのママがボクに持たせたものだよ？　あんまり言うこと聞かないようなら使うようにって。アレで有無を言わさず強制帰還させたのさ」

―お母さんが？　隼人を？

ああ、それならきっと、何か意味があるはずだ。一瞬、頭が真っ白になったが、アキはそう思い直した。そして今は母のことよりも、気になっていることがひとつ。

「……でもさっきのタイミングを選んだのは、あなたよね？　何で？　私にそんなに意地悪したかった？」

涙の滲んだ瞳で、キッとアレックスを睨みつける。お母さんが隼人と関わりがあって天国に帰そうとしていようと、先ほどの、あの瞬間はアレックスの選択だ。何もあんな風に別れさせることはない、お母さんだって望んでいなかったはずだ。もう苛立ちは隠さない。きっと彼とは闘わなくちゃならないんだ、とアキは思った。

するとアレックスは少し嫌そうな顔で眉間に皺を寄せた。もはや美少年の面影のない、ブラックな顔つきになっている。

「キミはさぁ、自分のことナニサマだと思ってる？　生きてる人間がそんなに偉い？　死んだ人間には選択権なんてない？」

「そ、そんなこと思ってないっ！」

アレックスが黒いオーラとともに、プレッシャーをかけて来て、アキは思わず肩を揺らした。先ほどの心の中での決意が、アレックスの謎の威圧感に揺らいでいる。彼が何をどう考えての質問なのかよく分からない。だがたじろぎながらも、アキは必死に否定した。

「仮にキミはそう思っていないとして」

一呼吸の後で、アレックスの声から棘が消えた。先ほどまでの圧力はどこかへ消え、妙に軽い雰囲気になったアレックスがアキのほうへと歩み寄ってきた。アキが後ずさったのは無理もないが。

アレックスはまるで仕事帰りのサラリーマンのように、首を左右に曲げ肩を回した。疲れを訴えるその動作にアキは不審げに眉を顰める。最初から今まで、彼についてはわからないことばかりだ。そしてそんなお疲れの様子のアレックスは、肩を回しながらぼそりと

言葉を零した。

「死んだ人間は、生きている人間が羨ましい」

告げられた言葉は、一言で噛み砕けない、真理。

「だって考えてもみなよ？　こっちからはあっちの様子見れないけど、あっちからはほとんど見放題だよ？　自分がいなくなっても、みんな何事もなかった顔して生きていく。これほどの拷問はナイと思うね」

アレックスはアキの前を通り過ぎ、先ほどまでアキが座っていた化粧台前の椅子に、足を組んで腰掛けた。座った瞬間、アレックスの半透明の体は一瞬実体を持つようにはっきりしたが、すぐに半透明に戻った。

「その上、『自分』が癒えるか消えるかが、生きてる人間に託されてるなんて、一体誰が決めたルールなんだか」

先ほどまでの黒い気配も刺々しさもすっかりどこかに消え、だいぶ楽な空気になった。しかし気分屋なのか、とにかく大変自由に振舞うこの金髪の少年は、全く掴みどころがない。

アキは無言でアレックスを見つめ、彼の次の言葉を待った。先ほどの言葉が一体どういう意味なのか聞きたかったし、何より天国での様々なことを、アキは知らなすぎる。突然消えた隼人がどうなったのかも、もはやアレックスにいろいろ尋ねるしかないが、これまでの短い経験上、刺激する言葉を言うよりも黙っていたほうがアレックスは機嫌を損ねずむしろ勝手に話してくれそう、という判断だった。

「……キミに教えてあげる。天国に存在する無数の魂の行く末を」

アキを見る視線はいまだ温かいものではなかったが、アキの思ったとおり、アレックスは話を始めてくれた。

天国に存在する魂は、長い時間をかけてその身に付いた傷を癒し、そして次の生へと転生していく。ただし転生前の魂の状態には二通りある。自我を保っているか、いないかという大きな違いが。

ひとは死んで、天国にやってくる。死ぬ日を自分で選べる人はまずいない。突然に、あるいはゆっくりと、命の時間は奪われ、そして天国へやってくる。

天国で目覚めたとき、ひとはそれまでの記憶と意識、つまり自我を保っている。誰が言い始めたのか、それは『第二の生』とも言われている。だが死ぬ前と死んだ後とで大きく違うことがひとつ。それまで当たり前に存在していた全てが傍にないこと、である。

肉体のない魂に合わせて、天国にある全てのものには実体がない。それゆえに天国の住人は何不自由することなく、望むならば生きていたときと同じ生活を、もしくはさらに良い生活さえも選べる。物欲は満たされる。しかしそこに、どんなに望んでもいて欲しい人は存在しえない。

愛するひとも、家族も、会社の人間も、隣近所の人も、飼ってい

た犬も。ああ、こんなにもたくさんのひとに囲まれていたのか、と感じた後で、誰もが心配に思う。自分は、誰かの記憶に留まれるだろうか。誰も思い出してくれなくなったら、寂しい、と。

寂しくなって、＞窓＜を覗きに行く。

＞窓＜は生きていた世界を見せてくれる唯一の場所だ。それは幻想でも想像でもない、本物の姿。自分が、いなくなった後も平然と流れて行き着いた時間の姿。

まるで空から見下ろすようなアングルでしか覗けない＞窓＜から、“地上”を見下ろし、ああ、大丈夫、と安堵する。

自分は、まだ、忘れられていない。

その安堵感が、魂が大なり小なり抱えた傷を癒していく。

のんびりと流れていく天国の時間の中徐々に癒されていく魂は、しかしある時、＞窓＜に何も映らないことに気づく。

「＞窓＜に映るのは、死者の望みじゃない。生きてる人の想い、なんだよ。つまり、死んだ人を想っている人の姿がそこに映る。だから何も映らないってことは、誰からも忘れられたってことなのさ」

アレックスが足をぶらぶらさせながら言う。

ひどく不満げなその様子が、アキを何故かほっとさせた。椅子に座ったアレックスを、床に座り込んだアキは見上げる形になる。

その身長と柔らかそうな肌、まだ幼さの残る顔立ちから、アレックスは自分より少し年下だろうと想像する。しかし生意気でかつ大人びた言葉ばかり口にするこの少年はきっと、死んでしまってから

長い時間を過ごしてきたのだろう、そう思った。

生きているひとに忘れられたとき。それを魂の『第二の死』と呼ぶ。

自我を持った魂は、自分が忘れられてしまった事実に耐えられず、『自分』を消してしまう。自我を無くした魂は、それは何の意思も感情もない、ただのまっさらなエネルギーとなり、転生の時を待って天国の周囲を浮遊する光となる。

大抵の魂がこの『第二の死』を迎える一方で、一部の魂は自我を保ったまま、転生の時を迎える。

「別に自我がない状態が悪いってワケじゃないよ？　いつかはなくなってしまうものだから。でもボクの目標は、このボクの意識を保ったまま、転生の儀を受けることなんだ。……ボクのことはね、ボクの妹がずっと覚えててくれてる。もう六十になるんだよ、それでもまだ忘れないんだから」

照れるように笑ったアレックスは、これまでにない一番素敵な顔だ、とアキは思った。ずっとそういう顔でいれば可愛いのにと、思ったが口には出さない。間違いなく怒ることは考えなくても分かる。

優しい笑顔で笑ったのも束の間、アレックスはひとつため息をつき、視線を窓の外、瞬く星空へと投げた。

「……ボクは大丈夫。妹が覚えていてくれるから。でもハヤトは恐れてる。自分が、いつか、消えてしまうんじゃないか……って」

正天使になれば、生きている人間が覚えているかに関わらず、ある程度の時間は自我が保たれる。隼人はそれを狙っている。

アレックスの話から、アキにも隼人の考えが読み取れた。それに気づいた瞬間、パジャマの裾を握り締め、アキは思わず叫んだ。

「それはつまり、誰からも忘れられてしまうって隼人が思ってるってこと？　そんなこと、ありえないのに……他の誰が忘れても、私が覚えてるのに！」

生きているひとに忘れられたときに隼人の意識が消えるなら、私が絶対にそれを阻止するのに。頼まれたって、忘れたりしないのに。

……忘れたり、できないのに。

―ねぇ、隼人。どうしてそんな風に思うの……？

アキはパジャマの襟元をぎゅっと掴んで床にうずくまった。何故隼人がそんな悲しいことを考えるのか、理解できずに苦しかった。自分を頼ってもらえないことも、その意思も選択も、何もかもが苦しくて悲しかった。胸にあいた黒い穴が、また傷口をあけたようにぎゅうぎゅう締め付けてくる。痛くて、苦しい。

アレックスの緑の瞳が、静かにアキを見つめた。

「キミがこの先、誰か別のヒトをスキになっても、同じコトが言える？」

静かに響いたその言葉に、アキは目を大きく見開いたまま、アレックスを見た。
半透明の彼の体のその先に透ける、窓の向こうの漆黒の夜空と細かい星の光。……未知の、世界。死後の世界。

死んだ後、もう一度『死』が訪れて、それが生きている人間の想いにかかってるなんて。

……なんて、怖いの。

「……忘れたり、しない。何があっても、絶対に」

目を見開いたまま、強い気持ちで、アキはその言葉を口にした。
泣きそうなほど胸は苦しかったが、不思議と涙は落ちてこなかった。
そんなアキを静かにじっと見つめていたアレックスだったが、ふいに立ち上がって背伸びをした。

「ま、ボクからひとつ忠告させてもらうとね。血の繋がりは強いってことかな」

「え……？」

瞬きをして見つめるも、アレックスはそれ以上を言おうとはしなかった。

「じゃあボクもそろそろ天界へ戻ろっかな」

長話に疲れたといわんばかりに首をぐるりと回し、いつの間にか

しまわれていた翼を現したアレックスに、アキは思わず立ち上がって引きとめようとした。まだ、聞きたいことがあるのに。
そのとき、開け放したドアの向こうから、ナツの声がした。

「アキ？　何かあったか？」

先ほど大声を出したのを聞きつけて来たらしい。隼人と話しているんだろうと思い込んで一歩部屋に踏み込んだナツは、そこにいた見知らぬ人物に警戒心をあらわにした。

「誰だ？　お前」

ナツの切れ長の目に睨みつけられたアレックスは、ばさりと翼を震わせて、にやっと笑った。それはそれは感心するほど不敵な笑みで、ナツはすぐにその少年を敵と認定した。

「あー、キミが『ナツ』、だね」

言い当てられた名前に驚くも、その半透明に透けた姿と背中の双翼に、ナツは冷静に隼人繋がりだと判断する。
笑みを形作ったままで、ゆっくりと歩み寄ってくるアレックスを睨む一方、ナツはアキの様子を確認し、別段変わったことはないようだと少し安心する。

「ハヤトのシンユウの、ね。ふふ。シンユウ同士、仲良くしようよ、ナツ」

明らかに仲良くしようとは思っていないアレックスの態度に、ナツは警戒を強めた。

「……何考えてる？」

目の前までやってきた金髪の天使は自分より背が低かったため、ナツは見下ろす形になった。緊張感を保ったまま尋ねると、アレックスはふわりと笑った。

まるでイタリアの絵画の中に描かれた天使がそこに現れたかのように美しく微笑むアレックスに、一瞬瞬きをした、その瞬間だった。

ナツはパジャマの襟元をつかまれ、意外なほど大きな力でアレックスに引き寄せられた。

「っ……！　アレックス！」

暴力を振るわれるのではないかと、アキは思わず叫び、目を瞑った。

だがその一瞬後、アレックスの暢気な声が響いた。

「さーてと、帰ろ帰ろ」

何事もなかったかのように窓辺へすたすたと歩いていくアレックスを、アキは呆然と見ていた。ナツはといえば、同じように呆気にとられた顔をして、瞬きを繰り返していた。何もなかったみたい、と安堵したアキに、アレックスは現れたときと同様、唐突に最後のメッセージを残した。

「ハヤトは明後日の朝戻るよ。でもその日の昼には天界へ帰る。それが本当に最後だ。いい？　ちゃんとジュンビしといてよね」

「え？　ア、アレックスっ！」

アレックスはにっと不敵な笑みを残し、ばさりと羽を広げたと思

ったら、次の瞬間、空気に溶けるようにして消えてしまった。

「……行っちゃった……」

ぽつりと呟いたアキのもとへ、ドア先にいたナツが近寄った。

「アキ、大丈夫か？　あいつ、結局誰なんだ？」

ナツの質問はもっともだった。だがアキにはナツの疑問に答えられる余裕はなかった。

アレックスがいなくなったことで、先ほどの衝撃が時間差でアキの胸に押し寄せた。

隼人

アレックスの言葉を反芻する。

……明後日の朝。それが本当の最後だ、と。

14

ひとの都合も願いも、一切に関係なく無慈悲に流れ去る時間。……そして日常はやってくる、どんなときにも。

気づいたときには窓の外が明るくなっていた。

ゆっくりと瞼を上下させて、今自分がどこにいるのかを認識する。カーテンを引き忘れた窓から、緩やかな朝の光が差し込んでいる。頭の下に感じる枕の柔らかさ、手を動かすと慣れたシーツの感触がした。

アキはぼんやりと思考を巡らせた。いつも通りの、ベッドの上。家族に迷惑のかからない、自分の部屋の。

コンコン、とドアをノックされる音が響き、少しの間を置いてドアが開かれた。

「……おはよう、アキ、起きてる？」

顔を出したのは、ナツだった。

アキはぼんやりと思う。何故ナツが自分を起こしにくるのだろうか。いつもは、彼が。……彼が。

「……隼人……は……」

口に出した瞬間、アキの思考は何か靄のようなもので全て遮られ

た。

心の底のブラックホールがまた、ぱくりと大きな口を開いて蠢き出す。暗い暗い底なしのどこかへ向かって、アキの心の端を握ってずるずると沈んでいくような感覚。

「おい、アキ、大丈夫か？」

ナツの心配する声も、表情も、何もかもがぼんやりとしている。

―隼人

アキの頭の中は、完全に真っ白だった。

―明後日の朝。それが最後。

そういったアレックスの声とその鮮烈な緑の瞳だけが頭の片隅に引っかかってぐるぐると回っていた。

朝ごはんの目玉焼きにかけるはずの醤油を、味噌汁の中に入れた。

それも大量に。
後片付けをしながら、何枚も皿を割って。
せっかく乾いて取り込んだ洗濯物を、何故かまた洗濯機に入れて回し。

「アキは大丈夫なのか？　隼人は一体……」

ハルの心配そうな言葉に答えることができたのは、ナツだけだった。
隼人がいなくなったことも、アキの様子が明らかにおかしいことも家族全員が気づいていた。だが栄はアキのことを気にかけつつも口は出さず仕事に行ってしまい、フユは何をしようにも幼すぎた。

「……わかんねぇ。隼人は多分、天国？　天界？　いやどっちでもいいけど、帰ったんだ。正確に言えば強制的に帰らされたんだろうと思うけど」

ふたりは風呂場の横の脱衣所に設えられた洗濯機の前にいた。アキが再び回してしまった洗濯物の脱水が終わるのを待ち、再び庭に干すためだ。日差しは傾いてきてはいるが、この暑さだから乾くだろうと踏んでいる。

「あの金髪天使……隼人の親友とか言ってたが」

ナツは苦々しい顔でアレックスのことを思い出していた。少年にしか見えなかったが、多分そんな純粋な年でも可愛い気のある性格でもない。

「大体何だってんだ、あいつ。俺に……」

唇を噛んで腕組みをし、普段は滅多に見せないイラついた表情を隠そうともしないナツに、ハルは首を傾げた。

「……？　何だ、金髪天使に何か言われたのか？」

「んー、いや、それはいいんだ、別に。ただ……」

ハルの疑問を右手を挙げて遮り、ナツは首を振った。アレックスのことはいい、言いたいことはなんとなく分かったから。それよりもアキのことだ。ナツは見えはしないがアキが座り込んだまま動かない縁側の方へ視線を向けた。

その視線の方向に目をやり、ナツが言いたいことに気がついたハルは、ため息と共に言葉を繋いだ。

「……アキ、戻っちゃったな。隼人が戻ってくる前に」

「……まるで人形だ。息してるのが奇跡みたいな」

背の高い男二人が揃って肩を落とし、廊下の壁のその先を見つめていた。朝からのアキの失敗の数々はどうでもいい。皿は買えばいいし、洗濯物は干せばいい。ふたりが気にしているのはアキが話さなくなったことだ。

隼人が死んでしばらくの間、食べもしないし眠りもしなかったアキは、その間一言も話さなかった。ただ家の至る所で立ち尽くし、座り込み、時間が流れていくのをじっとやり過ごしていた。今はそんなあの頃に、すっかり戻ってしまっていた。隼人が天使として戻ってきてからアキは本来のように明るさを取り戻していたためにその落差は激しかった。

「明後日の朝が最後だって、金髪天使は言ったんだよな……？」

ぼそっとハルが呟いた。

「うん、そう言ってた。つまり明日の朝だね。……朝から、昼までだってあいつは言ったよ」

ナツはハルの質問にぼんやりと返した。……希望があるとすればその短い時間の間だ。事情はよく分からない。でも隼人なら、自分が知っている隼人なら、ただアキを悲しませる為にわざわざ天使になってやってきた訳じゃないとナツは信じている。

「俺はさ、信じるよ。隼人を。あいつがきっと何とかしてくれる」

ハルが遠くに視線を遣ったまま確信を持った響きで呟いた。自分と同じことを考えた兄に、ナツは一瞬大きく目を瞠り、そして微笑んだ。

「……ああ、俺もそう思う」

ちょうど洗濯機がゴウンゴウンと音を立てて止まり、脱水を終了する合図がして、ふたりは互いを励ましあうように笑いながら洗濯物を取り出した。

大きな洗濯籠を手に持ち、庭に出たハルとナツは、朝からずっとそこに座ったままのアキを見て、思わずため息を零してしまった。つい先ほど、隼人を信じると言ったばかりだったが、アキのこの状態にはほとほと頭が痛い。この暑い夏の日なのだ、せめて水分は取って欲しいと傍にスポーツドリンクのペットボトルを置いておいた

が、開封された様子もなくすっかり温くなっているだろう。
ハルとナツは目配せして、ナツはアキのほうへ歩み寄った。ハルは洗濯物を干し始める。

「なぁ、アキ。水ぐらい飲めよ。干からびちゃうぞ」

ナツはそう言ってアキの隣に腰を下ろした。ペットボトルを開けてアキの口元まで持っていく。しかしアキはぼんやりと柱に寄りかかったまま、微動だにせずじっと、向日葵が揺れているのを眺めている。視線の先で洗濯物を干すハルがちらちらとこちらを伺っているが、おそらくアキには見えていないだろう。

「……なぁ、アキ。ちょっとでもいいからさ」

焦れたナツは、ペットボトルの口を更にアキに近づけた。このまま放っておいたら熱中症になってしまうのではないかと心配しているのだ。隼人がいたら口移しで飲ませてもらうのにと思って、自分の思考の馬鹿さ加減を呪った。

「アキ」

再三のナツの言葉に、アキは反応を示した。しかしそれは首を横に振る、拒否の反応だった。
少しだけ首を振って、アキは再び視線を遠くに投げた。本当に人形のように、何の光も映さない暗いその瞳に、ナツは心に苛立ちが沸き起こるのを感じた。

「……アキ。そんな風に黙ってないで、話せよ。昨日何があったのか」

手に持ったスポーツドリンクを蓋もせずに握り締め、ナツは言った。
分かっている、隼人がいなくなってどうしようもなく動揺していることくらい。けれどもそれを家族の誰にも話さずに、ただ自分の心の中だけに押しとどめておくアキのやり方に納得できなかった。
「なあ、アキ、いい加減話せよ。何があったんだ？」
アキはただ夕暮れに染まっていく空をぼんやりと眺めるばかりで、返事をしなかった。
「おい、アキ。聞いてるのか？」
縁側から下りて正面に回りこむ。アキの肩を掴んで揺すってみる。
「なあ、アキ！」
「……ほっといて」
ようやくアキの口から零れ落ちたのは、突き放すような一言だった。
こちらを見ることもなく、ただ、拒絶するアキの言葉。ナツはその瞬間、自身を抑えることができなかった。
ぱちん
一瞬の間の後、じんじん熱を帯びてきた左のほおを、アキは目を丸くして押さえた。そうしてようやくナツの顔を見た。見たこともないくらいに辛そうに歪んだその表情。

生まれてからずっと一緒だったナツ。叩かれたことなど一度もない。

「どうしてお前はそうなんだ？　ひとりで抱え込んで、無理して。どうして俺達に分けてくれない？」

ナツの叫ぶ声が、耳を通り過ぎていく。両肩を掴まれ、揺さぶられながら、アキはナツを見つめた。苛立ちと後悔が入り混じったような真剣な表情。茶色の大きな瞳が訴えてくるナツの思いを受け止めることができずに、アキは目を逸らした。

「……おい、ナツ！　興奮しすぎだ」

そういってハルが割って入るも、ナツの言葉は止まらない。

「俺達はお前の心配をしちゃダメか？　隼人の心配をしちゃダメなのか？　家族だろう！　そういうもんだろ？」

ハルに押さえられながらなおも言い募るナツの言葉を、目を伏せて受け流し、アキは肩に置かれたナツの手を払い、立ち上がった。

「おい、アキ？」

ゆらりと立ち上がったアキを見て、ハルは慌てて声を掛けた。だがその声に、アキを止める力はなかった。アキは素早く玄関にまわり、靴をはいてそのまま家を飛び出した。

アキはひどく混乱していた。

叩かれた頬が熱い。
ナツの瞳、震える声、手の力。
心配されている、心配されたくない。……触れられたくない、誰にも。

―明日が、来てしまうのに。

わけもわからぬまま、走り続けた。住宅街を抜けて、足が向く方へ。
だんだん切れてくる息が、苦しくなる心臓が、今のアキには甘美な毒のように、いっそ心地よく思えた。

15

走って走って、もう走れないと思えるほど疲れを感じて、アキはようやく立ち止まった。

気がつくとそこはよく散歩にくる土手。道の脇に等間隔に植えられた桜の木が、サワサワと緑の葉を揺らしている。

来たかったわけでもないのに、何故か足が向いてしまった。まだ整わない息を、肩を上下して荒々しく治める。頭が、酸素が足りないと言っているのを無視してゆっくりと歩く。コンクリートで綺麗に舗装された道を、桜の木の陰を踏みながら、ただ道が続くほうへ。

行く手に、まだ沈まない太陽が今日最後の光を放つ。

―ああ、まだ沈んでいない

―まだ、終わっていない

ようやく整った息を大きく吐いて、額の汗を拭った。先ほどまで混乱していた頭の中は何故か今すっきりとしていて、アキはただ、遠くの空を見つめていた。

―沈まないで。あなたが沈んでしまったら、明日が来てしまうの。

桜並木も切れて視界を遮るものの何もない土手の上で、流れていく大きな雲と太陽を見つめたままぼんやりと立ち止まっていたアキに、声を掛ける人がいた。

「おうおう、何とも誰かの意思を表したかのような形の雲じゃのう」

声のした方を向くと、近くにあるベンチに品のよさそうなスーツを着込んだ背の低いおじいちゃんがちょこんと座っていた。真っ白な髪と髭が緩やかな風になびく。

「ほれ、あの紫色とオレンジの混ざり合ったの辺りのでっかいの。わしには団子に見えるがのう、嬢ちゃんには何に見える？」

よく散歩に来る場所なのに、会ったことのない不思議な雰囲気の老人だった。老人は細く皺くちゃな指を伸ばし、風に流されていく雲を指差していた。

アキは老人の指すほうへ視線を向け、思わずくすりと笑った。確かにその雲は、丸い雲が三つ連なった団子の形に見える。しかも色が絶妙で、夕暮れの光の中でみたらし団子そっくりだった。

……似ている。いつか隼人が描いてくれたお団子の雲に。

アキが老人の質問にも答えずぼんやり雲に見入っていると、しばらくの沈黙の後で老人が再び声を掛けてきた。

「……嬢ちゃんや、暇なら話し相手になってくれないかね？」

にっこりと笑ったその顔が、なんだか知った人のように思え、普段ならやんわりと断るだろうその誘いにアキはうなずいてそちらへ向かった。当たり前のようにそっと老人が差し出してくれた缶ジュースを、アキはちょっと戸惑った後でありがたく受け取っていただく。そういえば、朝から何も口にしていなかったのだと、今更ながらに気づいて喉を潤した。

ふたり並んでベンチに座り缶を傾け、川の水が流れていくようすをしばらく見つめていたが、ふいに老人が口を開いた。

「わしの娘の話を聞いてくれるかね？」

川辺に吹く風は、遮るものもなく一気に吹き抜ける。毛の長い絨毯のように敷き詰められた緑の草が、風の通り道を描いた。

アキは何も考えずにこくりと頷いた。

「……わしの娘は昔からおてんばでな。喜怒哀楽が激しくて、そりゃあ手を焼いた。人が行かないところへ行っては迷子になったり、変なものを口に入れては大泣きしたりの。本当にたいへんじゃった」

老人は昔を思い出したのか、楽しそうに笑った。

「大切に育てていたつもりじゃったんだがな。あるとき娘が言ったんじゃ。こんなところにいたくない。私のいる場所じゃないと。……そして家を飛び出してしまった。わしは必死で追いかけたよ。ちょうどあんな橋の上じゃ、追いついたのは」

老人はすっと手を伸ばし、少し離れた場所にかかる大きな橋を指差した。

「橋の上でしばらく喧嘩してのう。お互い疲れてきたころじゃ。突然強い風が吹いて、娘は飛ばされそうになった。わしは娘の手を掴んだんじゃが、さらに強い風にあおられてな」

そこで一度言葉を止めた老人は、大きくため息をついた。

「……助かったんですよね？」

アキが期待を込めて尋ねるも、老人は首を振った。

「いや、手が離れて娘は川に落ちてしまった。深くて勢いのある川での。散々探したが、痕跡すら見つからなかった……」

アキは老人にかける言葉が見つからず唇をかみ締め、空っぽになったジュースの缶を握った。

「……ところがじゃ。しばらく経って娘が無事だったと分かった」

その言葉に、アキはぱっと顔を上げた。何とも浮き沈みの激しい話だ、どんどん引き込まれていく。

「川下で親切な人が助けてくれたのじゃ。娘は記憶を失い、体もぼろぼろじゃった。その人が手厚く看病してくれて、何も覚えていない娘に名前と家を与えてくれた」

「……結婚、したんですか？」

「そうじゃ。新しい名前、新しい場所で娘は幸せに暮らしておった。わしは知人のつてで、その娘が自分の娘じゃと知った。子供も……五人も生まれての、可愛いのじゃよ、すごく」

老人が至極嬉しそうに笑うので、アキもにっこり笑った。

「子供が生まれる頃には、娘の記憶も戻っておった。しかし娘は帰ってこようとはせんかった。……わしも連れ戻そうとは、思わんかった。わしと共にいたころよりも、ずっと楽しそうに笑っておった

から。じゃがの。ある時わしは娘の異変に気づいた。……それはどうしようもない病気じゃった」

再び不穏な展開になってきた話に、アキはハラハラしながら聞き入った。

「そこにいては治らない病気じゃ。特別なところへ行って治療せねばならんかった。娘も、それに気づいていた。しかし娘は夫と子供を残していけんと、病気を隠して静かに生活しておった。わしは、ずっと見守っていた。娘の意思を尊重しよう、と。じゃが……」

老人は両手で顔を覆った。

「どこの親が、娘が死にそうなのを黙ってみていられる？　わしは、娘が強情に反対するのを押し切って、連れ去った。旦那と、まだ小さい子供達を置いて」

そして屈みこんでしまった老人の背中を、アキは労わるように撫でた。老人は泣いているのだろう、小さな体を震わせ肩を上下し、くぐもった声で先を続けた。

「……ひどいことをしたと、今でも思っておる。じゃが、恨まれてもわしにはそうすることしかできんかった」

「娘さんは、生きているんですよね？」

震える声で懺悔の言葉を口にする老人に、アキは再び期待を込めて聞く。そうでなければこの話に救いがない。

「……生きては、おる。じゃが二度と、家族には会えない」

「どうして……」

「住む場所が、違うから。遠すぎて、行き来することができぬ場所なんじゃ」

「……」

何も言えなくなって、アキは遠くを眺めた。太陽が、ゆっくりと沈んでいき、もう半分くらいしか残っていない。オレンジ色の太陽から、光は地平線を走り、空は黄色から紫、そして徐々に濃い群青へと変化していく。眩しいくらいに黄金色に満たされた世界は、何故こんな風に、誰かと誰かを引き離すのだろう。こんなにも美しい世界なのに。

老人が、落ち着いた声で静かにまた語り出した。

「ひどいことをした、じゃが許して欲しいとは思っておらぬ。許してくれるとも、思っておらぬ。娘は今でもわしを恨んでいてな、会うとひどい態度で、わしを蹴り飛ばす勢いで怒るんじゃ」

切なそうな顔をしているのに、しっしっしと小さく、しかしどこか楽しそうに笑う。

「娘の旦那にも、孫達にも会ってはおらぬ。会わせる顔が、なくての。……じゃが、わしは後悔しておらぬ。わしはただ、選んだだけじゃ。わしが一番大切にしたいことを、選んだだけなのじゃ」

「一番大切に、したいこと……」

何か引っかかるものがあって、ぼそりと言葉を繰り返したアキに、老人は包み込むようなやさしい笑顔を浮かべた。

「人生は選択の連続じゃ。こっちを選べばあっちを選べない。こっちもあっちも選びたくない。しかし他に選択肢はない。嫌じゃのう、苦しいのう」

それは長い長い年月を積み重ねてきた人だけが語ることができる、悟りのような台詞だった。苦いものを食べたような、本当に嫌そうな顔をしながら、老人は言葉を続ける。

「それでも人は、選らばなければならない。限られた選択肢の中から、自分の最善を選んで先へ進んでいくのじゃ。……時には間違うじゃろう、後悔もするじゃろう。じゃが未来は常に選択の上に積みあがり、さらに選択肢を広げて待っているんじゃ。……わかるかね？」

アキは回らない頭を必死に回転させて考える。アキの眉間に寄った皺を見て、老人は笑った。

「……未来は、何もないところにぽん、と現れる理想ではないんじゃ。望む未来があるのなら、それを現実にする為に、今をそういう風に積み重ねなければならない。そのように、選んでいかなければ、手に入らない」

ぶつぶつと復唱しながら、アキは考え込んだ。

残された選択肢の中から、望む未来のための最善を選んでいく。ひとつずつ……。

「広い世界の中で、たくさんの人が、それぞれの選択をしている。その選択に揺り動かされて、世界は形を変えていく。日々、変わっていくんじゃ。……壮大じゃの」

老人は目を細めて、消えていこうとする太陽を眺めた。

先ほどふたりが見ていた団子雲は、いつの間にか風に流されてお餅のように伸びて群青色の空に浮かんでいた。

未だにぶつぶつと復唱しながら考え込んでいるアキの隣で、老人は何か愛おしいものを見るような優しい顔で、その雲を見つめて口を開いた。

「……時に嬢ちゃんには、家族はいるのかね？」

ふいに変わった話題に、アキは考えを中断して答えた。

「えっと、はい、居ます。父と兄が二人。弟が一人です。母は亡くなってしまったので……」

「そうか、すまんことを聞いたのう」

申し訳なさそうにしゅんとする老人に、アキは慌てて首を振った。

「母は居ないですけど、うちは結構にぎやかなんです。父は無口な人ですが、いつも私達を見守ってくれてて、いざというときとても頼りになる人で」

話し始めると、アキはそれまでいろいろ考え込んでいたことも忘れ、夢中になって話し出した。父がいて、兄がいる。そして可愛い

弟も。ひとりひとりの顔が思い浮かんでアキは思うままに口にした。

「一番上の兄は背が高くっていつも元気で、面白いことを言って笑わせてくれる優しい人。二番目の兄は、私の双子の兄なんですけど、頭がよくていつも私の考えてる一歩先を読んで行動してくれるんです。ちょっと偉そうにしているところがあるけど、器用だし、何でもできるし、偉そうにしてても違和感なくって何も言えないの。弟はもう可愛くって、くりんと大きな目をしてて。優しい性格で、私が泣いているといつも傍にきてくれて……」

いつの間にかずっとひとりで得意げに話し続けていたことに気づいたアキは、バツが悪そうに声を落とした。しゅんとしてしまったアキに、老人は蕩けそうな優しい笑みを向けてうんうん頷いた。

「いいのう、羨ましいのう。素敵な家族じゃ。……わしには娘ひとりしかおらんからのう。それもすっかり嫌われてしまっているが」

自嘲するように笑った老人に、そんなことない、とアキは言った。

「娘さん、だけじゃないでしょう？　娘さんの旦那さんも、お孫さんだって五人もいるんでしょう？　……きっと会いたいと、おじいちゃんに会いたいって思ってくれてますよ」

その言葉に、老人は小さな目をいっぱいに見開いてアキを見、そして今度は見えなくなるほど細めた。喜びに満ちたその表情に、アキも心が温かくなるように感じた。

家族が、大切な家族がいる。老人の家族がきっと彼に会いたいと思ってくれているように、自分の家族も、アキを支えてくれているのだと、思ってくれているのだと素直に感じることができたのだ。

最後まで粘るように地平線にかじりついていた太陽がとうとうその光を手放し、あたりが薄暗くなってきた頃、遠くから聞こえる自分を呼ぶ声に、アキははっと振り向いた。

「アキーーー！」

汗だくになったナツだった。だいぶ探し回ったのだろう、呼吸も荒くこちらへ走りこんでくる。

「……お迎えがきたようじゃの」

「あの……また、会えますか？」

どっこいしょ、と立ち上がった老人を支え、アキは問う。老人は一瞬きょとん、とした顔になったが、それはそれは嬉しそうに笑った。

「……近いうちに、きっと」

それを聞いてアキは安心したようにため息をついて、何だか言っておきたい気持ちになり、「ありがとうございます」と感謝の言葉を口にした。

「ではな」と言って、ふらふらと歩き出した老人を見送るアキの後ろから、ナツがぜーぜー言いながら走りこんできた。近くで見てみると、着ていた赤いティーシャツは、汗で色が変わるほど濡れていた。

「アキ、お前、携帯も持たずに飛び出すのはやめてくれ……」

急に走って出てきてしまったことを責めず、ただ心配するから携帯くらいはもって行け、とナツは言った。相当走り回って探してくれたのだろう、膝に手を付き息を整えるナツに、アキは素直に謝ることができた。

「ごめんね、ナツ……」

「いいよ、帰るぞ」

はぁ、と大きく息をついて、ナツは体を起こした。疲れてフラフラしているナツを支えるように腕を掴んだアキは、ふと、老人の歩き去った方向を振り返った。

一本道の土手の上、老人の姿は、すでになかった。

「歩くの、速いんだな……」

アキは瞬きをひとつして、老人が消えたのとは反対の方向へ、歩みを向けた。

16

薄暗い土手の上を、アキとナツは並んで歩く。電灯がぽつぽつと点在するだけなので、もう少しすると真っ暗になってしまう。何も考えずに出てきてしまったアキだったが、ナツが迎えに来てくれてよかったと、ほっとした。

春になると植樹された桜並木がきれいなこの土手。今は緑色の葉をたくさん茂らせて風とおしゃべりをしている。葉っぱの擦れるざわめきを聞きながらしばらく無言で歩く。

アキは心の中で、老人の語ってくれた言葉を反芻し、考えていた。

―限られた選択肢の中から、自分の最善を、選ぶ。

遮るもののない視界。どこまでも広がる空。遠い地平線。流れていく川。流れていく、時間。

『……壮大じゃな』、と呟いた老人の声が、耳の中に残っている。

人はそれぞれ、自分の最善を選択しているだけ。それぞれの選択が、未来の道筋を変え、絡み合って、混ざり合ってまた現れた選択肢の中で、また選ぶ。

―どうにもならないことは絶対にあって、最初から選択できない選択肢もきっとあって、けれども人は選ばなければならないから、進んでいかなければならないから、だからきっと、一番大切なものを選ぶんだ。

老人の言葉が、ようやく飲み込めた気がして、アキは顔を上げた。

「ねえ、ナツ」

「……なんだ？」

暑そうにシャツをぱたぱた動かして風を通しながら、ナツはアキを見た。その何でもない空気感。『ナツは僕にはもったいないくらいの、いい友達だよ』と言っていた、隼人の言葉を思い出す。

―私にももったいないくらいの、いいお兄ちゃんだよ

「……話、聞いてくれる？」

「ああ」

当たり前だ、と言うように、ナツはアキの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。そんなナツのそっけない優しさに、アキはふわりと笑った。

「……やっぱぶん殴るの決定だな。あのやろー」

「え？」

ぼそっと怖いことを呟いたナツの言葉を聞き返したが、「なんで

もない」と言いくるめられ、アキは首を傾げた。
土手を通り過ぎて住宅地へ入り、ふたりはゆっくり家を目指す。ハルには既に電話で連絡を入れてある。ほっと安堵したため息が携帯の向こうから聞こえ、「早く帰って来いよ」とハルはひと言言った。

歩きながら夕べ隼人とアレックスに聞いたことをナツに話した。

隼人の体のこと、正天使のこと、隼人と母親の約束、アレックスのこと、魂から自我が消えてしまうこと、それには生きている人間の想いが関係していること……

ぽつぽつと、思い出しながらゆっくり話すアキに、ナツは辛抱強く付き合った。
アキは、さきほど老人と会い、いろいろ話をしたことも語った。ナツとしてはそんな不審なジジイに引っかかって欲しくはなかったが、アキが嬉しそうに話すので、ナツはただひと言、「ふーん」と言った。何ともいえなかった。ナツがアキの近くまで走ってきたときには、老人の姿なんてなかったからだ。だからただ不思議な老人もいたもんだと、最近よくある話の変態ではなくてよかったと思っただけだ。

それよりもナツには、アキに聞いておきたいことがあった。アキの頭の中が整理されたのなら、確認しておかなければならない重要なことが。

「なあ、アキ。まだ、隼人が好きか？」

「え……？」

突然の意外な質問に、アキは戸惑う。

「あいつは死んだ。それはわかってるよな？　それでも好きか？　今でも、そうなのか？」

「うん……好きだよ」

呟くように答えたアキに、ナツは更に畳み掛けた。

「あいつの傍に、行きたい……か？」

ぴくり、とアキの肩が動いた。隼人の傍に行く、それはつまり、死んで、ということだろうか。それならば、答えは、ノーだ。

ゆっくりと首を横に振り、否定の意思を表したアキに、ナツはほっと息を吐いた。

ナツは思う。アキは隼人が天使になって現れる前、死んでしまいたいと願っていた、と。

毎日眠りもせず、食べもせず、人形のようにたたずむ姿は、死という解放を待っているようにしか見えなかった。

生きている人間にできることは、後を追って死ぬことじゃない。その人を無理に忘れることでもない。ナツはそう、アキに言ってやりたかった。しかし自分の言葉では、アキの心に届かないと、ずっともどかしく感じていた。……そしてそこに隼人は現れた。隼人はそれを伝える為に来たんだと、ナツは信じていた。

「お前がその選択肢を捨ててくれてよかったよ」

「……うん」

アキは申し訳なさそうに頷いた。

「でも、あれだな。もしお前が今天国へ行ったら、きっと隼人と母さんに蹴り戻されるぞ、来るなって」

本当にやりかねないと、ナツは妄想の中の隼人と母に苦笑いする。アキは笑えない冗談に苦々しい顔をしただけだった。

どこかの家から、カレーのにおいが漂ってきた。平凡な、幸せのにおい。

「……ねえ、ナツ。隼人が消えないように、みんな手伝ってくれるかな？」

アキが下を向いたままぽつりと言った。

「ハル兄もフユも、お父さんも、みんな覚えててくれる……よね？」

自信なさそうに見上げてくるアキに、ナツは拳骨を落としてやろうかと思った。

「当たり前だ、バカ」

「痛い！」

拳骨はあんまりだから代わりにデコピンで勘弁してやった。額を押さえて、ちょっと涙目で見上げてくるアキを、ナツはじとりと睨みつけた。

「あのなぁ、隼人はお前の恋人ってだけじゃねーよ。じゃなかったら、普通にうちで歓迎しないだろ？　あいつは俺の親友で、お前の恋人で。ハル兄的にはちょっと悔しいけど弟で、フユにとっては三人目の兄貴だ。父さんにとっては……まぁ息子みたいなもんだろ」

「そうだね、隼人はうちの家族なんだ」

くすくすと笑うアキを、ナツが見つめる。瞳の奥で、何かを探るように。

「……ん、そうだな、家族だ。ま、アキがこの先、別の男を好きになったって大丈夫さ。俺が代わりに覚えてるから」

「ほっ、他の人なんて好きになったりしないもん！」

怒ったように真っ赤な顔でほおを膨らませたアキが、ナツの発言に噛み付いた。相当不本意なようだ。そのまま無言で睨みつけてくるアキを、ナツは笑ってぽんぽんと叩く。

「お前がずっと隼人のことを好きでいても、俺は笑わないよ。なにしろもっとツワモノが家にいるわけだし」

面白そうに笑うナツを、アキはきょとんとした顔で見上げ、首を傾げた。アキも気づいてないのか、とナツは鈍感な家族に苦笑した。

「とにかくさ、みんなで覚えていればいいんだよ。忘れることなんてない。万が一にも消えることなんてないのさ。あいつもお前も、俺達を信用してなさすぎなんだよ」

「……うん。ありがと、ナツ」

いつの間にか家の前まで来ていて、玄関先で待っているハル、フユ、栄の姿が見えた。ナツが「おーい」と呼ぶと、バタバタと走り寄ってきた。もみくちゃにされながらも笑顔で家の中に入っていくアキを見て、ナツは大きなため息をつく。

―アキは気づいていない。やっぱりちょっとおかしくなってるな。

だからあの時聞いたのに。大事なことはちゃんと話しとけっつーの、あの馬鹿。

心の中で思う存分隼人に対する罵倒の言葉を吐き出すが、それでもすっきりしないもやもやした感情。ぐいっと腕を上にあげ、背伸びをしてから一気に力を抜いた。

「はー。行くしかないか」

首を鳴らし、ため息とともに呟かれた言葉は、誰にも聞かれず夜の静寂に溶けていった。

17

風呂から上がったアキは、急に疲れを感じ、早々にベッドに潜り込んだ。うとうとと眠りに入ろうとする時、コンコン、と控えめなノックの音が響き、ドアが開いた。真っ暗な部屋の中に、廊下からの明かりが差し込む。

「アキ？　寝ちゃったか？」

ハルがドアから室内を覗き込んでいた。アキは半開きの目を擦り、身を起こした。

「……どしたの？　ハル兄」

ハルはアキの返事を聞いてほっとした様子で、明かりをつけないまま部屋に入ってきた。そしてベッドの前に来て、胡坐をかいて座りこんだ。

廊下から差し込む光だけでは、ハルの表情は読み取れない。アキは訝しげにハルの言葉を待った。

「フユがな、アキちゃんと一緒に寝たいって聞かなくてな。こうして俺の背中に張りついて駄々捏ねるんで、仕方なく連れて来たんだ。もしアキが大丈夫なら、一緒に寝てやってくれないか？」

ハルの背中の影から、フユが顔を覗かせてアキの様子を伺っていた。普段は聞き分けのいい子だ、こんなに我侭にものをいうことなんて滅多にない。

「……いいよ、おいで、フユ」

アキの差し出した手に、フユはその小さな手を重ねて、にっこりと微笑んだ。そしてハルの背中を下りて、アキの隣に寝転がった。

「じゃ、大人しく寝るんだぞ、フユ」

やれやれ、と立ち上がったハルは、フユに一言言ってから、アキのほうへ向き直った。

ハルは手を伸ばして、アキのほおに触れた。思うことはたくさんあったが、あえて押し殺して口を開いた。

「……なあ、アキ。俺達がついてるからな。」

にかっと笑ったハルに、アキもくすりと笑みをこぼした。

「そうだ、笑顔だぞ、笑顔。……じゃ、おやすみ」

そう言って、ハルは静かにドアを閉めた。

ドアの向こうではナツが待っていて、ハルとアイコンタクトを交わした。任務完了、といった様子のハルの視線をナツは半笑いで受け流し、それぞれ静かに自室に引き上げていった。

ごそごそとアキのベッドに潜り込んだフユは、すぐに寝てしまうのかと思いきや、小さな声でアキを呼んだ。

「ねえ、アキちゃん」

「ん、なに？　フユ」

並んで横になった二人は、揃って天井を見上げる格好で会話を始めた。真っ暗な部屋、何も見えない。

「隼人兄ちゃん、どこ行っちゃったの？」

フユの可愛らしい声。昼間はただどこかへ出かけたのだろうと思っていたらしい。しかし夜になって、プチ家出をしたアキが帰ってきても一緒に戻らなかったのを、不審に感じたようだ。

「……隼人兄ちゃんはね、天国へ帰ったんだよ……。ほら、言ってたでしょ？　死んだ人はみんな天国へ行くって」

「でも天使は天国じゃなくて、他のところにいるって言ってたよ。……隼人兄ちゃん、寂しくないかなあ？　だってママは天国にいるんでしょう？　ママは天使じゃないもん」

開け放したままの窓から、ぬるい風が吹き込んできた。ああ、何日か前にもこうしてフユと一緒に寝たっけ。アキはフユのお腹の上に、薄い布団をしっかりと掛けてやる。

「あのねえ、ぼく、いつか死んじゃったらね、ボクも天使になって隼人兄ちゃんと一緒に暮らすの。だってママのところにはパパが行くでしょ？　ハルちゃんもナッちゃんも。でも隼人兄ちゃん、天使

だったらひとりだから。寂しいからぼくが行ってあげるの。ねえ、アキちゃんはどうする？　ぼくと一緒に隼人兄ちゃんのとこ行く？」

暗いからきっとフユにだって見えない。けれどもアキは両手で顔を覆っていた。フユの素直な愛情が、アキの胸の中にすとん、と落ちて、染みるように溶けていった。

「……うん、そうする。ありがと、フユ」

くぐもった声に、フユは笑った。

「どうしてありがとなの？　変なアキちゃん」

そして擦り寄ってきたフユを軽く抱きしめた。隣に寄り添う自分より高い体温。とくん、と小さな心音が耳に心地いい。

―そうだね、フユ。きっと寂しい思いなんかさせない。ひとりになんてしてやらないの。

安らかなフユの寝息を聞いているうち、アキはいつの間にか眠りに落ちていた。

窓から薄っすらと滲んできた朝日に、アキはゆっくりと意識を浮上させた。すっきりとした目覚め。

くすりと笑って、アキは隣でまだ寝息を立てるフユの髪をそっと撫でた。

「ほんとにありがと」

起こさないように慎重にベッドを降りると、まだ暗い部屋をしのび足で後にした。

一階へ下りると、縁側の方が明るいのに気づいた。変だな、と思ってそちらへ行くと、まだ暗い早朝であるのに雨戸が開け放されている。そこには柱に寄りかかって座る父の姿があった。

「お父さん……？」

眠っているかもしれないと、アキは静かに声を掛けた。

「ん……、アキか。……大丈夫なのか」

寝てはいなかったようだが、栄は眠そうに目を擦った。やはり昨日ずっと心配を掛けてしまったようだ。アキは素直に謝った。

「うん、大丈夫……。ごめんね、心配掛けて。でもお父さんどうしたの？　今日は日曜日だから仕事じゃないよね？」

アキは栄の隣に腰を下ろした。栄が無言のままでいるのに、アキも合わせるようにして、何も言わず待った。

薄暗い空の下、朝日がだんだん強さを増し、向日葵の黄色を濃くしていくのをふたりで眺める。さわさわと向日葵を揺らす、南からの風を受ける。陽が出たばかりだから、まだ暑くはない。

「なあ、アキ。墓参りに行かないか？」

唐突に栄が切り出した。

「……墓参り？」

「……母さんの、だ。今日は月命日だから」

栄の低音の声が、やけに静かに響いた。アキは思ったことを口にした。

「お墓には、お母さんいないよ……。天国にいるんだもん」

すねたように口を尖らせて言うアキに、栄は苦笑した。そして大きな手でアキの頭を撫でる。まるで小さな子供をあやすように。

「……そうだな。でも、思い出すことが大事なんだ。墓の前で、母さんを想うことが」

「うん……行くよ」

素直に返事をしたアキに、栄は家族にしか見せない優しい笑顔で笑った。

18

まだ陽がのぼり切っていくらも経たない早朝。歩いてもそう遠くない場所にある墓苑に、連れ立って墓参りにやってきた栄とアキの手には線香と向日葵の花。「向日葵ばっかりでお母さん飽きないかな？」とアキが言うと、栄は困ったように笑った。

墓は掃除の必要がないほどにキレイな状態で、アキは首を傾げたが、あまり気にせず花を活けた。線香を燃やし、二人揃って手を合わせる。

隼人やアレックスに聞いた話の限りでは、母はすごく元気に過ごしているようだ。十歳のときに亡くなってしまったけれども、いつもキラキラ輝いている、エネルギーに満ち溢れた人だった。料理が上手で、でも掃除はあまり得意じゃなかった。いつだって笑っていて、あの頃は父さんもよく笑ってた……。

アキが思い出に浸っている時、不意に栄が立ち上がった。どうしたのか、と顔を上げると、じゃりじゃりと小石を踏んで近づいてくる足音が聞こえ、人影が見えた。

「吉川さん」

「あ……、日向さん、どうも」

栄の呼んだ人物と、聞き覚えのあるその人の声は、アキを一瞬硬

直させた。アキはぎくしゃくと立ち上がり、声のした方へ体を向ける。そしておずおずと顔を上げれば、そこには予想したとおりの人物—隼人の両親が立っていた。

「あら、アキちゃん。久しぶりね」

隼人の母親に話しかけられ、アキは搾り出すように返事をした。

「お、お久しぶりです……」

何をどういったらいいのか分からなかった。別に怖がる必要もないのに。

隼人の両親に、アキは以前から怯えていた。隼人の家に遊びに行った数回、その言葉の端々や、視線に何かのプレッシャーを感じていたのだ。

じゃりじゃりという小石を踏む音と共に、隼人の両親が近づいてきた。墓参りの帰りなのだろう、隼人の父親が手に持った水桶をアキは眺めた。その水桶を見て、アキはここに隼人のお墓があるのだと、ぼんやり思った。

隼人の墓が同じ墓苑にあることを、アキは知らなかった。葬儀の後、気を失うようにして倒れ、その後三日ほど眠り続けていた。その後も学校が続いているにも関わらず家に引きこもり続けてきたのだ。墓がどこにあるのかなんて、今まで考えもしなかった。

「……すっかり痩せてしまったのね、アキちゃん。ダメよ、ちゃんと食べないと」

か細く儚げに、そして優しく響いた言葉に、アキは目を丸くした。

そして気づく。彼女もまた、ひどく痩せてしまったことに。

「おばさんも……」

よく見れば、顔には濃いくまが出来ており、疲労の様がありありと見て取れる。父親を見れば同じように、疲れきった顔で、少し目が充血しているようだ。

「日向さん、隼人が死んでからご挨拶にも伺わず、失礼しました。……あの子が、だいぶお世話になったというのに」

隼人の父が丁寧に頭を下げた。栄は慌てて自分も頭を下げた。

「いえいえ、そんな……いいんですよ、うちのことなど気になさらず。……御辛かったでしょうに」

そんなやり取りを、アキは呆けた様子で見つめた。このふたりは、隼人の両親は、こんな人たちだっただろうか？

「ねえ、アキちゃん。もし時間があったらでいいのだけれど、また家へ遊びにいらっしゃいね。ナツくんと一緒に」

「ああ、そうだ、それがいい。きっと隼人も喜ぶだろう。……では、日向さん、失礼させていただきます。アキさん、また」

じゃり、と小石を踏み、帰っていく二人を、栄とアキはお辞儀をして見送った。遠ざかっていく二人の姿を眺め、アキはまた首を傾げ、ぼんやりと呟いた。

「おじさんに名前呼ばれたの、初めてだ……」

「吉川さん達は、前はあんな風じゃなかったろう？」

墓の隅に見つけた雑草を取り除こうとしゃがみこんだ栄が呟いた。まるで隼人と両親を前から知っていたかのような口ぶりに、アキは驚いた。

「え、お父さん、隼人のおじさんとおばさんに会ったことあるの？」

「いや、葬式のときが初めてだ」

アキは瞬きをして更に首を傾げた。アキの疑問を正確に読み取ったかのように栄は言葉を続ける。

「あの二人、隼人の葬儀が終わって、墓に納骨が済んでからずっと墓参りを欠かさなかった。毎日、来ては泣いていたよ」

「え……？」

「隼人に聞いた限りでは、冷徹で全くあいつに興味がないっていう話だったからな。よく似た他人かと最初は思った」

元々少ししか生えていなかった雑草は、すぐに抜き終わってしまった。栄はよいしょ、と立ち上がり、アキを振り返った。普段は饒舌ではない父が、こんな風に話をするのは珍しい。アキは少しぼんやりしながら父を見つめた。

「毎日毎日、来ては墓を眺め、泣いては隼人の名を呼ぶだろう？

まさか他人がそこまでするはずない。……あの人たちは、自分らのそれまでを悔やんでいた。息子を、大事にしてやれなかったってな」

手桶を掴み、ふらりと歩き出した栄に、アキは無言で従った。じわじわと照り付けてくる太陽に、蝉の声が響く。足元の小石も盛大に音を立てる。だが栄の声は、不思議と耳によく届いた。

「あの人たちは、ほら、大会社を経営しているんだろう？　とてもじゃないが忙しかったらしい。息子も真面目に賢く育ったもんだから、つい放っておいてしまったって言ってたな。そんな風にしているうちに……亡くなってしまった」

隼人の大きな家に遊びに行くのは正直少し怖かった。お手伝いさんが何人もいて、何だか空気が張り詰めていた。おばさんは上品に笑っていたけれども、本当は目が笑ってないのを知っていた。おじさんは挨拶したってこちらを見ようとはしない、そんな人だった。だから隼人もあまり家に居たがらなかった。しょっちゅう家に遊びに来ていた。放課後も、休みの日も。

大きな木の日陰に入ったところで、栄は足を止めた。考え込んでいたアキは、栄にぶつかるようにして止まった。

「わ、何、急に止まらないでよ、お父さん」

「あの二人は息子に嫌われたままで、亡くしてしまったと、たいそう嘆いてる。……なあ、アキ。隼人は両親を嫌っていたのか？　憎んでいたのか？」

栄が止まった場所。それはある墓石の前だった。色とりどりの花に埋め尽くされるように、その名前は刻まれていた。

―ＨＡＹＡＴＯ　ＹＯＳＨＩＫＡＷＡ―

清められた白い墓石。たった一人の息子を亡くした両親の悲しみが、溢れんばかりの花の形をとってそこに現れているかのような。

アキは言葉を失った。

蝉の声がうるさいほど響いているのに、逆に無音の中にいるような、そんな不思議な感覚。

長い沈黙のあと、するり、と抜けるように言葉が口をついて出た。

「……そんなこと、ないよ。隼人はおじさんのこともおばさんのことも嫌ってないし、憎んでもいない。隼人は……二人が自分のことを嫌ってると、思ってた……」

アキは、答えをひとつ、持っていた。

アキ自身も驚いた。ああ、そうだ。隼人はそんな話もしてくれた。

「おじさんもおばさんも、子供がキライだって……。自分は望まれて生まれた子供じゃないって、そう言ってた……」

ああ、どうして。どうして今まで忘れていたの、気づかなかったの？

アキは思わず顔を覆った。栄はアキの突然の変化に動揺もせず、愛おしそうにまた頭を撫でた。

「隼人、ごめんね、ごめんなさい……！」

ずっと、自分のことばかり考えていた。
隼人が死んで、悲しかった。とてもやりきれなかった。自分も死んでしまいたかった。そうすれば、すべて終われると思ったから。

全部、自分勝手に思い込んで。
ああ、隼人

「隼人は私達の家族だって、勝手に決め付けてた……隼人にはちゃんとお父さんもお母さんもいたのに……」

隼人とは、家で家族と共に過ごす時間が長かったため、隼人が亡くなったショック状態の中で、アキは彼の両親、家のことをすっかり頭の中から消し去っていた。隼人もあまり家のことを話さなかったため、印象に残りにくかった。

天使になった隼人が日向家に来た事にも、全く違和感を覚えなかった。隼人がいる、それだけで頭がいっぱいになってしまい、隼人が日々何を思って過ごしているのかや、隼人の心のうちを全く考えようとしないまま、ただ隼人がいなくならなければいいと自分勝手に思っていた。

隼人が何故正天使になることに固執したのかもようやく分かった。アキの想いを信じていなかったわけでも、日向家の面々の気持ちを受け入れていなかったわけでもない。ただ、気にかかっていたのだ、自分が両親から愛されなかったことを。両親に愛されないようなちっぽけな自分が、アキに愛されるはずもないと、無意識に思っていたのかもしれない。死んだ自分をアキが想い続けることがどれだけ不毛なことであるか、それを知っていて受け入れる自信が持てなかったのかもしれない。正天使になってしまえば、いつかは自我が消

えるとしても、誰かに頼った不安定さ、その絶望的な不安からは逃れられる、だから。そう考えれば、隼人の行動の理由の辻褄が合う……。

「ごめんね……隼人、気づいてあげられなくて、ごめん……！」

アキは大声を出して泣いた。後から後から溢れる涙を、止めようともしなかった。栄がその大きな体で、アキを支えていたから、アキは余計に安心して泣いた。

早朝の墓苑。誰もそんなふたりの姿を見る物はいない。いたとしてもお墓の前で、大泣きする姿の、何がおかしいというのだろう？

「伝えておいで、アキ。……本人に」

不意に頭の上から響いた低音に、アキは顔を上げた。

「まだ、チャンスがある。そうだろう？」

何もかもを知ったような父の優しい顔に、アキは目を丸くした。そして走り出した。賑やかに音を立てる小石を蹴って。

１９（前書き）

クライマックス突入です。

19

おっちょこちょいで不器用で鈍感な私は、他人の痛みにも気がつかない。

自分のことに精一杯で、誰かが泣いている声も耳には入らない。そうやってぼーっと生きて、手のひらから零れ落ちて初めて、ようやく気づく。

きみも、泣いていたんだね。

泣き虫な私はすぐに泣いてしまうけど、きみが静かに心の中で流す涙に、ずっと気づかなかった。家族が当たり前に笑う家で、一緒になって笑うきみが、本当の家に帰ったときに、どんな気分になるのかなんて、考えもしなかった。

きみが時々ふっと寂しそうな顔をするの、知っていたの。……知っていたのに。

奇跡が、私の身の上に降ったこと、感謝してもしたりない。きみが、私の為に起こしてくれた奇跡。鈍くて、肝心なことに気づかない私に、みんなが教えてくれた。

―ありがとう、私に出会ってくれて。私に、会いに来てくれて。

息を切らせて庭に走りこんできたアキを、洗濯物を干していたハルが出迎えた。

「アキ？　ど、どうした？　そんなに汗だくで……。今、水持ってきてやるから！」

息の整わない妹を心配し、ハルは家の中に駆け込んだ。

緑に囲まれた庭、干しかけの洗濯物。強い日差しの下、いつもと同じように、緩やかな風に揺れる向日葵。手で汗を拭って大きく息をついたアキは、どうしようもない震えを感じ、両手で自分自身を抱きしめた。

……来る、もうすぐ。

息も整わないままそう思った次の瞬間、空気がきつく萎むように歪み、一瞬の後でアキの眼前に現れた。

「はーいアキ。お久しぶり。お母さんよー。」

ニコニコと手を振る母、葵が真っ先に声を上げた。アキはまさかの展開に声も出せずに立ち尽くす。ずっと前に死別した母。隼人が天使になって再び現れたのだから、母が現れてもおかしくはないが、でも今現れるなんて予想もしていなかった。

微笑む母の笑顔は、仏壇に飾られた写真と同じ。いつまでも若々しいその美貌。

「ちょっと葵さん！　これ解いてくださいよ！　僕は逃げませんって！」

もごもごとくぐもった隼人の声に気づき、アキは視線を葵の足元へ下ろした。そこにはロープでぐるぐる巻きになった隼人がいた。何故か口元までロープが巻かれ、苦しそうにもがく隼人。

何がなにやらよく分からず、ぽかんとするアキの前で、鼻から上と足の先しか出ていない状態の隼人の頬をつつきながら、アレックスがにやにやと笑っている。

「ふふーん、そんなコト言っても信用されないよー、ハヤト。あれだけ暴れたらこの処置だってシカタナイよーぅ」

「……何、この光景」

嫌そうに突っ込みをいれたのは、台所から麦茶のポットとコップを持って戻ってきたハルだった。

ハルの眼前にあるのは、死んだ当時の記憶のまま若い母と、その手に持たれたロープによって簀巻きにされて倒れこんでいる隼人。そしてその隣にしゃがみこんだ金髪の美少年天使だった。アキは少し離れたところで口を開けて放心している。

「っつーか何で母さんが？」

分かるようで分からない、理解し難い光景に、暑さの為ではない嫌な汗が額から流れ落ちハルは渋い顔で呟いた。

「やーだ、ハル。こんなにおっきくなっちゃったの？　お父さん追い越してるんじゃない？」

いつの間にかハルの目の前までやってきていた葵が、背伸びをしてハルの頭に手をやった。ハルは今自分が見ているものをもう一度確認しようと、目を擦った。

「……母さん、聞いていい？」

「なあに？　何でもどうぞ？」

「その背中の羽は……何？」

瞬きを繰り返しても、目を擦ってもやっぱり見える純白の翼。しかも隼人のように一対ではない。三対、合計六枚の翼が葵の背にあった。

「やーだ気づいちゃった？　うふふー」

にこにこと笑う母親に、ハルは思わず突っ込みを入れた。

「いや、気づかない方がおかしいから。……ってそうじゃなく」

「……あおいっ！」

ハルの言葉を遮る、大きな声が響いた。この家で葵を呼び捨てにする人間はただ一人。

先ほどのアキ以上にぜーはーと息を切らし肩を上下する栄は、汗だくで疲労困憊と言っていい様相だった。にもかかわらず、俊敏な動きで庭を横断し、次の瞬間にはがばりと葵を抱きしめていた。

「ちょっと！　その汗どうにかして！」

何十年ぶりに再会した連れ合いに対する第一声にしてはひどすぎる葵の非難の声も、栄には聞こえないようだ。全身で抱きしめるその力に、葵はふっと息を漏らした。

「……締めすぎよ、痛いわ」

「……葵……」

「ん……ただいま」

葵は抱きしめられたまま腕を伸ばして栄の背中を撫で始め、その場は一瞬にして甘い空気になってしまった。いくつもの視線を集めているにも関わらず、全く空気を読むつもりのない恥ずかしい両親をハルは複雑な表情で眺めた。

「ここでおれがおーいとか言っても、絶対聞こえないんだろうなぁ……」

諦めの気持ちで遠い目になったハルは、先ほどまで近くにいたはずのアキがいないことに気づいた。

「あれ、アキ？」

きょろ、と見渡せば探すまでもなく、ロープでぐるぐるの隼人を解放すべく、うんうん唸って必死で引っ張っているところだった。
金髪天使が隣で野次を飛ばしているのを尻目に懸命な妹を手伝おうと、ハルはそちらへ移動した。どちらにせよ両親の周りで漂っているピンク色の空気に当てられて居心地が悪かったのだ。

一歩歩き出したハルは、隼人に巻きついているロープの端が、母親の手に握られているのに気がついた。アキがあちこちを引っ張っているのにも関わらず、まるで意思があるかのように元に戻ってしまう全く解けない不思議なロープ。
自力で立つことも出来ず地面で芋虫状態の隼人を見、六枚もの翼を背負った母を見、少し思案した後、ハルは母親の手元から、ぐいっとロープを抜き取った。

「あー、ハル、余計なことを！」

葵が声を出した時、隼人の体にきっちり巻きついていたロープが、まるで意思を持っているかのようにしゅるしゅると動いて解け、更に蛇のようにとぐろを巻いて一箇所に丸まった。
不思議なロープからようやく開放された隼人は、座り込んだまま体のあちこちをさすった。

「あーようやく解放された。ありがとう、ハルさん。……アキも」

血が通う人間ならそこここが赤くうっ血しているだろう箇所を探りながら、隼人は礼を言った。全く痛くはなかったが、自力で動けないのはつらい。じたばたもがく隼人を笑いながら見ていたアレックスは、簡単にロープの解き方を見破ったハルに彼なりの賞賛の感想を述べた。

「あはは、よく分かったねぇ、そのロープの仕組み！　ふふ、やっぱりバカ女はバカ女だねー」

アレックスが自分を見て本当に馬鹿にするように笑うのを、アキは口を尖らせて睨んだ。そんなアレックスの発言を、シスコンのハルが見逃すわけもなく。

「おい、コラ、人の妹に向かってバカ女とはなんだ、小僧」

ハルの大きな拳が、アレックスの美しく輝く金の髪にどかんと落ちた。

「痛い！　ああ、もう、実体で来るんじゃなかった！」

頭を両手で押さえながら涙目になって言うアレックスを、アキも隼人もいい気味だ、と内心で思った。そこでアキはふと首を傾げた。

「……アレックス、一昨日来たときは半透明じゃなかった？」

壁に寄りかかったり椅子に座っていたりはしたが、彼はずっと半透明で、体が透けて後ろが見えていたのだ。

「今日はアレックスも＞天使の器＜使ってるんだ。短時間なら正天使になってしまうこともないし、せっかくだからって」

アキの疑問に答えたのは隼人だった。そして隼人も、半透明でないということは、未だに＞天使の器＜を使っているということを意味していた。もうすぐ融合してしまうからと強制送還されたというのに。

「……大丈夫……なの？」

隼人の隣にしゃがみこんだアキは、その腕に触れつつ、心配そうに呟いた。アキの言いたいことを汲み取って、隼人はふっと視線を逸らした。

「いいんだ、僕は、もう……」

「あらあら、何を言うつもり？」

いつの間にか栄と並んで縁側に腰掛けていた葵の声が響いた。軽い口調ではあったが、鋭い空気を孕んだ葵の声に、隼人はぎくりとした。

「もー、だからロープで逃げられないようにしておいたのに。ハルったら妙なところで頭働くんだから。さすが私の息子」

最後は自画自賛の台詞だったが、葵は気にせず先を続けた。

「……で？　隼人君。あなた私と約束したよね？　正天使にならずに帰るって。だから連れてきたのに、まだ諦めてないわけ？」

この場に登場してからこれまで、呆れるほどに気の抜けた雰囲気を演出してきた葵であったが、急にがらりとその空気を変えた。真剣な表情と奇妙なプレッシャーが、場に緊張をもたらす。

葵から顔を背けて黙ってしまった隼人の態度は、葵の言葉通りまだ諦めきれない想いを物語っていた。

「まだ分かってないみたいだから改めて言うけど」

葵はばさりと重そうな翼を揺らし、立ち上がった。

「こうして三人ここへ来たのは、隼人、あなたがアキに最後のさよならを言いたいっていう我侭を叶えるため、そうよね？　そして私は言った。絶対に、あなたを正天使にはしない。だからあなたがここから逃げないようにわざわざ付いてきたの。……正天使としての私に戻って」

「え……」

さく、と土を踏んで目の前まで歩いてきた葵を、隼人とアキは仰ぐように見上げた。その威圧感。背中で風に揺れる六枚もの翼が、大きな影をつくっている。とんでもない母の告白に、アキは驚いて言葉を失った。

「え、母さんって天使……だったの……か？」

先ほどからの疑問を素直に口にしたのはハルだ。そして無意識に、父親の方を見遣った。

栄は縁側に静かに座ったまま、アキ達がいる方を見つめていた。ハルに見られていることに気づくと、ふっと口元を緩め、何もかもを許しているように、笑った。その笑顔を見てハルは理解した。父さんは、知っていたのだ、と。

「私は生粋の天使なの。＞天使の器＜で創られたものではなくてね。まぁ生粋だろうが大抵は感情を持たない人形みたいなものなのよ、天使って」

しゃがみこんだアキと隼人を見下ろす格好で、葵は話し始めた。アレックスすら緑の瞳を大きく開けてぽかんと話に聞き入っている。

「ところが私は生まれたときから感情も人格も意思も、全て人間と同じように持っていた。要するに異端児よね。……省略して話すけど、いろいろあって天界を出て、あんた達のお父さんに会って、結婚して、あんた達が生まれて、で、死んで」

身振り手振りを交えながら、何十年か分の物語を一掴みにまとめて話すと、葵はひとつため息をついた。

「どうも環境が合わなかったみたいで、天使の体は長く持たなかった。でも死んだって言っても元々この世界の生き物じゃない。体はすっごく弱ってたけど、火葬場の火力くらいじゃ燃えないのよ。……だけどここに留まることは出来なかった。だから体と力を隠して天国で暮らしてたの。天界には行きたくなかったから。すっごく嫌なところなのよ、あそこ」

何か嫌な思い出を思い出したかのように葵は眉を顰めた。緑と黄色の向日葵が、内緒話をするようにざわりと風に揺れる。

「正天使……しかも半端に力を持った“大天使”だってことが知られると天界に連れ戻されちゃうでしょ。だから今までずーっと出来るだけ見つからないように天国に隠れてたのよ。……でも、あなたが来た」

葵の澄んだ瞳が、隼人をまっすぐに見つめた。もうそこには先ほどの圧力も、意地悪さも含まれてはいなかった。この話を聞かされてはいなかったのだろう、戸惑いつつも隼人は黙ってその視線を受け止めた。

「あなたは、私の息子同然だと思ってる。そりゃ生きてるときには会えなかったけど、アキの恋人だもん、そのうちホントの息子になったらなって思ってたの。……けどあなたは死んで私の前に現れた。だから助けたかった。あなたがせめて天国で幸せに暮らせるようにって」

優しいぬくもりに包みこまれているような、そんな感覚に隼人は泣きそうになった。

葵がそんなことを考えていたなんて、今まで知らなかった。思いも寄らなかった。自分のことを大切に思ってくれていることは確かに感じていたが、まさか息子だと、思ってくれていたなんて。

「それなのにあなたったら、正天使になるとか言い出して！　二度と転生できないって言ってるのに、妙に頑固だから、力使わずにいられなかった！　強制送還とか、悪いと思ったけど、なりふり構っていられなかった」

葵の口調がどんどん荒くなっていく。息も上がって泣きそうな顔になっている。

「もう天界に連れ戻されたって仕方ないって、私の存在で、あなたが正天使にならずに済むなら……だからこうして体も元に戻した……。全部、あなたを守りたくて……」

涙は見せていないものの、葵の顔は真っ赤に染まっていた。怒りとか、悲しみとか、悔しさとか様々な感情を超えてただ、照れているんだなと、ハルは思った。

「……こんなに大切に想われてるのに気づきなさいよ！　もう……バカなこと言わないでよっ……」

隼人は唇をかみ締めて何かを堪えているようだったが、その瞳から抑えようのない感情が、一筋の線を描いて零れ落ちた。

最後の言葉を振り絞るようにして吐き出した葵は、真っ赤な顔を隠すように両手で覆ってしまった。肩を震わす葵にいつの間にか近くに来ていた栄が寄り添う。労わるような、慈しむような瞳でしばらく妻を見つめていたが、その視線を、そっとアキに移した。

未だしゃがみこんだまま、声も出さずに涙を流す隼人の隣で、隼人の背中をさすっていたアキは、父親の視線に気づき、それが意味することを理解した。

「ね、隼人……私の話も、聞いてくれる？」

耳元で囁くように呟かれたアキの言葉に、隼人はゆっくりと顔を上げた。涙で真っ赤に濡れた瞳で、こくりと頷く。

母の話を聞きながらじっと様子を見守っていたハルは、よろりと数歩歩くと気が抜けたように縁側に腰を下ろした。

「……なんだかなぁ」

ぼそっと呟いて苦笑すると、こちらを見つめるアレックスの視線に気がついた。紹介されてはいなかったが、彼がナツ言うところの金髪天使だとハルは納得した。確かに金の短髪が太陽に煌めいて綺

麗だし、生意気そうな顔つきはナツとは馬が合いそうにない。

アレックスは両腕を組んだまま居心地悪そうにひとつため息をついて、ハルに向けて言った。何だか不貞腐れたような、馬鹿にするような表情だったが、どこか羨ましそうに。

「……ほんっと、不器用なヒトたちだよねぇ……」

全く同感だ、と言わんばかりにハルは大きく頷いて、また庭に佇む四人を見つめ笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8097z/

神様の絵の具

2012年1月14日20時52分発行